
アルセオ・サーガ

+

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルセオ・サーガ

【Nコード】

N9400V

【作者名】

十

【あらすじ】

十八歳になる朝、フレンは帝国兵士の登用試験を受けるため、帝都アルダナへ出発した。

育ての親の一人であるガ口に鍛え上げられ修得した徒手格闘術を使い、見事試験に受かり帝国兵士となったフレンは、ある任務の最中に自分が魔法を使える人間であることに気づく。

王族のみが魔法の力をもち、そしてその威光により広大な領土を統治しているこの大帝国で、自らの存在自体に大きな謎を抱えながらも次々と功績を収め、一兵卒から救国の英雄へとフレンは駆け上が

うんげん。

プロローグ

（現在）

「三十二番残れ！ 次！ 百五番、前へ！」

今にも降り出しそうな重苦しい空模様の下に、むさ苦しい男の声が響く。

徒手の三十二番と呼ばれた青年の前に、稽古用の木剣を持った百五番が真向かう。進行係の兵士の掛け声で、大男は三十二番に木剣で斬りかかった。

手入れの忽略な黒く波打つ髪をした三十二番は、名をフレンといった。

百五番と呼ばれた大男は肉付きも良く、取り分け身丈も滅法高かったが、一般的にいうのなら、フレンも背の高い部類の人間であった。

彼は、十人勝ち抜けば合格の約束じゃないか、と内心でうんざりしながら、それなりの速度で一直線に彼の頭を目掛けて飛んでくる木剣を、その均整の取れた彫刻の様な体を左に少しずらして避けながら、大男の手首を右手で掴んで、空いた左手で大男の右肩の少し下の辺りに掌打を打ち込んだ。

帝都アルダナに燦然と聳え建つ、フェランディエーレ城の城内、正門をくぐって西に折れて少し行くと、兵士達の訓練場がある。その一角、訓練場のなかでも特に開けた場所で、帝国兵士登用試験なるものが慣行されていた。

周りには受験者たち三百人程が列を成して並び、試合うスペース

の前にある急拵えのテントの下には、少しばかり位のある騎士と見受けられる人物が三人座っていた。

「三十二番、残れ！ 次！ 百六番！」

肩の関節を外され悶え苦しむ大男が、二人掛かりで担がれていくのを尻目に、進行係がまた叫ぶ。

「あの」

フレンは進行係に話しかけようとするが、進行係はほかの兵士と話しているため、フレンなど目にも留めない。

「なに？ 百六番と百七番が居ない？ 逃げ出した？ 怪しからん、不合格！ 次！」

「ちよつと！」

少し叫んでみる。

「なんだねっ！」

やっとのことで進行係がフレンのほうを向いた。気のせいか目が血走っているように見える。

「十人勝ち抜けばその場で試験に合格だって説明を受けたのに、次の人で確か二十六人目なんですけど」

フレンの申し立てに、進行係は意見を伺うようにテント下の騎士

を見た。騎士の一人がその答えとして、首を横に振った。

「百八番前へ!!!」

フレンは、眉を顰め軽く溜息を一つついたあと、次の対戦者に備えた。

百八番は背の高い、若い男だった。

始めの合図が掛かると、百八番が上段の構えから正直に真っ直ぐと切りかかってきたので、フレンは半歩引いて剣を寸で避け、その後素早く大きく一步踏み出して百八番の喉を軽く押し叩いた。百八番は喉を押さえながら、後方へ派手に吹っ飛んだ。

「次っ！ 百じゅう……ひゃ……ひ、百九番！ 前へ！」

叫ばされっぱなしの進行係も次第としどろもどろとなってきた。

「百九番！！ いないのか?!」

進行係の雄叫びに、列の後ろの方から、なにやら声をあげながらフレンの試合場の方へ走ってくる影がある。

「百九番いるぜえ！ ちょっとナニをひねり出してたもんでよ。いや！ それにしても城の便所つちゅうもんはとんでもなく綺麗に作ってあるな。良い記念になったわ！」

百九番の男がフレンの前に出てくる。フレンは少しだけ驚いて、そのアーモンド形の二つの目を瞬いた。

「おまえは……」

百九番はフレンの目の前、鼻先まで近づいてくると、その汚らしい口をにやりとさせた。

「おう！ また会ったな、いつかのお兄さんよお。これで俺はお前のことを公式に滅多打ちに出来るっちゅうわけだ！ 悪く思っなよ！ それにしても凄い偶然だぜえ。お前今何人に勝ち抜いたんだ？ん？ 俺が呼ばれてお前がいるっちゅうことは、少なくとも一人には勝てたんだろ？ 運がついてるじゃねえか。ま、俺にはそのままの意味でウンが……」

と、百九番のなんとも汚らしい口上の途中で、進行係が始めの合図を叫んだ。

百九番はそれを聞くや否や、傍に落ちている木剣を右手で素早く拾い、立ち上がると同時に左手で砂を掬ってフレンの顔に打ち浴びせた。

そして木剣を両手で握り、今までの対戦者とは比にならぬほどの速度で、フレンの脇腹目掛けて剣を振った。

太陽を厚い雲が完全に覆い、辺りには薄く闇が広がった。参加者全てに等しく、厭な湿気が纏わりつく。

雲の重み耐え切れなくなった空が、ぽつぽつと雫を垂らし始めた。

第一節 ナイフ

（十日前）

帝都アルダナから数えて帝国第六番目の都市、バツハモンテから街道を馬で四半日、そこから街道を外れ、名も無き小さな森の獣道を四半日歩くと、穏やかな流れのブルーナ河の畔に低い丘がある。丘の上には小さいながら立派な畑と、木で確りと組まれた二階建ての家があつて、そしてその中で、フレンは十八歳の誕生日となる日の朝を静かに迎えていた。

いつもなら森から日の出と共に河に向かつて飛んでくる鳥の鳴き声で目を覚ますのだが、今日に限っては不思議と独りで目覚めた。寝起きの気だるさも、まだ横になっていたという気持ちさえもさっぱりなく、フレンは淡々と身支度を始めていた。使い古したブーツの紐をいつもより少し強めに結び、シャツの上から革のぴつたりとしたベストを羽織った。左腕と両太股にベルトを巻き、太股のベルトの鞘には一丁ずつナイフを挿した。一旦自室を出て、一階へ降り、石造りの台所にある流しで、石鹸を使い顔を洗って、伸びきった黒く波打つ髪を耳に掛けてから、ナイフで髭を剃った。それからまた階段を登って二階に戻り、自室と向かい合わせの同居人の部屋の扉を、二度叩いた。

「ガロじい。朝だよ」

フレンは返事を待たずにまた階段を降りた。階上でする物音で同居人が起きたことが分かる。居間にある囲炉裏に火を起して、昨日

のスープの残りを温めながら朝食分のパンを切り分ける頃、二階から寝巻きのままの老人が降りてきた。

「まったく因果なものだな……しかし、昨日の酒がまだ残っとるらしい。気分が良くないわ」

老人は不機嫌そうに小声でそう言うと、二つしかない椅子の一つに座った。老人の頭はすっかり禿げ上がってしまったが、足取りは寧ろそこらの若者よりしっかりしていて、伸ばし放題の髭もまだ黒い。

「慣れないのに酒なんて飲むからさ」

フレンは自分の笑みの端に寂しさが滲むのに気づいて、笑うのをやめて俯いた。

「めでたいことがありゃ、酒を飲むんだ。どこの国でも、それだけは同じだ」

老人はそう言いながらパンを乱暴に齧った。じゃがいもだけが入ったスープが温まる頃には、二人は黙々と朝食を食べ進めるのみで、卓上に会話は無くなっていた。

フレンは六年前、このガロに拾われてこの家にやって来た。

そして今日、十八の誕生日にフレンはランベルト帝国の兵士に志願するため、帝都アルダナへと入隊試験を受けに出立する。

「ガロじい。そろそろ俺行くよ」

フレンはそう言って立ち上がった。ガロは無言のまま頷くのみだった。

扉横に掛けてあるマントを羽織って、拳大の袋を腰に下げた。

「待ちなさい」

フレンが玄関の扉に手を掛けた時、ようやくガロが立ち上がってフレンを呼び止めた。振り返るとガロは手に一丁のナイフを持っていた。

「これを持っていきなさい。私が昔使っていたものだ。私の命を幾度となく助けた。また同じように、お前の命も助けてくれることだろう」

フレンは黙ってナイフを受け取った。柄の部分には帝国の紋章が刻まれている。フレンはそれを太股に収めてあるナイフ一丁と交換して、自分の物をガロに渡した。

ガロはそれを受け取ると、にっこりと笑って手を伸ばし、今では頭一つ自分より大きくなったフレンの肩に手をぽんと置き、その琥珀色の瞳をしっかりと見据えた。

六年前、この家に来たあの時より顔の皺が増えたな、とフレンはガロの笑顔を見てふと思ひ、同時に自分の最古の記憶から今までの出来事が、頭の中を駆けていった。

第二節 アデル

（九年前）

フレンが臆気ながら今でも度々思い出すのは、路地裏でごみを漁って食べ物在必死に探している自分である。星一つない冬の夜、立ち並ぶ家からでる暖か気な光の滓を頼りに、切れ切れになった手でごみ捨て場を掻きまわす。自分がそのとき何歳であったかも定かではないが、何とも言い難い体を侵されているような全身を包む異臭と、手の痛みだけは脳裏にしつこくこびりついている。

幾つかの孤児院に居たこともあったが、その琥珀色の眼を不吉がられて長く置いてもらえることはなかった。

また亡き母と思しき女性の姿は、何枚かの絵画のように、いくつかの瞬間の画だけなんとか記憶していたが、恐らくその女性と一緒に暮らせたのは生まれてから数年間だけで、まったく記憶は冴えなかった。そして殆どの場合、その記憶の画の中で彼女はフレンを覗き込んで笑っていたが、顔は靄が掛かったようにはつきりとは判らず、その上それが本当にフレンの母親であるのかも全く定かではなかった。しかしフレンはとりあえずその女性は自分の母で、そして彼女は自分が小さい頃に死に、それまでは全力で自分を愛してくれていたのだ、と勝手に思うことにした。

そうしてフレンは、ごみを漁り、またあるときは商店に並ぶ食べ物を盗み、孤児院を転々としたりして、辛うじてその小さな生を一日、また一日と繋いでいた。

そんな日々を送っていたフレンに、アデルという少年が何気なく声を掛けてきた日を、フレンは忘れたことがなかった。それは、い

つものように人目につかぬ様、日が暮れてから、なにか食べるものや少しでもお金になりそうなものが無いものかと、街をうろつろと歩き回っていたのだった。

「おい、お前変な眼の色してんな！」

フレンより少し背の高い、ぼろぼろの服を着た少年が小路の向こうからやってきて、フレンの前で立ち止まりそう言った。しかしフレンは眼のことを言われ、少しうんざりした顔をしただけで、あとは無視して少年の横を通り過ぎようとした。

「俺もいっしょだぜ！ ほら、青色なんだ！ 王族の証だぞ！！！」

少年はフレンの肩をぐつと掴み、満面の笑みでそう言った。思わず目の中を覗き込むと、確かに少年の瞳は今まで見たどんな人間よりも青く透き通って、まるで小さな快晴の空を二つの眼球に押し込めたようで、フレンは思わず息を呑んだ。

「おい、何とか言えよ。俺はアデルっていうんだ。お前は？」

少年は尚も馴れ馴れしくフレンに話掛けてきた。恐らく身形を見て、“同類”だと思ったのだろう。また同じく、フレンもアデルを見てそう思っていた。

「……………フレン」

フレンは幾許かの沈黙のあと、掠れた声でそう言った。自分ではもう少し大きな声を出したつもりだったが、思った以上に長い間声を発していなかったため、ほとんど咳きをしただけのような自己紹介になってしまった。

「フレン？ フレンか、いい名前だな！ 誰がつけてくれたんだ？」

アデルは歯が抜けた間抜けな口元で、またニツと笑った。アデルはフレンと同じ匂いがした。汗と腐った野菜と、子供の匂いだった。

「知らない。気づいたらそう呼ばれてた」

「そうか！ 俺は自分で決めたんだけ。お前、年はいくつだ？」

「わかんない」

アデルはフレンの肩をずっと掴んだままだったが、フレンは厭な気はしなかった。近くで並んでみると、アデルの方が頭一つ分背が高い。

「わかんないって、そんなことあるのか？ よし！ お前俺より背が低いから、俺より一つ年下だな、多分！」

フレンは子供心ながら随分乱暴な理論だと思ったが、これもまた悪い気はしなかった。素直に頷いておいた。そうしてフレンは自分の年齢をこのときに、九歳と決めただけだった。

「お前寝るとこ決まってるのか？」

フレンが少し考えてから首を横に振ると、アデルはついて来いという風にフレンの手を引いた。

「俺が使ってるって、教えてやるよ。寒くなくて、鼠が居なくて、いいところなんだぜ」

唐突で、滑稽で、慣れていないこの事態に動揺もしたが、結局フ

レンは口を挟まず、アデルに手を引かれるままついていくこととしたのだった。

九歳の冬の、夜明けのことだった。

第三節 ヤーゴ

（七年前）

アデルとフレンは出会った日から、一緒に行動するようになった。凍えるような寒さの日には体を寄せ合い、恵んでもらったパンはきつちりと二等分した。アデルは年長者らしく、フレンを守ってやるのだという気概を持っている風だった。弟という言葉を知っていたかも定かではないが、アデルの振る舞いは兄というもので、そのものであった。

二人は夜な夜な、色々な話をした。最も多かったのは知らない言葉についてだった。フレンは街中で聞いた知らない言葉に一々興味を示し、アデルにその意味を聞いた。尤もアデルもその意味を知らない場合がほとんどであったので、結局次の日に二人で親切そうな大人に聞いて廻ることが多かった。

またアデルは、自分が王家の血を引く者だという話を熱心に何度もフレンに聞かせた。アデルが言うには王家の血を引く者は瞳の色が青いらしく、言われてみれば確かにフレンはアデル以外に瞳の青い人間を見たことが無かった。しかしどう考えても、爪先を垢で真っ黒にして、道行く人に物乞いをする王族がいるはずも無いので、フレンはその話を話半分に聞いていたのだが、あまりにアデルが真剣な眼差しで語るので一度もその話を否定したことはなかった。

フレンたちが暮らしていたプラデスという街はランベルト帝国の領土内でも北の方に位置し、帝国のなかでも取り分け冬が長く寒さの厳しい土地だったため、凍え死にそうになったことも何度かあっ

た。しかしプラデスは帝国から程よい距離にあり、周辺一体の交易の中心地として栄え、度々市場も開かれていたので、そういう意味では、親を持たぬ子たちにとって幸運な場所だったともいえるだろう。

そのようにして、冬の寒さ、飢えを凌ぎ、まるで鼠のように生き過ぐして、凡そ二年の時が流れ頃だった。短い夏がやって来て、フレンたちは喜々として毎日街の近くの小さな湖に水浴びに出かけた。体力は奪われたものの、冬には得がたい爽快感と、また二人の生活にない娯楽を水浴びに見出したのだった。

ヤーゴという怪しげな男が二人に声を掛けてきたのは、そんな夏の昼下がりのことだった。

第四節 オルエツタ

「おい！ そのおめえたち！」

フレンたちに声を掛けてきたのは、汚らしい中年の、馬に跨った男だった。着ている物はそこそこ値が張りそうな刺繍の入ったものであったが、髭は伸ばし放題、歯は黄ばんでいて、腹は子供一人分ぐらい出しており、下品さが漂っている。ついでに乗っている馬さえも品の無い泥だらけのみつともない鹿毛であった。

「なに？ おじさん」

呼びかけに答えたのはアデルだった。湖の淵にいる男に、大声で返す

「おめえたち、家はあるのか？ おれあは“東雲の旅団”のもんだ。家が無えなら水から上がって、服を着てついて来い。仕事と寝る所と、食べるものをやるぞ」

唐突な提案に二人は至極戸惑った。“東雲の旅団”とは帝国全土で活動している巨大な犯罪結社のことで、フレンたちにもその名は聞き及んでいた。

「やめておいた方がいいよ。なにされるか分かんないよ」

フレンは即座にアデルに小声でそう告げた。というのも、アデルの深く青い眼は既に、あの汚らしい中年に向けて輝いていて、今にもついて行きそうだと感じたからだだった。

「何言つてんだ、これはチャンスだろ！ フレンはこのままずっとごみを漁って生きていくつもりかよ。冗談じゃないぜ」

「そんなこと言ったって、リヨダンだよ！ 盗み以外は何でもありで、名誉のためなら人だって殺すんだよ！ どうせ扱き使われて、また不吉だとかなんとか言つて、捨てられるのが落ちだよ！」

「旅団だろうがなんだろうが、関係ない！ これを足がかりにして、寝る所も手に入れて、ちゃんとした服を着て、それから剣を習うんだ！ そうして騎士になって、アルダナに行つて、クラウディオ王に会うんだ。そしたら王様が俺のこと、王族の血筋だつて解つてくれる！ プラデスの門兵は話すら聞いてくれなかつたけど、王様なら大丈夫だ。王族だけが使える魔法の力で、きつと俺の血筋を解き明かしてくれるはずさ！ そうしたらフレン、お前だつて貴族にしてやるぞ！」

「ぼく、貴族になんてならなくていい！」

「ばか！ 今の俺達なんて貴族どころか、平民以下犬以下だ！ 糞みたいなもんさ！ そこらへんで野垂れ死ぬのは目に見えてるじゃないか」

そんな小声での激しい口論が馬に乗った男の耳に届いたかは判らないが、男は二人はついてこないと判断したのか、馬をゆつくりと街のほうへ進めだした。

「くそつ！ 行つちまう！ フレン、俺は行くぞ。何としても俺は王宮に入るんだ！ そのためにこれは必要なことなんだ。もしお前がついて来ないってんなら、俺とお前は、もうここでさよならだ」

男が去っていくのを見かねてアデルはフレンにそう言い、走り出した。こうなつては、実質フレンに選択の余地は無いに等しかった。

「待つてよ！ ぼくも行くよー！」

そうしてフレンは仕方なくそう叫び、アデルのあとを追い、怪しげな勧誘話に乗ることとなった。

フレンたちが案内されたのはプラデスの繁華街の端にある荒ら屋の一部屋で、ぼろぼろの布が何枚か敷かれたベッドが二つあるのみだった。

「ここがおめえたちの部屋だ」

フレンたちを誘った男は扉を開けてそう言った。男は道中で、自分の名前がヤーゴだということと、旅団はこうして浮浪児たちを度々保護し、そして“仕事”を手伝わせているということ話を話した。

「わあ！ 屋根も壁もあるね」

フレンはここまでくる途中、幾らかアデルにこの“旅団入り”に反対するようなことを小声で言っていたが、部屋に案内されるとこれを素直に喜んだ。アデルはそれを聞いて、だから言ったのだろ、と得意げに胸を張った。

「おめえたちの面倒は、オルエッタが見てくれる。どれ、ちよいと呼んで、紹介でもするか」

そう言うと、ヤーゴは二階に向かっていきなり、オルエッタ、と馬鹿でかい声で叫んだ。

ヤーゴにそう呼ばれ、二階から降りて来たのは、黒ずんだエプロンを着けた、年の頃十五、六といった少女だった。

「なに？ ヤーゴ」

決して美しいわけではなく、元は金色であつたらう少女の髪は煤けて暗くなり、ヤーゴと同じくまったく上等な衣を纏っているわけではなかったが、少女には凜とした涼しげな雰囲気があつた。

「おう、オルエッタ！ 新入りだ！ 面倒を見てやってくれ。それとほれ、今月分だ」

ヤーゴはにやつと笑つと、懐から金貨袋らしきものをオルエッタに手渡した。

「ありがとう、ヤーゴ。それで、この二人にはなにをさせるの？」

フレンとアデルはここぞとばかりに聞き耳を立てた。

「まだ決まつてねえ。ルシオに明日聞かなきゃな」

ルシオ、ヤーゴにオルエッタ、沢山人の名前を覚えなきゃ、とフレンは顔を顰めた。今までの生活には全く無かつたことだつた。

「そう。夕飯はどうするの？」

「いらねえ。娼館に寄らなきゃいけねえかつら、向こうでなんか用意させる。おれあまた明日来るかつらよ。ガキどもの世話を頼む」

そう言つてヤーゴは荒ら屋を急ぎ足で出て行つた。

オルエッタはヤーゴを見送つたあと、扉に心許ない、稚拙な鍵を掛けた。

「ねえ、お姉さん」

アデルはヤーゴが居なくなるのを待っていたように口を開いた。どうやら、ヤーゴの雰囲気あまりに怪しげで怖かったため、緊張していたようで、それはフレンも同じだった。

「オルエッタでいいわよ。なに？」

「オルエッタも旅団の人なの？」

「そうよ」

オルエッタはそう言うと、こっちにおいで、と手招きして二人を居間に連れて、食卓に座らせた。虫が食ったように穴あきが酷いテーブルではあったが、四人分の確りとした椅子が備えてあった。

「オルエッタは何する人？」

アデルは立て続けに質問した。フレンは久しぶりの屋内に感動して、室内を見渡すことに夢中だった。なにしろ、二人の不潔な格好では、まともに商店でさえ入れてもらえなかったのだ。

「私はプラデスにいる旅団の人の世話をしているの。あなたたちみたいなお子供の世話や、娼婦のケア、連絡係なんかをね。あなたたち名前は？」

「おれはアデル！ こっちはフレンっていうんだ。おれは十二歳で、フレンは十一歳なんだ」

アデルがテーブルの向こう側のオルエッタに胸をはる。

「ほんとにここで暮らしてもいいの？」

一通り部屋を見渡したフレンが、急に不安になって口を開いた。

「そうよ。豪華でも大量でもないけれど、ちゃんと食事もあるわ。その代わりあなたたちは“仕事”をしないとイケないけれど……」

仕事、という言葉に二人は敏感に反応した。その筈、街を彷徨い暮らしていた二人にとって、ここでの暮らしは夢のようなものになるはずで、そしてその代償となるのが“仕事”だからである。

「その、仕事って……酷いことさせられるの？」

堪りかねてフレンが口を開く。

「そんなに怖がることないよ。旅団には子供にしかできない仕事つてのが幾つかあってね。ま、どれもそれほど危険なもんじゃないよ」
それほど危険ではない、がどれくらい危険なのか、フレンにはまったく想像がつかなかったが、一応オルエツタの言葉はそれなりの慰みになった。

「そら、あなたたちお腹減ってるんでしょ！ 今日だけは特別にお腹いっぱい食べさせてあげるよ！ ヤーゴからお金ももらったしね」

オルエツタがそう言うと、二人は希望に胸が躍り、仕事への不安など吹き飛んでしまった。食べ物をお腹いっぱい、と想像しただけでフレンはお腹を大きく鳴らし、照れ笑いをした。

第五節 散歩

「はい、白のブラウリオの賭け箱ははこっちだよ！ そこにいる髭のお兄さんの犬ね！ 名前と金額書いてこの箱に入れてくんない！ 赤のフェリチアーノに賭けたいなら、あっちの箱だよ！」

アデルが自分の腰ぐらゐまでの高さのある木箱をもって、盛んに叫んでいる。その前にはちょうどフレンの背の高さぐらいの板で囲まれた長方形のリングがあつて、リングの両端には檻が備え付けられていて、中にはフレンぐらいの子供であればぺろつと食べてしまふであろう、いかにも獐猛そうな犬がそれぞれ一匹ずつ入れられていた。白、赤というのはコーナーの色で、賭けを解りやすくするためのもので、ブラウリオ、フェリチアーノというのは犬の育て主の名前である。

フレンとアデルが東雲の旅団のヤーゴに拾われて、早三ヶ月が過ぎようとしてた。二人はプラデスの街の旅団員達の連絡係を二ヶ月間勤めて、旅団員の顔と名前を覚えたあと、闘犬賭博の仕切りの手伝いをさせられるようになった。

リング兼賭場兼一部の闘犬の犬舎は、フレンたちが寝泊りしている荒ら屋のすぐ近くにあり、二人はほとんど毎日賭場と荒ら屋とを行ったり来たりする生活を送っていた。

「あと二十秒で締め切るよ！！ おまけはしないからね！ あ、グスターボのおっちゃん！ おっちゃんは駄目だつて！！ ジェラールから厳しく言われてるんだ。借金返さないと、賭けちゃ駄目だよ」

リングを取り囲む人だかりに向かって、アデルは景気良く叫び続けている。フレンも、赤はこっちだよ、と必死に大声を出した。

「はい、締め切るよ!!」

アデルの掛け声で、人だかりがいち早く闘犬見物にいい場所を確保しようとして、リングを中心にわつと集まった。リングの両端の檻をそれぞれの犬主が棒切れで叩いて、犬を興奮させた。

そこで、賭場の仕切り人の男が、リングの近くにある踏み台の上に立って、アナウンスをし始めた。

「白、ブラウリオ！ 赤、フェリチアーノ！ フェリチアーノは現在五連勝中だ!! さあ……」

観客がジェラルルの声に沸く。と、フレンたちの仕事は毎日ここまでだった。二人は、オルエツタから闘犬そのものを見ることを、禁じられているのだ。

犬のうなり声と、観衆の熱気の籠った歓声を背にして、フレンはアデルと共に、興行主であるジェラルルがいる事務所の部屋まで賭け箱を届けに行った。

事務所はリングのある部屋からさらに奥に行った所で、短く暗い廊下を通ると頑丈な扉が現れた。フレンがその扉をノックすると中から、入れ、と声が聞こえた。

「ジェラルルさん、今日最終の賭け箱です」

フレンとアデルは常に一緒にいて、仕事も一緒にこなしたが、いつもこういう時に喋るのは年長者であるアデルであった。

「おう。そこに置いてくれ」

部屋に入ると、真っ先に机の上に足を乗せ、ふんぞり返っている

四十歳くらいの男が目にはいる。ジェラールである。そしてその横の事務机には、オルエツタと同じ年の眼鏡の女、ティティアナが必死に証券の準備をしていた。ティティアナは朝からの夕方までの賭けの全てを、証券に起すことを仕事にしている旅団員だった。

ティティアナが書き起こした証券は、賭け主達に賭場で渡され、賭け主たちはそれを持って換券所に行くのである。勝った賭け主は証券と金貨を引き換えることができ、負けたものはその証券分の借金を賭場に負うことになる。そしてもちろん、返済しなければ旅団が取り立てるのである。

「おう。そういえばヤーゴさんがお前達に話があるそうだ。犬つこの散歩が終わったらそのまますぐ帰んな。賭場の掃除は明日の朝やりゃいいからよ」

ジェラールが踏ん反り返ったままそう言うのを聞いて、二人は顔を見合わせた。

「わかりました。じゃあ、今日はこれで失礼します」
「失礼します」

アデルのあとに続いてフレンがそう言い、二人は事務所を出た。

「話ってなんだろうね?」

と、歩きながらフレンが首を傾げる。リングのある部屋へ戻ってくると、今日最期の闘犬はもう終わっていて、客がぞろぞろと帰りだしたところだった。

「さあ、なんだろうな。また“おれたつち”の仕事が変わるんじゃないかねえか?」

慣れてきた仕事がまた変わってしまう不安がフレンの頭を過ぎったが、アデルがヤーゴの真似をしたのが堪らなく愉快で、二人は腹を抱えて笑いながら犬舎へ向かった。

リングのある部屋から、出口へ向かわず建物の裏の方へと進むと、犬を五頭飼育している犬舎がある。犬舎は貸し出し制で、月々借主から貸し賃をとっている。犬達の世話も基本的には借主の責任だが、今は五頭分全て同じ人物に貸しており、餌やりや散歩なども賭場が別料金で請け負っていた。

「よし、皆集合」

フレンは首からぶら提げている犬笛を吹きながら、檻の鍵を外してまわった。よく躡られている五頭の犬達は、檻の鍵が開くと、犬笛を吹いているフレンの周りに集まった。犬笛とは人の耳には聞こえず犬の耳にだけ聞こえる、超高音を出す笛で、今預かっている犬達はこの犬笛によって命令を聞き分けていた。

犬の散歩は毎日必ず同じ時間に行かなくてはならず、歩くペースもきつちり毎日同じにしろと、フレンたちは言われていた。それは犬の体調を管理するため、毎日同じ時間に餌をやるためであって、夕方の餌は散歩の後と決まっていた。時間的には、最終の賭場の手伝いを終えた後、事務所に行つてから犬舎に行くと、凡そちょうど時間で、街の中心から聞こえてくる夕方の鐘の音を、散歩出発の合図としていた。

いつものように、フレンとアデルは鐘の音を聞くと、賭場を犬舎の裏口から出ていつもの散歩コースを歩いた。躡けられているとはいうものの、フレンやアデルより一回りも二周りも大きく、生傷をそこかしこにつけた犬達が五頭も並んで道を歩いているものだから、道行く人たちはみな、フレンたちを避けて歩いていった。

散歩コースは、繁華街の端のほうにある賭場を出て、荒ら屋の横

を通り過ぎ、繁華街に入っただけでいかずにその外周をまわる様にあまり整備されていない道を行き、その後大きな商店が立ち並ぶフォン通りの一本外の道を下って、ロサノ一家が営む街に一つしかない鍛冶屋の前を通り過ぎてからまた賭場に戻ってくる、というものだった。

「ふう。今日もようやく終わったね」

フレンは犬に夕方分の餌をやりながら、アデルに言った。

「ああ。早く戻らないとな。ヤーゴさんに“叱られっち”まう」

アデルがそう言うと、二人はまた腹を抱えて笑い転げた。

それから笑いをやっこのことで治めると、二人は急いで犬舎を出て、寝床である荒ら屋に戻った。

荒ら屋で二人を待ち構えていたのは、今までよりもずっと危険な“仕事”であった。

第六節 誘拐事件

「ただいま、オルエツタ！」

「ただいま！」

二人は勢いよく荒ら屋の玄関の扉を開けた。玄関から続いている居間には、オルエツタとヤーゴが座っていた。

「おかえり、二人とも」

オルエツタが二人を微笑んで迎える。フレンとアデルにとってオルエツタは、年齢的には姉に近いものの、どちらかというと母親のような存在になりつつあった。

「おう！ まあ、座れや！ 今日はおめえたちちよいと話があるんだ」

ヤーゴが汚らしく伸びた顎鬚を摩りながら言う。フレンたちはそれに従って食卓にオルエツタとヤーゴと向かい合って座った。

「話ってなーに？」

まずフレンが口を開く。最初のころ、ヤーゴに抱いた恐怖はここ三ヶ月ですっかりとなくなってしまった。ヤーゴは格好こそ不潔で怖いものの、背も低く、良く笑い、気のいい男だったし、子供も嫌いでなく、フレンたちの面倒をオルエツタ同様よくみてくれた。

「いや、それがな、おめえたち最近子供を狙った誘拐事件の話聞いたことはねえか？」

ヤーゴの問いかけに、フレンとアデルは顔を見合わせた。そのよ
うな話は耳にしたことがない。

「だいたいフレンと同じくらいの年頃の子供達が狙われて、誘拐さ
れてるの」

オルエツタが不安そうに顔を顰めた。

「そんでもって、犯人の手がかりが全く出てこねえんだ。誘拐され
た子供たちは身代金を払って全員無傷で帰ってきてるらしいんだ
が、その子供の親たちが何故かなーんも事件について話そうそし
ねえんだ。そんで警吏が困ってうちのルシオに相談してきたんだ」

ルシオというのはプラデスにいる旅団を全て取り仕切っている、
旅団の幹部の男で、フレンたちはまだ会ったことはなかったが、偉
く若い頭の良く切れる幹部、ということは何んとなく聞いたことが
あった。

「なんで警吏が旅団に相談してくるの？ 敵同士じゃないの？」

フレンは思った疑問をそのまま口にした。

「東雲の旅団つちゆうのはな、そら犯罪結社だけでも、汚えこたあ
あんまりやらねえし、街の治安維持にだって貢献しとる。第一、警
吏だけで街が安全になるわけねえ。んだから、警吏と旅団は持ちつ
持たれつの関係なんだな」

ヤーゴが珍しく胸を張って答えた。

「それで、その誘拐事件つてのがどうしたのさ？」

アデルが待ちきれないといった風にテーブルに身を乗り出す。

「それが、おれたち旅団の人間が調査に乗り出したんだが、結局親どもは何故だか口を割らないし、子供たちには会わせてすらさえもらえねえ。そこで、実はおめえたつちに、事件の情報収集を手伝ってもらいてえんだ」

「情報収集？」

「同じ年頃のあなたたちなら、誘拐された本人たちになんとか話を聞きだせると、ルシオが考えたらしいの。調査にはヤーゴもついで行くし、危険なことはないわ」

オルエツタが、フレンの不安げな表情を察知して、安全だという風に付け加え、説明した。

「それだつたらおれたちに任せてよ！」

アデルはどうやら、この奇妙な事件の調査に乗り気らしい。どうせまた冒険気分なんだ、とフレンは横目で輝くアデルの目を見て思った。

「よし、んじやおめえたつち。今日のご飯食べて、風呂入って、寝れ！ 明日の朝また迎えに来るからよ。闘犬賭場の方は誰か別の団員を手配するから、明日からは誘拐事件に付きっ切りだぞ！」

ヤーゴは威勢よく、唾を撒き散らしながらそう言ったあと、いつものごとく勢い良く荒ら屋を出て行った。

「だいじょうぶかなあ」

フレンは不安になりそう呟いた。

オルエツタはフレンの向かいで励ますように微笑んでいて、アデルは心の中で既に冒険を始めているらしく、聞いてもいなかった。

第七節 訊きこみ

予告どおり、ヤーゴは次の日の朝、扉を壊すぐらいの勢いで荒ら屋に入って来た。

「おい、小僧ども！ 馬車に乗れ！ 隣街のアルファロまでいくぞ」

アデルは待つてましたとばかりに、即座に家の外へと飛び出していった。

フレンはというと、朝食のパンをヤーゴが扉を開けた衝撃で喉に詰まらせてしまい、それを牛乳で流し込むところだった。

「まつてよ！」

そう叫びながら、オルエッタに襷褌切れを縫い合わせて作ってもらった鞆を肩に下げて、アデルに続いて荒ら屋を飛び出した。

外は快晴で、日差しが眩しかった。荒ら屋の前には一頭立ての力ブリオレが停まっていて、それを引くのは、やはりヤーゴがいつも乗っている街一番の駄馬、イーグルスタインであった。

二人がヤーゴを挟みこむようにして馬車の両脇に乗り込むと、ヤーゴがイーグルスタインに鞭を打って、発車させる。

「ほんとに、名前だけは立派だなあ」

アデルがまじまじとイーグルスタインを見つめながら呟く。

「名前だけじゃねえぞ。走りだって立派なやつだ、イーグルスタインは」

ヤーゴが不服そうに返して、続けた。

「馬つてえやつはな、不つ思議な生き物なんだあ。犬っころみたい
に、ご主人様に一生懸命仕えるなんてこたあしねえんだ。乗り手は
馬になめられてもいけねえし、高圧的に命令ばっかしててもいけ
え。対等に、大地を共に駆ける友として！ そういう立場で……」
「あつ！！ 旅芸人だ！！ アルファロへ向かってるのかなあ。い
いなあ、見たいなあー」

アデルがヤーゴの演説を打ち消して、一本隣の街道を走っている
旅芸人の一団を指差して叫んだ。フレンはヤーゴのむっとした、な
んとも言えない表情をみて、笑いを堪えるのに必死だった。

「つたく、おれがせつかく講釈をだなあ……」

「ねえ！ もしあ的一座がアルファロへ行ってるんなら、ちよつと
だけ見物してもいいでしょ？」

アデルがヤーゴのほうを振り返り、懇願した。

「だあめだ！ おめえたちには仕事があるだろお！」

フレンは二人の横で、旅芸人一座を見ることができないのは残念
だけれど、代わりにいいものが見れたと、笑っていた。

そんな他愛もない話に二時間ほど費やすと、馬車はやっとアルフ
アロの街へと到着した。

「よっし。まずは一番最近の被害者のイバンっちゅう子供の家に

くぞ。街の西の八百屋の近くらしいが」

馬車が町へと入っていく。一頭立てなので、大体どんな道でも入っていった。

アルファアの街はフレんたちが居たプラデスよりも、少し田舎だとフレんは感じた。舗装された道も少なく、加えて轍の数もそれほどない。快晴の、澄んだ暖かい空気に乗ってきた蠟梅の花の良い香りがフレんの鼻をくすぐった。

「なんかプラデスより田舎だね」

アデルがぼそつと呟く。どうやら彼の期待に、アルファアの街は沿えなかったらしい。

「そらおめえ、プラデスは交易が盛んだからなあ。このアルファアからも農作物がプラデスに行くんだぞ」

ヤーゴが手綱を動かしながら答える。心なしかフレんにはイーグルスタインがうっとおしがっているように見えて、すこし愉快な気分になった。

馬車はそうして、どんどん街の東側へと向かっていった。どうやら街の中でも東側は住居が多く、西側は商店などが多い造りらしい。

「おっし！ おめえたち、降りろ」

ヤーゴが先刻いつていた八百屋のすぐ横に馬車を停車させた。指示どおりにフレんたちはキャリッジを降りる。

「とりあえずおれが話を訊きにいくからよ。おめえたちはその話

が聞こえる所で遊んでるふりでもしてる。ええか。悟られちゃあ駄目だからなあ。おれとおめえたちには関係ないふりするんだぞ」

アデルはヤーゴのスパイっぽい“指令”に、今にも敬礼しそうだった。今朝、荒ら屋を出発するときには、アデルのことを冒険気分の子供だと思っていたフレンも、ここにきてこの誘拐事件の調査も悪くない、と思い始めていた。

「おーいすまねえ！ 旅団のもんだがよお、話を聞かせてくれねえかあ」

ヤーゴが、フレンたちに目で合図したあと、件の家の扉をどんとどんと三度叩いた。中から応える女の声が出て、しばらくすると扉が空いた。フレンたちは急いで、“偽装工作”のための石を探して、二人で蹴り始めた。

「なんででしょうか？」

中から出てきたのは至って普通の、どこにでもいる母親、といった感じの女性だった。家の二階をフレンが見上げると、フレンと同じ年ぐらいの寝巻き姿の少年が窓から玄関を覗き込んでいた。窓の外の屋根には、洗われたあとのブーツが二足、干してあった。

「お宅の息子さんが誘拐された話を、ちょっと詳しく聞かせてくれねえかなあと、思ってたんだが」

ヤーゴにしては最上級に丁寧な頼み方だったのであるが、女性は誘拐という単語を聞くと直ぐに顔を顰めた。フレンには嫌悪感というより、恐怖に見えた。

「話すことは何もありません。息子も無事帰ってきましたし。犯人をあなた方が捕まえたって、身代金も返ってきやしませんもの」

「そうはいつでもなあ。また誰か別の子供が攫われたら大変だろう」

ヤーゴもそう簡単には引き下がらないようだ。

と、アデルがフレンを肘で小突いた。なんだと思つてアデルのほうを見ると、アデルは家の二階を指しており、窓から覗いていた少年がこちらに気づいて手を振っている。フレンもアデルと一緒に母親にばれない様にそつと手を振り返した。

「それにうちの息子は誘拐されて、とつても心が傷ついているんです！ もう外に出て遊ぶことさえできないくらいに！ その息子の想いを蒸し返さないでください」

息子を庇う母親の姿にフレンは胸が痛くなった。きっと隣のアデルも同じだろうと、フレンは思った。あんな風に誰かに護られたことのないフレンは、急に自分が欠陥商品のように、不完全な人間に思えて、憂鬱な気分になられた。

それから女性は、ヤーゴが他の子供はどうなるやら街の治安がどうやらずと、もごもごと話を訊く理由を探しているうちに、もう構わないでくださいと言って、家の扉を閉ざしてしまった。

扉に拒否されたあと、ヤーゴは振り返り、駄目だった、という風な目でフレンたちを見た。それから、とりあえず三人は他人のふりをしたまま、馬車まで戻って発車させ、件の家から少し離れることにした。

「駄目だったなあ」

ヤーゴが落胆したように呟く。

「うーん、何かわが子を誘拐された親としてはヘンな対応だったよね。全体的に」

フレンが心の中の憂鬱は無視することに決めて、女性の感想を口にする。

「だよなあ。なんつか腑におちねえよな」

アデルも同様の考えを口にした。

「ま、頼んで駄目なもんはとりあえずしょうがねえ。次は唯一の目撃者に話を訊つきにいくからよ。街の西に移動だ」

ヤーゴはそういうと、イーグルスタインに鞭を打った。その両脇では二人の小さな探偵が、“唯一の目撃者”という単語に目を輝かせていた。

第八節 犯行現場

三人はオルエツタの作ったサンドイッチを昼食に食べたあと、目撃者であるというビビアナという老婆に話を訊きに行くことにした。

ビビアナは街の西側の酒場の前のベンチに腰掛けていた。麦藁帽子を被って、作業着を着ているビビアナはあさんは、どうやら農作業の途中で抜けて来たらしかった。

「こんにちは、おばあちゃん」

フレンがぺこりと挨拶をする。アデルも慌ててそれに習った。

「はいはい、こんにちは、坊やたち。今日は暖かくて良い日だねえ」

ビビアナがゆっくりとそう言うのを聞き終えてから、ヤーゴは話を切り出した。

「ビビアナのばあさん、誘拐現場を見たってえのは本当なのかあ？」

「そら本当に決まってるでしょう。あんた、クリストバルの使いっ走りやってたヤーゴだろう？ あんたもそれなりに年食ったんだから、口の利き方に気をつけなよ」

フレンたちへの愛想はどこへやら、ビビアナはヤーゴにえらく厳しかった。

「それを言わんでくれよ……それで、何をみたんだい？」

「八日前の夜、もう夜も更けて、ありゃあ夜中だね。私は畑からゆつくりと家へ向かって歩いていたらんだ。私の家はアルファロとプラデスのちょうど真ん中辺りにあってね、家の周りは全部うちの畑さ。

その途中でね、街道に一台の馬車が停まっていたから、私はなんだろう、と思って少し遠くから見てたのさ」

フレンとアデルはそこで顔を見合わせて、思わず唾を飲み込んだ。

「すると脇の背の高い草むらからね、男が二人子供を担いで飛び出してきたのさ。私はなんとかしようと思ったけどね、声すら出す前に、奴ら馬車に乗ってプラデスの方へ走っていつちまったんだ」
「やっぱり誘拐事件には間違いないみたいだね」

アデルが繭を纏める。

「そんで、ビビアナのばあさん。男の顔は見てねえのかい？ 馬車の特徴なんかは？」

ヤーゴがさらに質問する。

「申し訳ないけど暗くて、手がかりになるようなもんはなんーも見て無いんだ。すまないねえ」
「そっかあ」

ビビアナの話を聞き終えると、三人はまた揃って肩を落とした。

やはり警吏が事件の手がかりを掴めなかった様に、正攻法の捜査では犯人を特定するのは難しいらしい。

フレンは落ち込むヤーゴの顔を覗き込んだ。意識の奥のほうから、“言わなくてもよいこと”が浮かび上がってくるのを感じた。アデルやビビアナも黙りこんでいる。自分でも、こんなことを考えるなんて驚きだった。

フレンは決心して口を開いた。

「ぼく、誘拐される。おとりになるよ」

第九節 おとり大作戦

「ええっ?!」

アデルが驚いてフレンのほうを向く。

「そりゃあ駄っ目に決まっただらう! 危なっすぎるぞ!」

ヤーゴも同じく、目を見開いて動揺して叫んだ。

「だってそれしかないでしょ。もたもたしてると、また違う子供が誘拐されちゃうよ? 予定ではほくたちが子供たちに話を聞く作戦だけど、家から出てこないんじゃそれも無理だよ」

フレンはそう言いながら、膝の力がだんだんと抜けていくのを感じていた。正直、自分でもなぜこんな無茶なことを言い出したのか解らなかったが、それでもフレンは二人を説得しようと言葉を並べた。

「誘拐された子供は全員身代金さえ払えば無事に帰ってきてるんだし、大丈夫だよ。それに、誘拐された子供の親たちが何にも事件について喋ろうとしないってことは、逆に、そこに事件を解く鍵があるってことですよ」

「そりゃそうだけでもなあ」

ヤーゴは困り果てたように両手で顔を覆った。

「そ、それじゃ! フレンの代わりにおれが囿になる! お、おれのほうが力も強いし、万が一の時に逃げやすいだろ!」

アデルはそう提案したが、フレンは冷静に否定した。

「うん。今まで狙われてた子供たちは皆ぼくと同じ年だったでしょ。ってことは、その年齢になにか意味があるんだよ。多分犯人たちもぼくより大きな子供だと、アデルの言うとおり、力も強くなるし不測の事態が起こり得るから嫌なんだよ」

「でも」

「それに僕の方がアデルより上品でしょ？」

フレンはそう言って精一杯の笑みを浮かべたが、実際は膝の震えを抑えるので必死だった。

「おれあ、オルエツタに殺されっちまうよ」

「大丈夫だって！ ぼくのことヤーゴとアデルが見張ってて、犯人がきたら、僕が誘拐される前にとっちめて捕まえてくれればいいんだもの」

ヤーゴとアデルは、うんうんと唸りながら、いろいろフレンの囮作戦に否定的な意見を言ったが、全てフレンの冷静な理論を前にに却下されることとなった。

結局ヤーゴは、囮作戦はオルエツタには必ず内緒にする、ということと二人に約束させ、アデルは何かあったら絶対におれが助けると約束してくれた。

二人の許可をようやく取り付けたフレンは、終止目を丸くしたまま話を訊いていたビビアナのほうに向き直って言った。

「じゃあビビアナのおばあちゃん。その誘拐犯たちの馬車を見た場所、詳しく教えてくれない？」

第十節 火柱

幸いなことに、月の大きな、明るい夜だった。

フレンはビビアナの言っていた草むら横の街道の端に、街の仕立て屋で適当に見繕った上等な子供服を着せられて座り込んでいた。

道に迷って帰れなくなった可愛そうなお坊ちゃん、というのはアデルが考えた“設定”で、フレンは言いだしっぺのくせに、そんな簡単に犯人たちが引つかかるとは思っていなかったが、それでも上手くいけば儲けものと考え、アデルの案に乗ることにした。

ビビアナが言っていた場所は、円形で、市場一つ分くらいの大ささの、背のうんと高い草が生え放題の沼地を街道が迂回するような地形になっていた。つまり、例えば街道をプラデスのほうから来ると、草むらである沼地に真っ直ぐつつこめば、そのままショートカットする形になってまた街道に戻りアルファロへ向かい、そうでなく街道沿いに進もうと思えば沼地をぐるっと避けるように迂回しなければならぬ、ということである。

アデルとヤーゴはその沼地の草むらの中にいて、フレンのことを見守っていた。もちろん、すぐにでも飛び出せる体勢をとっている。

日が沈んでから五時間ほどが経った。気温は加速度的に下がっていき、適当に選んだ服を着ているフレンは段々と手足が悴んできた。

月が出ているというものの、辺りに人工的な光源は何一つ無く、周りは一面畑で見渡す限り圧倒的な暗闇が広がっていて、フレンの心は段々と恐怖に浸食されていった。

アデルのほうへ目をやると、手をこすり合わせながら、大丈夫だぞ、とフレンを安心させるように目で合図を送り返してくれた。

そして、そろそろ体が凍えてきて諦めようかそれとも火でも熾そうか、とフレンが思索していた頃だった。

突如、フレンから見てアデルたちの後方が赤く、そしてとても明るく光りだした。

三人とも突然のことに一瞬戸惑ったが、すぐに光の正体は理解することが出来た。炎だ。

炎は一瞬のうちに大人二人分くらいの高さの火柱となり、そのまま草むらにいたアデルたちの方向へ燃え広がってきた。

フレンはいきなり現れた光源に目が眩みながらも、アデルたちのほうを見た。二人とも突然のことに驚きを隠せず火柱を見つめている。

フレンの意識があったのは、その瞬間までであった。

第十一節 チキータ

ぐらぐらと、荒い振動でフレンは眼を覚ました。髪の毛が燃えているのではないか、と疑うほど後頭部が熱い。咄嗟に触って確かめてみようとしたが、それもできなかつた。

フレンは両手足を縄で縛られ、馬車の荷台に載せられていた。前の席にはピアノの話の通り、男が二人座っていた。

とにかく頭が割れるように痛かつた。後ろから殴られて気を失つたんだと、フレンはこの時気づいた。そしてそのまま馬車に乗せられ、今に至るといふわけらしい。

声を上げようにも、なんと叫べばいいのか、フレンは迷つた。そしてそのうち、フレンが起き上がった事に一人が気づき、振り返つてこう忠告した。

「騒いだら殺すからな。いいか、言つとおりにすれば、“もしかしたら”、無事に帰れるかもな」

振り向いた男は痩せこけた頬に無精ひげを生やしていた。眼はぎよろりと不気味に見開いて、長い舌で唇を舐めていた。

フレンは知っていた。この男の名前を。

「チキータ」

小声で男の名前を呟いた。男は、へへっ、と笑うのみだつた。

チキータはプラデスに住んでいる東雲の旅団員の一人だつた。

彼も、もともとは旅団に拾われた孤児で、今はプラデスで借金の取立ての役を負わされていた。

賭場で耳にするチキータの噂はなんとも血生臭く、フレンは子供ながらに嫌悪感を抱いていた。

賭場に取り立てにくることも何度かあつたので、フレンとは顔見

知りであった。

「ヤーゴがこの誘拐事件に首つっこんできたのは聞いてたけどよお、まさかガキを囮に使うとはなあ！ あのおっさんもつくづく阿呆だな。あんな簡単な陽動にも引かかってくれたしな」

「これはぼくの案だ。ヤーゴは関係ない」

フレンがチキータに噛み付くように言った。今度はチキータの横の筋肉質の男がへらへらと笑った。筋肉質の男の方は顔に麻袋を被っついて、顔が見えない。

「そうかい、そうかい。そりゃご苦労なことて。けどな、この誘拐には囮作戦なんてもんは最初から全く効果ねえんだよ」

チキータは再びフレンのほうに振り返り、得意げに説明し始めた。

「この誘拐はな、誘拐された子供の親の力を借りることによって連鎖的に子供を掻っ攫っていく、天才的な犯罪なのさ」

フレンの眼はチキータを依然睨みつけたままだったが、それでも堪えきれず眼に涙が溜まっていた。

「どういうこと」

「いいか。まずおれ達は最初の子供を誘拐する。まあこれは誰でも良かった。そしてその誘拐した子供の親に手紙を出す。『子供を返して欲しければ、三日後の真夜中に、身代金を同じ年の子供に持たせてプラデスとアルファ口をつなぐ街道のちょうど真ん中にある草むらを歩かせろ』ってな」

フレンはそこまで聞いて全ての事柄が頭の中で繋がるのを感じ、一層悔しさが込み上げて、唇を血が出るまでかみ締めた。

チキータの自慢げな解説は尚も続いた。

「俺たちは、ふらふらと訳も判らず沼地を歩いている阿呆なガキを捕まえて、同じ手紙をその親に送るのさ。親は我が子かわいさに近所の子供や、はたまたちよっくら頭を使って隣街の子供をその手で誘拐して、俺たちところに届けてくれるのさ。しかも、この方法の一番素晴らしい部分は、ガキの親たちが自動的に俺たちの共犯になるってところだ！ そうなりや、事の真相を警吏たちやおまえたちに話したくても、自分の身可愛さに離せなくなる。そらそうさ！死ぬ思いで掴んだ、愛しいわが子との平穏な生活だもんなああ！」

涙が止まらなかった。自分はなんてちっばけな存在だろうと、現実をこの上ない速度で叩きつけられた。

誘拐された子供の親たちが誰一人として事件の真相を話さなかったのは、既に強制的に共犯者にされていたからだ。

その上ヤーゴが旅団の一員だと名乗った時、イバンの母親が顔に恐怖を浮かべたのは共犯のことがばれるからだ。そしてなによりチキータが旅団員だったからだ。もし協力でもすれば、旅団で繋がっているヤーゴからチキータへ情報が簡単に伝わるのが目に見えている。口止めたって、旅団内なら、漏れる可能性が高いし、もしバレたなら、共犯の筋肉質の男が報復にくる。その為に筋肉質の男は麻袋まで被って匿名性を高めているのだ。

そして、二階のイバンの部屋の外の屋根に洗ったブーツが干してあったのは、前日の深夜に、誘拐した子供を夫婦で沼地に運んだからだ。

フレンの顔は悔しさで歪んでいた。手がかりはそこかしこにあった。しかしそれなのにその全てをみすみす見逃した自分の無能さに腹が立った。

涙で荷台の床の板に大きな染みが出来ていた。もうフレンには、どうしようもなかった。

第十二節 脱出作戦

馬車は街道を抜けて何処かの街に入ったらしい。距離的にいって、ブラデスかアルファ口のどちらかだろうとフレンは思ったが、幌の所為で何も見えなかった。

舗装された道路をかたかたと、少しばかり走ったあと馬車は止まり、フレンは目隠しをされて下ろされた。

「おらっ！　そこでおとなしくしてる！　念のためにもう一度言うておくが、大きな声出しやがったらその時点で殺す。わかったな」

そう言つてフレンはどこか建物の一室に放りこまれた。地下室のようで、部屋の上のほうに少しだけ光を取り込む格子窓があった。一応手と足の縄と、目隠しは取ってもらえたものの、チキータが扉の前にどんと座つてフレンを見張っていた。

投げ込まれたフレンの横にはもう一人、やはり恐らく同じ年の少年が居たが、少年は怯えきつていてフレンと目も合そうとしなかった。

フレンは成すすべなく、その場にじつと座りこんでいた。そうするうちに、夜が明け、格子窓から光が差し込んできた。

徹夜明けだからか、チキータも眠たいようで、次第に目が空ろになつていって、結局日が昇りきることは扉の前で座つたまま寝てしまった。

チキータが寝ている間にどうにかしてここを脱出できないか、とフレンはまた考え出すようになった。

格子窓を見ると、格子自体は嵌め殺しだが、細い木で組まれていて、しかも腐っているような感じも見て取れる。あの様子だと恐らくフレンの力でも折り破つて、そこから外に出れそうである。大きな子供一人は楽に通れるくらいは十分にある。

しかし格子窓はかなり高くにあり、フレンの身長では爪の先すら引つかからないような高さであった。部屋を見渡すも、この地下室には全く何も置かれておらず、ただ部屋に男一人と少年が二人いるのみであった。

チキータはどんと深い眠りに落ちていつているようで、そのうちにいびきまでかき始めた。

と、フレンは一つの危ういながらも一筋の光明を見出した。

これならば、もしかすれば、と早速フレンは隣にいる怯えきって泣いている男の子に小声で、チキータを起こさないように話しかけた。

「ねえ、君名前は？」

しかし少年は泣くばかりで返事がない。しかたなくフレンはそのまま話続けた。

「ぼくはフレンっていうんだ。君の家はブラデスにあるの？」

今度は少年の首が立てにくくりと動いた。フレンはしめた、とまた続ける。

「ぼくにこの部屋を脱出する良いアイデアがあるんだけど、聞いた
い？」

「うん」

いつしか少年は泣き止んで、真っ直ぐにフレンを見つめていた。

「今ぼくたちを攫った、あいつは寝てる。だからその間に、ぼくを踏み台にして君があそこから出て、助けを呼んでおくれよ」

そう言ってフレンは唯一の脱出口である格子窓を指差した。

「えっ？ そんなのムリだよ……」

「ムリじゃないよ。大丈夫さ。そうしないと、あいつぼくも君も殺しちゃうよ？」

フレンは少年に悪いとは思いつつも、やる気を出させるために少しばかり嘘をついた。

これが功を奏したのか、殺されては元も子もないと、少年は自分の持ち得る限りの勇気を振り絞ったようだった。

「いいかい、ぼくの肩に足を乗せて……そう。いいかい？ ゆっくりたちあがるからね」

フレンは力の限りを振り絞って、少年を慎重に格子窓へと運んだ。膝がゆっくりとまっすぐになっていく。少年は壁に手について、体重を分散させてフレンの負担を軽減した。

フレンが完全に立ち上がると、予想通り、少年の頭がちょうど格子窓の位置まできた。

「どう？ きみの力で壊せそう？」

フレンは足腰の限界が近づいてくるのを感じて、少し焦った。上でばきつと音がする。少年が格子のひとつをへし折った音だった。

「いいぞ！ その調」

「なにやってんだおめえら！！！」

いきなりの怒号にフレンと少年はバランスを崩して、二人とも転んでしまった。

「おいおいおいおい！！ お前、俺の話聞いてなかったのかあ？
今すぐ殺すぞ！！！」

そう言いながらチキータはフレンのほうに大股で歩いてきた。
失敗した。そうフレンは思ったが、後悔の念はなかった。一応失敗することもフレンは想定していた。

すぐ殺さずに監禁するということは、今のフレンにはそれなりの利用価値があるからである。しきりに、騒ぐな、大声を出すなと言っていたのは、フレンには『自分たちの身に危険が及ばない限り』利用価値があるという意味だ。

つまり、フレンは大声を出して誰かにここの居場所を教えない限りは、チキータたちは自分を殺さないと踏んでいたのだ。

「おいこらあ！」

しかし、それは“殺されない”だけであって、他の可能性は十分にあるということでもある。

フレンが体勢を立て直す間もなく、チキータはフレンの腹に重たい蹴りを入れた。

「体に教えなきゃわかんねえかあ？ この馬鹿ガキはよお！！！」

ブーツの先で腹を二度、胸を一度蹴られ、最後には仕上げとばかりに顔を力の限り踏付けにされた。

「うっ」

かつてない痛みが体を駆け巡った。即座にフレンはその場で嘔吐し、腹を抱え転げまわった。

チキータはそんなフレンを見て一応満足したのか、また扉の前に座って、見張りを続けた。

胃の中のものを全部床にぶちまけ、小一時間ほどのた打ち回ったあと、フレンは横になったまま動かなくなった。

そうして、そのまま十二時間ほどが経過した。

第十三節 希望の光

フレンは体から痛みが引いた後も、そのまま床に倒れこんでいた。幸いなことに骨折や内臓破裂などは無かったようで、五時間もすれば、全身から痛みはほとんど消えていた。

脱出作戦に協力してくれた少年は、また怯えきった状態に戻ってしまったが、今ではフレンのことを気遣うように、小声で大丈夫かと声をかけてくれていた。

日が暮れてくるのが格子窓の影で解った。さっきまでは解らなかったが、じっとしていると、鉄が削りだされている匂いが鼻をついた。

昼の間、部屋には筋肉質の男が何度かやって来て、食料と飲み物をチキータに渡したり、二言三言会話したりしていた。

そしてもうそろそろ日が暮れるという頃に、再び筋肉質の男が部屋に入ってきた。

「チキータ。ヤーゴから連絡があったぞ。要求を呑むそつだ」

「そつか……よし、日が暮れたら出発するぞ」

チキータは満足そうににやりと笑ってそう言った。

「あとお前に『許つさねえ』と託ておいてくれと、言っていたそつだ」

「はっ。なにが許さねえだ」

チキータたちの顔には、既に勝利を確信した、余裕の嘲笑が浮かんでいた。

「どついうこと？」

フレンは吐き気の残る体を嫌々起こして、チキータを睨んだ。

「ヤーゴはお前が人質に取られたんで、自ら旅団に交渉してくれたのさ。条件は国境付近でお前を自由にする代わりに、俺たちの国外逃亡を見逃すことだ」

そういうことか、とフレンは今まで自分が生かされていた理由を始めて理解した。

「まあ、あの頭が切れるルシオのことだ。いずれは俺たちが誘拐犯だったことに気づいたろう。この誘拐は一度始めるとノンストップだからな。区切りのいいところで打ち止めて、国外に逃げるのは最初からの計画なのよ。しかし、幸運なことに、阿呆のヤーゴのお陰で、楽ができそうだ」

チキータはそう言って、また満足そうに高笑いをした。

全身の力が抜け、その場に再びフレンは倒れこんだ。

格子窓から入ってくる光がどんどんと萎んでゆく。日暮れだ。

どこからともなく鐘の音が聞こえてくる。

その時、フレンの頭にある考えが思い浮かんだ。

もしかすると。そう感じると、フレンは必死でチキータに悟られないように考え出した。

そう、その眼にまた、希望の光が灯るのを悟られないように。

第十四節 二丁のすきま

フレンはゆっくりと体を起こし、まだ全身を痛みに支配されているかのように、壁に体をもたれ掛けた。

鐘の音が止み、日は完全に沈んだ。チキータは部屋にある二つのランプに火を灯した。

フレンの推測では、馬車の移動時間を考慮すると、ここはプラデスかアルファアの街だ。

しかしアルファアはプラデスに比べて舗装されている道が少ない。しかも馬車もそれほど走っていない。ここに来る途中、かなり舗装された道を走ったし、アルファアで大きな荷台のついた馬車を毎日走らせると流石に住民に怪しまれる。

ということは、ここはプラデスに間違いない。

そして、格子窓から入ってくる、金属が削られる匂い。十中八九鍛冶屋の匂いである。

プラデス唯一の鍛冶屋のある道は、例の散歩コースだ。ここがプラデスなら、あの鐘の音は、定刻通りの夕方の鐘だ。

そう、闘犬たちの散歩の時間なのだ。

フレンはそこまで考えると、チキータに悟られないように、首から提げている紐を手繰り、犬笛をこっそり手におさめる。そしてそのまま、不自然さを出さないように、手を口へと持っていき、犬笛に口をつけた。

犬笛は鳴り続けた。チキータにも筋肉質の男にも、フレンにも少年にも聞こえない超高音で。フレンは祈るように吹き続けた。この方法が最期の頼みの綱だった。

と、遠くから、すこし騒がしい、重い足音が幾つも重なってこちらにやってきた。

「おい！ どこいくんだよ！ 待てって！！」

格子窓の外から誰かのそんな声が聞こえた、次の瞬間。

五頭の巨大な闘犬たちが、格子窓を軽々と突き破って、するりと、順番に地下室へとなだれ込んできた。

「な?!」

チキータも筋肉質の男も、あまりのことに事態をまるで把握できていないようだった。

「よし！ 皆集合！！」

フレンがそう掛け声をかけると、五頭の闘犬たちはまるで陣を組むようにフレンを取り囲んだ。

「おい！！ なんなんだよ、こりゃあよ！！」

「知るかよ！！ おまえ、なんとかしろ！」

混乱し、焦ったチキータはナイフを抜き出し、巨大な犬の一頭に

斬りかかる。

しかし普通の人間が闘犬にナイフ一本で勝てるはずもなく、逆に犬に敵だと見なされ、押し倒されてナイフを持っている手を噛まれた。人間の声とは思えない叫び声をあげながら、チキータは床に倒れこんだ。ナイフは放り出されたが、犬はチキータのことを噛んだままだ。

一方の筋肉質の男は、とりあえずこの犬だらけの地下室から逃げることを選択したようだった。一目散で、階段を駆け上り、そのまま建物を出て行った。

「おいで!!」

フレンは、未だに状況が把握できていない少年の手を掴むと、犬笛を再び吹きながら、叫び転げるチキータの横をすり抜け、階段を上って、建物を脱出した。

「おい、フレンじゃないか!」

建物を出ると、おなじく事態を把握できていない、旅団員のダニが居た。ダニは新入りの若い痩せこけた旅団員でいつもは娼館の管理を手伝っていたが、今日はフレンたちの不在に伴って闘犬たちの世話にまわされた様だった。

「ダニ! 大変なんだ!! ヤーゴに伝えてよ! チキータがここにいて!!」

「ど、どういうことか、よくわからんが……まあいいさ! ヤーゴさんならプラデス支部に居た。三十秒もあれば連れてきてやるよ! 犬は任せたぞ!」

そう言うとダニは全速力で賭場とは逆の方にある旅団のプラデス

支部へと走っていった。

「きみはもうお逃げ。家まで帰れるよね？」

フレンがそういうと、少年は泣きながら頷き、自分の家のほうへと走っていった。

「くっそ……このクソガキがあ……」

と、右手から血を垂れ流しながら、ゆらゆらとチキータが建物から出てきた。左手には放り投げたはずのナイフが再び握られている。

「ころしてやるう……クソ……ガキがあ！」

「だつれがだつれを殺すつてええ？」

フレンが気づくとチキータの真後ろにヤーゴが居た。チキータはゆっくりと振り向き今度はヤーゴにナイフを向けた。並ぶと遙かにチキータのほうが背が高い。

「おれがおまえをだよ、ヤーゴ……」

チキータがナイフでヤーゴに上から斬りかかった。ヤーゴはナイフを持つ、チキータの左手首を正確に右手で受け止め、そのまま左手でチキータの顔面を殴った。そして流れるように、チキータにナイフを握らせたまま、肘を曲げさせ、そのままナイフをチキータの胸に深く埋め込んだ。

「おれあ、お前に交渉のときに言うただろう。フレンを攫ったおまえたちとは絶対許さんと。もし旅団員が許さんと言う事があれば、そりゃあ相手は必ず死ぬっちゅうことだ……覚えとけ馬鹿たれ」

チキータはその場に声もなく崩れ去った。ヤーゴはチキータが事切れるのを見守ると、フレンのほうにゆっくりやって来て、フレンを抱きしめた。

「すまねえなあ、俺が愚図なばかりに」

フレンの眼から、また涙が零れた。安心からくる涙だった。

今度はヤーゴの後ろからアデルが、凄い形相で走ってきた。アデルも泣いていた。

アデルはヤーゴの後ろから重なるようにして抱きつき、何も言わずにおいおい泣いた。

心を何かを満たしていく感覚と、体に纏わりつく甘い蝋梅の香りに、フレンはそのまま身を委ねることにした。

第十五節 灯火

フレンとアデルは、家に帰るなりオルエッタの抱擁で迎えられた。オルエッタは何も言わず、ただただ二人を強い力で抱きしめるのみだった。

「痛いよ、オルエッタ」

フレンが、チキータに殴られた傷跡が抱きしめられて痛んでそう言ったが、オルエッタはそのまま動こうとはしなかった。

二人が一頻り抱きしめられたあとには、ヤーゴが一頻りオルエッタに怒鳴られ、フレンにはいつにも増してヤーゴの背が小さく見えた。

それから四人は、いつもより少しだけ豪華な食事を食べた。パンとスープ、それから、量はささやかだが味は飛切りの牛肉の煮込み。食後には家にあっただけ全部の卵を使った、プディングまで出た。

フレンは思い出す。

悴んだ、傷だらけの手で、ごみ捨て場を掘り起こし、掻き回していた日々を。

そして思う。

あの頃遠くのほうで幽かに光っていた、あの何とも暖か気な灯火の下で、自分の無事を願ってくれている人と、こんなにも素晴らしい食事をしている、自分の幸運を。

決して手が届かないと諦めていた、あの光が今、目の前にあることを。

フレンは笑顔の奥底で、今この時を嚙締めねば、と子供心に思った。

「さあ、今日は疲れたでしょ。もう寝なさい。明日も私が賭場に手伝いに行くから、好きなだけ寝坊していいわよ」

オルエツタはそう言って笑った。

フレンとアデルは遠慮して、その提案を断ろうとしたが、結局ヤーゴの、いいから明日は休め、という一言で、オルエツタに甘えることにした。

オルエツタは笑いながらも、ヤーゴが口を開くたびに冷ややかな目つきで睨みつけ、その都度ヤーゴはすまなさそうに首を窄めていた。

夕飯を全て残らず食べ終わると、ヤーゴはまたプラデスの旅団支部へと戻っていった。チキータの相棒の筋肉質の男が、街の外れで旅団員に捕まり、支部に拘束されているらしかった。

フレンとアデルは、ヤーゴを見送ったあと、オルエツタにおやすみを言い、ベッドに横になった。

「なあ」

しばしの沈黙のあと、口を開いたのはアデルであった。

「なに？」

フレンは閉じかけた瞼を瞬かせて、応えた。

「なんか、良かったな」

「なにが？」

「……いろいろだよ」

アデルはそう言ったあと、もう何も喋らなくなった。
フレンは一言、そうだね、と返し、そのままの心地よい気分で眠りについた。

第一節 ハビ

あの誘拐事件から、早半年が過ぎた。

誘拐事件を解決したことで、フレンとアデルは東雲の旅団員にはもちろん、そうではない街の人々にも、顔と名前を知られるようになった。

「おはよう、アデル、フレン。今日はえらく小つこいのを連れてるねえ」

まだ日の低い生暖かい朝に、フレンたち街を散歩していた。肉屋の女将の挨拶に、フレンたちもおはようございます、と返す。女将の言う“小つこいの”とは、今フレンたちが散歩させている、生後二ヶ月の真つ白な子犬のことである。この子犬は賭場で生まれ、誰にも貰われずに残った一頭で、フレンとアデルがハビと名づけ世話をしていた。

ハビの母犬はとても気性が荒く、結局その子犬たちは一ヶ月もしないうちに、親から離れることとなった。五匹居たうちの三頭は貰われ、一頭はハビの母犬の飼い主の家で世話することになったので、フレンたちは残ったハビを荒ら屋で飼う事にしたのだった。ハビは特にフレンによく懐き、つねにフレンの傍についてまわった。寝るときなどは、フレンのベッドの横に丸まって休んでいた。

「おばちゃん、えらく今日は店先がきれいだね」

フレンは店の軒先を一生懸命に腰を曲げて箒で掃く女将を見てそう言った。

ハビは店の奥から来る馨しい肉の匂いに、鼻をひくひくさせていた。

「おや、知らないのかい？ 今日アルカサス様が凱旋されるんだよ。街中を周るらしいからね。噂によると王筆頭顧問のガウルテリオ様も一緒にいらっしやるらしいよ。聞くところによると、とっても美しい美男子だそうだから、わたしや今から楽しみでねえ。それでこうやってできるだけ綺麗にしてるんだよ」

肉屋の女将が言うアルカサスなる人物は、この辺りの領主で、プラデスやアルファロを治める侯爵である。

「誰？ そのガウーテロー様ってというのは？」

アルカサスの名は流石に知っていたが、二つ目の名前は初耳だったフレンが、続けて言う。

「失礼言っちゃだめよ、ガウルテリオ様だよ。クラウディオ王の筆頭顧問でね、クラウディオ様のお隣にいつもいらっしやって、あれやこれやと、助言するのさ。とっても頭が良いお方なんだよ」

「王の隣にずっといるの？」

アデルが突然口を開いた。フレンは振り返って、アデルを見た。どこか、見覚えのある眼差しだとふと思う。

「まあ、どんなもんかは詳しくは知らないけどね。若くして、王様の一番の相談役だそうよ。興味あるならあなたたちも見物しに行きなよ。今日の正午に」

フレンたちはそれから女将にさよならの挨拶をして、家まで歩いて帰った。

道中アデルは、フレンが何を言おうが何を聞こうが、ああ、うん、

などそのような生返事しかせず、
なにやら考え事に夢中らしかった。

家に帰って遅めの朝食をとり、フレンとアデル、それにハビはい
つものように賭場に向かった。

誘拐事件からこちら、フレンたちはその功績としてジユラールに
少しだけ、毎日の仕事を減らしてもらっていた為、朝は少し寝坊で
きるようになったし、夜は死にそうになるまで腹を減らす前に、帰
って夕食にありつく事ができるようになった。

午前中はいつも通りにアデルと業務をこなした。フレンが異変に
気づいたのは、賭場の午後の部が始まる直前だった。

アデルの姿がどこにも見えなかった。

今までにない事態にフレンは少し動揺した。午後の部が始まると
いうのに。アデルがいなくては賭けの進行に支障がでる。賭場中を
名前を呼びながら走り回るが、アデルは出てこない。

アデルは時間に遅れるタイプの人間では決してなかった。朝もフ
レンより早く起きるし、約束の時間には余裕を持って現れる。フレ
ンは朝方のアデルの眼差しを思い出し、不安になった。

午後の部まで、時間がない。

フレンは賭場を飛び出し、闇雲に繁華街の方へと走り出した。

賭場の入り口横に勝手に咲いた鈴蘭が、不安げに揺れていた。

第二節 ガウルテリオ

もう既に午後の部の開始の時間はとうに過ぎていた。

アデルを見つけられずに街中を走り回っていたフレンは、賭場に一度戻るかどうか悩んでいた。

「もしかしたら、賭場に戻ってるかも」

知らぬうちに小さな声で呟いている。不安がそうさせるのか、フレンの動悸は少しずつ早くなってゆく。高く上った太陽が、厭な汗を掻かせる。

と、フレンの耳に微かに喧騒の端くれのような、沢山の人々が集まって発しているような音が届いた。今いる場所を考えると、音のするほうは賭場とは逆の方向だが、フレンは意を決して音の聞こえる方へと走った。

市場のある大通りに差し掛かると、街中の住人が一斉に集まったように、そこら中が人で溢れていた。喧騒の中心に近づくほど人が増えてゆく。フレンは一生懸命人だかりをを掻き分けて、騒ぎの中心へとたどり着いた。

フレンの心臓が強く肋骨を叩いた。不安が的中した、そうフレンは思った。

背の小さいフレンは、その時初めて馬に乗った貴族たちの行列を目にした。しかしフレンを動揺させたのは、凱旋した貴族たちではなく、馬に乗った騎士たちを跨いで通りの向こう側に見たアデルの姿だった。

「アデル！」

フレンは力いっぱい叫んだが、アデルはこちらに気づく様子もな

い。アデルはただ、一点を見つめていた。

あの眼だ。フレンは確信していた。アデルは直訴する気なんだ、と。王様の相談役、ガウルテウオ候に、自分は王家の血を引く人間だということ。

でもそれは駄目なんだ、とフレンは心の中で叫んだ。アデルがこの話をヤーゴやオルエッタにした時に、そういうことは口外するな、と厳しく言われたのだ。自分は王族だと騙ったとなると、例え年端の行かぬ子供であろうと重罪に処されるためだ。

「アデル！ 駄目だ！」

フレンは必死に叫び続けたが、すぐにそれは無駄になった。

アデルは行列の中に飛び込んで、馬の前に立ちほだかっていた。

人々はあまりのことに、悲鳴にも驚きの声を上げた後、どうして良いか判らずに黙り込んでただ成り行きを見つめた。

「ガウルテリオ様！ ぼく、王族なんです！ ぼく、眼が青いし、それに……」

アデルは一人の馬上の貴族に必死に訴えていた。しかし最期まで言い終わる前に、三人の従士にあつと言う間に押さえつけられた。

「あまり乱暴な扱いは止めなさい。相手は子供です」

馬上の貴族は静かにそう言った。三十を数えないくらい、若い、そしてフレンが今まで目にした誰よりも整った顔立ちの男だった。それを聞いた従士たちのうち二人は、アデルから手を離しまた貴族の乗る馬の脇についた。

アデルはそのまま、凱旋行列を追い越して連行されていってしまった。

行列はそのままプラデスにあるアルカサス伯の館に進んでいく。フレンの頭の中は目まぐるしく動いた。なにか策や考えがある訳でもなかったが、誘拐事件を解決した自信がフレンの背中を押してしまった。

「ぼ、ぼくも王族です!」

気がつくと、もう行列が通りすぎようかという所で、フレンは人ごみを飛び出して、一人の従士にそう告白してしまっていた。

第三節 名もなき兵士と燕麦粥

フレンの予想は見事に大きく外れてしまった。フレンはなんの考
えも持たずに、衝動的に行動してしまったことを深く反省していた。
アデルと同じように王族を騙ると、同じ牢屋、とまではいかなく
とも、隣同士の牢屋ぐらいには入れると考えていたが、全くもって
読み甘かった。

フレンが放り込まれたのはアルカサス伯の館の地下牢で、見渡す
と通路を挟んで三つずつ、合わせて六つの部屋が確認できた。しか
しアデルの姿は、というよりはフレン以外の誰の姿も、他の牢の中
にはなかった。

もしかしてとんでもないことをしてしまったのでは、とフレンは
静かに後悔した。誘拐事件のときのような脱出口など、もちろん見
つかるはずも無く、簡素で清潔で堅牢な石造りの地下牢の内側で、
フレンは肩を落とした。

牢屋に入れられてから数時間が経過し、ようやく夕食を運ぶ為
に人が地下へと降りてきた。

「飯だ」

一人の兵士が鉄格子の下の隙間から、燕麦の粥の入った木の器を
放り入れて来た。

「ありがとうございます……あ、ちょっと！ おじさん！」

フレンは、その後直ぐにまた地上へと戻ろうと踵を返した兵士を

呼び止めた。

兵士は足を止め、大きく溜息を一度ついたあと戻ってきて、なんだね、と聞いてくれた。

「あの、ぼく、どうなりますか？」

フレンは狡賢くも、より子供っぽく見えるように高めの声で言った。

「……すまないが、ちよつと判らんね。なぜ王族を騙ったのかは知らんが、子供と言えどもこればかりはお偉さん方、容赦しないだろうな。帝都に移送されて裁判にかけられる」

兵士はまた溜息をついた。

「そうですか……あ、あの！」

フレンはまた帰ろうとする兵士を寸でのところで再び呼んだ。

「なんだね」

「ぼくと同じように、あの凱旋行列で王族を騙ったアデルっていう子供がいるはずなんだけど、なにか知っていますか？」

「ああ、あの眼の青い子ね。場内をガウルテリオ侯爵と一緒に歩いていたのを見たよ。これもまた訳など解らんが……ま、あの子も君と同じく、重罪だね。多分」

フレンは兵士の回答に首を傾げた。なぜ自分は地下牢に直行させられたのか？ なぜアデルはあのガウルテリオと一緒にいるのか？ どうも納得いかないことが多い。

「なんでアデルだけガウルテリオさまと一緒に居たの？ もしかして眼が青いのが関係してるとか？ もしかして本当に王族だったりして……」

「眼が青いって言うてもねえ……王家の血筋を引くものは皆眼が青く透き通っていることは有名だが、ただの平民にも稀に眼の青い人間がいるんだよ。だから眼が青いからってだけで王族の人間だなんて、言えないんだよ。だいたい王族は、自分は実は王家の血を引くものだ、なんて騎士に訴えたりしないからな」

今度はフレンもなるほど、と少し納得した。たしかにアデルが王族だという根拠はほぼ無いに等しかった。兵士はフレンが納得した様子を見ると、もう一度深く溜息をついてから地上へと昇っていった。

「それにしても」

一人で呟く。

アデルがガウルテリオ候と一緒にいたという話が、いまいち腑に落ちない。一体どんな理由があつて二人が同じ場所にいたのか、フレンには想像もつかなかった。

そうして、何もないうまま牢の中で三日が過ぎた。

初日に粥を運んでくれた兵士は二度と来ず、二回目からは無口な女の給仕係が食事を運んできた。

そろそろ、本格的にやばくなってきた、とフレンがどうやって地下牢を抜け出そうか必死に頭を捻っていた時だった。食事の時間でもないのに、なにやら騒がしい音を立てながら、誰かが階段を降りてくる。

現れた人物をみて、フレンは思わず声を上げた。

「ヤーゴー!!」

第四節 脱獄

へへっと、ヤーゴは笑いながらズボンを摺り上げた。

「えらく太った門兵の兵服を頂いちまってよ。ぶつかぶかだ」

「ヤーゴ！ どうしてここに？」

フレンは目を真ん丸くして尋ねた。

「どうしても何も、おめえたちが捕まるからだろうが。まったく無茶ばかりしやがって」

「ごめんなさい。でもアデルが……」

「それはわかつとる」

ヤーゴはフレンを静かに叱りながら、どこで手に入れたのか、牢の扉を鍵で開けた。

「アデルを助けにいかない」と

「わかつとる」

ヤーゴはそう繰り返した。表情から見るに状況は厳しいらしい。

「これからどうするの？」

「よし、ええか。アデルは天守近くの客屋にいるらしい。近くまでは中庭を通れば誰にも見られずに行けるが、そこから先は見張りをどうにかしねえと駄目だ」

ヤーゴと共に地上への階段を登って行くと、階段の途中に伸びた

衛兵が居た。それを跨いで進んで地下牢を出る。外は既に暗く、風の香りからフレンは深夜だろうと思った。

地下牢の出口は城の外郭近く、見張り小屋の下に位置する何も無いところにあった。

「こつちだ」

ヤーゴの指示に従い、身を屈めて城内を素早く移動する。程なく、高い木の生え茂った中庭に二人は突っ込んだ。

中庭には並木道が一本あり、それを取り囲むように、いろいろな種類の木や草花がぎっしりと埋められている。ひとたび道を外れれば、フレンたちの姿は草木で覆われて見えなくなった。

「よし、このまま客屋まで行くぞ。音を立てるなよ、フレン」

鬱蒼と生え茂る木々は月明かりさえも遮り、二人の影さえも完全に隠した。

枝葉を踏んで音を立てたりしないように、慎重に中庭を進んで五分ほどすると、それほど大きくない木造の一軒家が見えてきた。

赤い瓦屋根に扉周りの飾り彫りと、丁寧な造りのその客屋の周りには、低い柵で囲まれていて、入り口の小さな門には衛兵が二名居る。

「あの衛兵をなんとかせんとな……さすがに二人いつぺんに相手はできんぞ……」

ヤーゴが草藪から客屋の様子を伺いながら呟いた。

「ならばくに良い考えがあるよ！」

フレンは咄嗟の思いつきをヤーゴに耳打ちした。ヤーゴもフレン

の案に、少し迷ったものの頷き、それでいこうと乗った。

「おい！ おめえたち！」

ヤーゴが息を切らした演技をしながら、衛兵の前に走って出てゆく。

「なんだ、どうした？」

一人がヤーゴに尋ねる。ヤーゴはせえせえと、膝に手をつけて呼吸を落ち着かせるふりを十分にしてから、また芝居を打った。

「アドリアーノ様のご息の遊び相手を任されたんだが、中庭で追いかけてこをしてるうちに見失ってしまっただけ……こちらへ来なかつたか？ 悪戯好きでいらっしやって、俺にはもう手が負えん。しかも城内に賊が入り込んだとの情報もある」

「アドリアーノ様？」

「こんな夜遅くに？」

二人の衛兵が同時に疑問を口にする。

「ああ、おめえたち知らねえのか。アドリアーノ様と言やあ、シヤルル皇国の親王のうちの一人でいらっしやるお方じゃねえか。ほら、あの十五番目の」

もちろん、アドリアーノなんて人物はフレンたちのでっち上げであつたが、シヤルル皇国は小国ながら実在し、遠くバウムガルデン王国を跨いで西方にある、ランベルト帝国の大事な貿易相手国であ

った。

「そのご子息が、さつきも言ったとおり悪戯好きでわがままでな…
…こんな夜中に起きだして、城をこつそり抜け出して、見張り台ま
で登ってこられた。おれは城内にお戻りくださいと、そう言ったん
だが、遊んでくれるまでは帰らないとおっしゃられるもんで……」

ヤーゴは時々詰まりながらも、なんとか不自然さを隠し通したま
まそこまで言った。

なかなか見かけに因らず役者だな、とフレンは陰から見ていて思
った。

「そうか、そりゃ大変だな」

衛兵の一人が同情を浮かべる。

「大変なものも、ご子息の身に何かあったら、おれあ打ち首になっ
ちまう……」

ヤーゴはなんとか顔色を青白くできないかと、頑張った。

「しかも賊が入り込んだかもしれないんだろ。そりゃかなりやばい
な。見つけたら、すぐ捕まえて無理にでも城内に戻っていたたくし
かないな」

もう一人の方も、ようやくヤーゴの言葉を信じたようだった。

そろそろだな、とフレンは客屋から少し離れたところに行つて、
茂みから飛び出た。

「兵隊さん！」

子供っぽく舌を出してヤーゴを呼んでから、フレンはまた茂みの中に飛び込んだ。

「あつ、坊ちゃん！ 待つてくだせえ！」

そしてそれを、わざとらしくヤーゴが見つける。

「おい、お前たちもご子息を捕まえるのを手伝ってくれ！ 俺は坊ちゃんが飛び込んだ側の茂みを探すから、お前は道沿いに、そっちのお前は反対側の茂みを探してくれ！」

言うのが早い、ヤーゴは衛兵たちの返事も聞かずフレンが飛び込んだ茂み目掛けて走りだした。

残された衛兵たちは、突然の任務に戸惑っていたものの、さすがにシャルル皇国の皇太子候補を放つてはおけず、顔を見合すとヤーゴに言われたとおりに搜索を始めだした。

「よし、いいぞ。今のうちだ」

ヤーゴとフレンは衛兵たちがある程度客屋から離れると、折り返して密かに客屋のほうに戻ってきた。うまく言ったね、とフレンが小声で笑う。

二人は玄関扉には触らずに裏に回り、二つある大きなまどのうち、光が漏れてくる窓を強めにノックした。

少し中がささそと物音がして、それから窓が勢いよく開いた。

第五節 擬似兄弟

「フレン！ ヤーゴ！」

窓を開けて顔を出したのは、二人の予想通りアデルであつた。アデルは驚きと喜びの入り混じつた、明るい表情を見せた。

「アデル！ 助けにきたよ！」

しかしその表情は一転して曇ることとなつた。

「なんだ、どうした？ なにかあつたのか？」

口を真一文字に結んで黙りこみ、その場を動く気配の見えないアデルにヤーゴが尋ねる。

「おれ、帰らない」

アデルはフレンと目を合わさなのまま、そう言つた。

「なに言つてんだよ！」

フレンが問い詰める。ヤーゴの声を抑えるというジェスチャーも、まったく意に介さなかつた。

「ガウルテリオ様が、おれが王家の人間だつて認めてくれたんだ！ ほんとはまだ誰にも言つちゃいけないんだけど。明日の朝にはガウルテリオ様に連れられてアルダナに行くんだ。おれ、貴族になる」「なに寝ぼけたこと言つてるんだ！」

フレンの声はますます荒くなってゆく。そんなふざけた話があるもんか、と唾を飛ばす。

「寝ぼけてなんかない！ 出会った頃から、今までずっと言い続けてきただろ！ 俺は王家の血を引く人間なんだ！ おれがこの話をする度、フレンは愛想笑いで誤魔化してたけど、本当はおれが王家だなんて信じちゃいなかったんだろ？ 知ってたさ！ 心の中で馬鹿にしてたんだ！」

「そんなことない！」

フレンの目に涙が溜まる。ヤーゴはずっと二人を見て押し黙っている。

「しかも、おれが王の相談役に、本物の王家の人間だって認められたら、今度はそこから俺を連れ去ろうとするのか？」

「連れ去ろうなんてしてない！」

「自分が何も持たない人間だからって、嫉妬してるんだろ！ そうさ！ だからおれが幸せになろうとすると、足を引っ張るんだ！ フレンなんか……おまえなんか、もう“友達じゃない”！！」

フレンは言い返すことができなかった。今までにないくらい、胸が苦しくなって、まるで肺一杯に綿を押し込められたように、息が詰まった。

「もういいフレン。衛兵が戻ってくる。行こう」

ヤーゴがそっとフレンの手を握った。

フレンにはどうするのが正しいのかわからなかった。

残るべきか、去るべきか、話し合うべきか、連れ去るべきか、それとも放っておくべきなのか。

フレンは何も考えることが出来ず、ヤーゴに手を引かれるまま、中庭へとふらふらと歩いた。

振り返ると、客屋の窓が静かに閉められるところだった。

そしてそのまま、フレンはアデルと決別した。

しかし、この二人の少年の数奇な路は、まるで運命であるかの如く、再び交錯することになるのである。

が、それはもう少し、これより未来の話。

第六節 別れ

プラデスの城から抜け出してから、フレンは無気力な毎日を送っていた。

一度捕まっているのであまり大っぴらに街も歩けず、賭場で賭けの仕切りを手伝っている時以外は、ほとんど全ての時間を荒ら屋で過ごした。まるで、もの言う人形のように、なにをしても楽しくなく、笑っていてもどこか不自然だった。ヤーゴとオルエツタは日中の殆どを外での仕事に費やしていたため、唯一の話し相手といえばハビくらいのもだった。

ハビは相変わらず一日中フレンの後を付回し、フレンが歩くと後ろをついてまわり、ベッドに横になるとその横でまた丸まり、あげくトイレの中にまでついて来ようとした。

そんな風な日々は、掴み所がなく無為な分、流れてゆくのが早く、あっという間に一ヶ月が過ぎた。

フレンはまたその日の朝も、今アデルはどこでなにをしているんだろうか、と答えのない空しい想像に耽りながら、起き上がった。

「ハビ、おいで」

フレンがそう言うと、待ってました、とばかりにハビがベッドの上に飛び乗って、フレンの顔を舐めた。

「ハビ、まだアデルのこと覚えてる？ それとも、もう忘れた？」

フレンの問いに、ハビは勢い良く一度ワンと鳴いた。残念ながら

フレンには、ハビが肯定しているのか否定しているのか判らなかつた。

ハビは既に、体の大きさをいえばほぼ成犬と同じくらいに育っていた。自分も犬と同じように早く大人になればいいのに、とフレンは思う。

フレンはおいで、とハビを連れ台所に行つて適当に朝食を食べて、残りをハビの朝の餌とした。

その後、兵士の姿が通りにいないことを確認しながら、駆け足で賭場に行き、また一日賭けの仕切りを手伝った。

日が傾き、犬舎が夕日に真っ赤に染められる頃、今日もまたいつものように何もなймаま終るのか、とフレンが闘犬たちに餌をやりながら、ぼんやりと考えていた頃である。

犬舎側の入り口から、一人の男が入ってきた。

年は三十に満たない位で、前が大きく肌蹴たシャツに、手の指全てに嵌められた銀の指輪に、坊主頭、と、なんとも軽薄な感じの男だ。

「おまえがフレンか」

男がフレンの目の前までやって来て尋ねた。

「そつだよ。お兄さんは？」

「おれはルシオつてんだ。おまえもプラデスに暮らす旅団員なんだから、名前くらいは知ってるだろう」

ルシオ。プラデスの旅団員は毎日その名を一度は口にする。プラデスを統括する旅団の幹部だ。

「知ってます」

これがあのルシオか、とまじまじとフレンはルシオを観察した。

「今日はちよつと話があつてな。おまえは例のチキータの事件も解決したらしいし、直々に来てやった。辞令だ」

辞令、の意味が解らずフレンがそのまま黙っていると、ルシオがまた後を続けた。

「急な話ですまんが、明日君にはバツハモンテに発つてもらう。本部から要請で、頭の切れる十二歳の“お子様”が必要だそうだ。よろしく頼む」

ルシオはそれだけ言うと、にこりともせずその場を立ち去るうとした。慌ててフレンが呼び止める。

「どういうことですか？ バツハモンテ？」

「おれも詳しくはしらん。しかしこれも旅団の仕事だ。文句はないな？」

フレンは言い返すことも何かを聞きなおすこともできず、そのまま俯き、ルシオはじゃあな、と行って犬舎を出て行った。

餌をやり終え、フレンはそのままとぼとぼと荒ら屋へ戻った。突然のことに、もうなにも考えられなくなっていた。

夜の食事時、オルエツタとヤーゴに今日ルシオから言われたことを打ち明けると、ヤーゴは憤慨し、オルエツタは悲しそうな顔でただただ押し黙るのみだった。

「こんなこつとがあるか！ おれあ、今からルシオのところへ行つて、そんでその辞令とやらを取り消してもらおう。安心しろ、フレン」

ヤーゴは鼻息を極限まで荒くしながら、立ち上がった。フレンは肩に手を置かれて少し安心したが、オルエツタの顔を見てまた不安が舞い戻った。

「ヤーゴ」

オルエツタが静かにそれを止める。ヤーゴの眉間に皺がよった。

「何事も言ってみんとわからん！」

「駄目よ！ ルシオは一度自分で決めたことは変えないわ！ いったって自分が一番賢くて正しいと思ってるんだから！」

「やってみんとわからん！」

フレンは急に始まった二人の言い争いを、どういう気持ちで受け止めればいいのか、全く判らなかつた。自分の為に、こんなにも必死になっている二人がいて嬉しい反面、二人を苦しめている自分と、そしてその二人から離れなければならない自分に、腹が立って落胆して空しくなつて、そして悲しくなつた。

「とにかく、おれあ今からルシオのところへ行つて来る」

ヤーゴは結局そう言いはなつて、いつものように乱暴に荒ら屋を飛び出して言った。

残されたオルエツタとフレンの間にはしばらく沈黙が横たわっていたが、少しして、意を決したようにオルエツタが話し始めた。フレンはそれを、自分への労わり、慰めだと理解した。

「私のお父さんはね、旅団員で、ヤーゴはお父さんの弟なの。お母さんは、名前すら知らないけど……私が八歳のとき、お父さんが死んで、私は旅団の手伝いをしながらいろんな街を点々と移り住んでいたわ。もう死んでやろう！ って何回も思った。だって何も楽しくないんだもん。でもね、そんなときに、ヤーゴが私のことを探し出してくれたの。生前のお父さんとヤーゴは十五歳のときに別々に住み始めてから、数回しか喋ったこともないほど仲が悪かったみたいで、ヤーゴは私が生まれたことすら知らなかった。それでも、私のことを見つけてくれて、面倒をみてくれた。とびつきり、ってわけじゃないけど幸せにしてくれた。だってお父さんが死んだあの日から、誰かに大切に想われたことなんてなかったから」

オルエツタは笑っていたが、フレンにはオルエツタが涙を堪えているのが判った。

「フレン。たとえ今ここで別れても、“生きてさえいれば”いつだって会えるし、私とヤーゴがあなたを想う気持ちは変わらないわ」

そう言い終えると、オルエツタの瞼に溜まりきった涙が真っ直ぐ落ちて、そっと床を叩いた。

ハビがフレンの横でクーンと悲しげに鳴いた。

第七節 魔獣

ルシオに“辞令”を言い渡された次の日、フレンは朝早くに散歩に出かけることにした。ハビは珍しく、フレンが起きてもその場に寝ていた。フレンは、少し不思議に思いながらも、あまり深く考えずに家を出た。

朝の清しい風が頬を撫ぜる。街にはまだ疎らにしか人の姿が無い。

ヤーゴは結局、真夜中に帰ってきた。

オルエツタが結果を聞いたが、ヤーゴは何も喋らずただ頭を振るだけだった。

ゆっくりと息を吐き出しながら、道を歩いてゆく。フレンの頭のなかを、色々な想いが駆けていった。

ヤーゴに聞くところによれば、ダニがもうすぐ荒ら屋に迎えに来るらしい。フレンはその馬車に乗ってバツハモンテまで、連れて行かれる。

フレンは別れの迫っているあの身を切るような空気に耐えかねて、家を出てきたのだ。フレンに、ヤーゴに、オルエツタ。誰も話そうとしなかった。三人は朝とても早く目覚めて、もしくは寝れずにいたのかもしれないが、食卓に集まり、そのまま黙って朝食を食べた。おはようの挨拶も、なしだ。

まるで、別れの朝が始まらないふりをしているかのように、三人は黙り続けた。

結局フレンは起きてから一言も喋らないまま、散歩に出てしまった。

プラデスの街をぐるっと周って、歩きつかれた頃、フレンは荒ら屋に戻ってきちんと別れの挨拶をしようと思い、荒ら屋に足を向けた。辛くとも、今まで沢山のを恵み与えてくれたヤーゴとオルエツタに、礼を尽くして感謝の気持ちをちゃんと伝えなければ、と

フレンは思い、その足も自然と速くなった。

荒ら屋が近づいてくると、フレンはすぐにその異様な雰囲気を感じた。早朝にも関わらず荒ら屋を囲むように人だかりが出来ている。そればかりではない。辺りには叫び声や怒号が飛び交っている。フレンは衝動的に人だかりの中心目掛けて走った。

近づいてみると、そこには女子供がいなのが判った。それぞれ手には鉈やナイフ、鍬や果てはただの棒切れまで、武器になりそうなものを握り締めている。

怒鳴り声と悲鳴の交じり合う異様な空間の中心に、フレンは体をねじ込んだ。

視界が開け、喧騒の中心地の光景が、フレンの眼に飛び込んできた。

頭の中が真っ白になった。思考の鉢を逆さまにされたように、なにも考えられない。

フレンは眼を瞬いた。なにも変わらない。夢ではない。

微かにうめき声が漏れた。言葉にならない。

全身の痛覚が、現実感を喪失したように、薄れてゆく。

荒ら屋の前は、一面血で染まっていた。

吹き飛ばされた扉の横に、片足のもげたヤーゴが横たわっていた。足は膝あたりで無残に引きちぎられ、血が流れ出している。

そして、半壊した荒ら屋から巨大な“犬”が顔を出している。

馬の二倍ほどあるその躯体は、樹皮のような質感の太い毛に覆われている。白目がなく瞼の内側が全て黒い様は、まるで童話に出てくる悪魔を連想させ、鋭い牙から粘性の高い唾が滴り落ちている。

その大きく鋭い牙は、女性の腹を突き刺していた。女性は“犬”に銜えられたまま、ぴくりとも動かない。

フレンはその女性がオルエツタであることに、しばらく気づかなかった。

群集のうちの一人が、ナイフを握り締め、“犬”へと向かってゆく。

しかしその刃が巨軀に埋もれることはなく、硬い毛に跳ね返されたあと、前足で軽く撫でられ男は吹っ飛んでいった。

男達の威嚇するような怒号が一層大きくなるものの、その後にくものはいない。

後ろから騒ぎを聞きつけた城の兵たちがやってきた。軽装ながら手には槍と弓を持っている。

“犬”は、依然オルエツタを銜えたまま、次の行動を思索しているかのように、眼をじろりじろりと左右に動かした。

十人ほど居る、駆けつけた兵が一齐に弓を撃つものの、やはり硬い毛に阻まれて全て弾き返される。

“犬”がオルエツタを放り投げた。まるで大きな人形のように、ヤーゴの横へと転がってゆく。“犬”はその大きな鼻の先で人だかりを蹴散らし、兵士の一人に齧りつく。

フレンは事の成り行きをただ、呆然と見つめていた。一秒一秒がゆっくりと過ぎてゆく。

と、ある時、ふいに悪魔のような二つの瞳がフレンを捕らえた。フレンも、考えることもなくそれを見つめ返す。

そしてフレンは、またあることに気づいた。

「ハビビ？」

第八節 喪心

「ハビ……なのか？」

フレンは呟いた。

こちらを見つめる、その真つ黒な瞳。血の滴る牙。太く硬い毛。そしてその巨大な体。全てにおいて元の面影はないが、フレンにそれがハビだとなんとなく判った。

ハビはじつとフレンのほうを見つめている。何か思うところがあのようにも見えるが、その表情に一切の愛慕の感情は見られない。ただただ冷たい眼で、フレンのことを突き刺すように睨んでいる。

「オ……オル」

片足を失って気絶していたヤーゴが意識を取り戻した。

すぐ横で生氣無く臥せるオルエツタに向かって、震える力なき手を、懸命に伸ばしていた。

「オルエツタ！ オルエツタあ！！」

ハビがじろりと、ヤーゴのほうを見た。殺す気だ、とフレンは反射的に感じた。

ヤーゴの悲痛な叫びが、フレンの鼓膜を叩く。

全ての事象がその速度を落としてゆく。フレンには全てがスローモーションに見えた。

ハビが後ろ足に力を溜める。

フレンの横の兵が弓を放った。

牙から滴った血が、地面に触れる。

ハビの後ろ足が、力強く地面を蹴る。
口が大きく開く。殺意がその眼に滾る。
その牙が、ヤーゴを突き刺さそうとしている。

「やめろおおおお!!」

あとになってフレンが覚えていることといえば、声帯が引きちぎれそうになるまで力の限りに叫んだことだけだった。

気がつくと、ハビは宙を舞っていた。十メートルほど滑空した後民家に激突した。

なぜハビが突然何かに押されるように吹っ飛んでしまったのか、その場に居る人間で理解できるものは一人もいなかった。

民家はその衝撃で、全ての壁が崩れ去り、屋根が落ちた。集まっていた凡そ五十人ほどの男たちは、一人の例外なくその場に座り込んでしまっていた。

そのうちの一人が立ち上がり、恐る恐るハビに近寄っていく。

「死んでるぞ!」

その確認の声に、その場全体から安堵の声が漏れた。が、そんな雰囲気はすぐに目の前の凄惨な光景が掻き消してしまった。

夥しいばかりの血の海に、幾つもの死体が泳いでいる。気を失っている者や、酷い怪我をして呻き苦しんでいる者も大勢いた。

フレンはあたりの惨状に呆然としながらも、オルエッタとヤーゴのもとに駆け寄った。

二人に近づくと、鼓動が重く、早くなる。

二人に近づくと、頭の片隅にあったある認識が、顔を擡げ、

こちらに迫ってくる。

傍まで寄ると、フレンはオルエッタが死んでいることがわかった。
ヤーゴはもう何も喋らなかつた。

フレンも。

そのうちヤーゴは治療のためだろうか、誰かに担がれて行ってしまった。

残されたフレンは、ずっとオルエッタの亡骸を眺めていた。

第九節 脱走

フレンは治療院の門をくぐった。もう何も考えなくなかった。

プラデスの市場から少し離れたところに、治療院はあった。医師は足取りのしつかりとした年老いた男と、城から派遣されている若い男の二人がおり、先の惨劇で治療院に溢れかえる患者を休み無く看病していた。

治療院の中は、ベッドが所狭しと並び、その全てに患者が横になつていた。あげく、そこらにある椅子や、さらには床にまで、患者はぐったりとして治療の順番を待っていた。

フレンは奥のほうに、ベッドに寝ているヤーゴを見つけ、ゆっくりと近づいていった。

フレン、とヤーゴがそう言いかけて止めた様に、フレンには思えた。二人ともなにも喋らず、幾許かが過ぎた。

「オルエツタは……」

ヤーゴが意を決したように、ぼそりと呟いた。随分と掠れた声だった。

「あいつあ、おまえたつちの事がずいぶんと気に入ってたようだった……おめえたつちがウチに来てから、オルエツタはよく笑うようになった……“旅団”なんてえものは、ただ飯を食うためだけのものだが、おまえらが来てからの暮らしはそれ以上だった。なんちゅうか、起きて飯食って寝るだけ、それ以上の……まあ、上手くは言えんが」

時折、足の痛みに顔を歪ませながら、ヤーゴは静かにゆっくりと語った。フレンはただ、うん、と何回か小さな声で相槌を打った。

そしてまた、二人とも押し黙り、沈黙が流れた。

「なにか食べるもの、持って来るね」

フレンは結局何も言えず、そう口にして立ち上がった。

頷くだけのヤーゴを後に、フレンは治療院を出た。覚束ない足で、荒ら屋へと向かう。

「おい！ おまえがフレンか、探したぞ！」

と、突然後ろから野太い声に呼び止められた。思わず後ろを振り返ると、ニメートルもあるうかという巨大な男と、その後ろに隠れるようにしてダニがいた。

フレンは何も喋らず、なんですか、といった風な眼で大男を仰いだ。

「おまえ！ バツハモンテに行かなきゃなんないだろ！ ルシオが言ってたぞ！」

低く太い声が、響く。その威圧的な声に、まるで弱りきった心臓を掴まれたようで、フレンは眉を顰めた。

「お、おれは一応ルシオに抗議したんだぜ！ こんなことがあったから、フレンの出発を遅らせようってさ。でもやっぱりルシオは聞く耳持たなくて……」

「うるせえぞ！ ダニ！」

おどおどと言いつつダニに、大男は一喝した。

「ぼく、いきません」

フレンはきつぱりとそう言った。普段なら、この大男に怯え恐がっていたところであろうが、今はなにも感じなかった。しかし、だからといって、フレンが強くなったわけではなかった。

「行くつたら行くんだよ。馬鹿か」

そういつて大男は膝を曲げ、頭をフレンのほうに持ってきたかと思つと、その大きな手でフレンの頭を思い切りはたいた。

フレンは抗議する間も、騒ぐ間もなく気を失い、その場に倒れこんだ。

気がつくと、がたがたと揺れる馬車の上だった。

またか、とフレンはうんざりした。しかしまだ少し幸運なことに、前回と違って手足は縛られていない。

「まったく気味悪いガキだな。獣の眼えしてやがる」

「そんな言い方ないだろ……」

「うるせえ。なんかおれに文句でもあんのか」

「……いや……」

前の席から会話が聞こえる。ダニとあの大男のものだ。

お腹にぼつかり穴が開いていると感じるほどの空腹感がフレンを襲った。喉も乾ききっている。

一体どれくらいの間気絶していたのだろうか。

「ねえ」

掠れて上手く喋れない。が、それでも前の二人はフレンが起きたことに気づき、振り返った。

「なんだ起きたのか」

と、大男。

「ここはどこ？」

「もうすぐバツハモンテさ。二日間も寝てたんだぞ、フレン」

そんなダニの言葉に、寝てたんじゃない、とフレンは頭の中でつい反論してしまう。

幌と大男との隙間から覗いてみると、一面に草原が広がる中に走る細長い一本道を、馬車は進んでいた。

「トイレ」

フレンは考えなしに呟いた。

「は？」

大男が不機嫌そうに返す。

「トイレに行きたい」

フレンの要求に大男は厭そうに溜息をひとつついて、そこら辺でしてこい、と言って馬車を止めた。

体に全く力の入らないフレンは、ふらふらと危なげな足取りで荷

台を降りると、そのまま街道脇の草むらに入ってしまった。

生い茂る草木は、悠にフレンの身丈を越すほど長く、完全にフレンの姿を包み隠した。

と、ぼーっと茹だったフレンの頭に、囿になった時のことが、ふと過ぎった。

「あんまり遠くにいくなよ！」

後ろから大男の怒鳴り声が聞こえる。

風が草原を揺らす。世界が傾いているようだ、とフレンは思う。

特段、考えがあったわけではなかった。

しかしフレンをここに留まらせる理由など、最早なかったのだ。

アデルは去り、オルエツタは死んだ。ヤーゴは怪我に臥せり、そして旅団によって引き離された。

なんとかなる、生きてゆけると思ったわけでもない。

とりあえず、フレンは走り出したかったのだ。

「おい！ 早くしろよー！」

フレンはそんな怒号を背に、頼りない足取りで逃げ出した。

当ても無く、ただ、馬車から遠くへ行くことだけを考えた。

息が上がる。唾液が喉に詰まる。

水、と頭に浮かぶが、直ぐに考えないようにする。
今は逃げなければ。

胃液が上がってきて食道を焼く。

膝が笑う。

後ろで叫んでいる大男の声が次第に小さくなってゆく。

風が、背中を押してくれたような気がした。

第十節 ガロ

草むらを抜け、鬱蒼とした森に突っ込み、しばらく走ったあとでとうとうフレンの体力は尽き果て、その場に倒れこんでしまった。

指一本すら動かない。肺一杯を空気で満たすことも叶わない。それほどまでにフレンは憔悴しきっていた。

このまま起き上がれずに死んでしまいかも、とフレンは糖分の足りない頭で考える。

瞼が重くなつてゆく。景色が霞む。

と、後ろのほうから、誰かがこちらに向かってくる足音がした。

追いつかれたか、とフレンは残念がったが、確かめるために首を動かす気力もなかった。

乾いた枝を踏み折る音が段々と大きくなってきたところで、フレンは諦めて目を閉じた。

どうにでもなれ。

そう思いながら、気絶に近い眠りに身を委ねた。

頭に何か冷たいものが置かれたのを感じて、フレンは目を覚ました。

フレンはある小さな部屋のベッドに横たわっていて、おでこの上には水で湿らせた布切れが重ねられて置いてあった。

その部屋は小さいながらも確りと太く艶のある木材で組み立ており、なぜか懐かしさをフレンに感じさせた。

やさしい匂いがフレンを包んでいる。

フレンの前には、老人が湯気の立ったスープを持って、座っていた。

「起きたか。ほれ、腹が減つとるだろう」

そういつてフレンにスープを差し出すが、状況が全く飲み込めないフレンは、受け取らないどころか微動だにできなかった。

「ここ……どこですか？」

「はっはっ。思ったより礼儀正しいな。ここはわしの家だ。バツハモンテの外れにある。そんなことより、ほら、食べなさい」

フレンは結局状況を理解できないままだったが、思わず差し出されたスープを受け取ってしまった。確かに、胃の中が空っぽで、今にも再び気絶しそうである。

「ありがとうございます」

「たまたま街へ行く途中に倒れてる君を見つけてな。うちへ連れ帰ったわけだ。君、名前は？」

「フレン、です」

「フレンか、よい名前だ。わしはガ口と言つ」

ガ口は、フレンが見たところ年は六十歳前後といった感じで、顔に刻まれた深い皺の数の割には、確りとした体つきをしていた。

突然の老人の好意に怪しさを感じながらも、フレンは空腹に負けてスープを口に入れた。

からからになった体に水分と栄養が染み込んでゆくを感じた。

中に入っているのはじゃがいもだけ、という質素なものだったが、フレンにはこの上なく美味しく感じた。

「スープなら沢山ある。君が望むなら、いくらでもここに居ていい」

ガロは、勢いよくスープを飲むフレンを見ながら、静かに言った。

「居てもいいって、どういうことですか？」

「住んでもいいってことだよ。君がそうしたいのならね」

突然のガロの申し出に、再びフレンは混乱した。

住んでもいい、とはどういう意味だろう。

「なぜ、ですか？」

「なぜとは、なんだね？」

「どうして、ぼくをここに住まわそうとするんですか？」

「住まわそうとはしてないよ。住んでもいい、と言っているだけだ」

そう言っただけでガロは大きく笑い、また話を続けた。フレンはそれをスープを飲みながら聞いた。

「飢えている子供を助けるのに、そんなに理由が必要かね。君にも帰るところがある、というのなら、そこまで送り届けてやってもよいが、そんな子があんな森の中で倒れているかね？ なにか事情があるのかな？」

フレンはガロの言葉に、荒ら屋を思い浮かべた。

アデル、ヤーゴ、それにオルエツタ。良い思い出が頭を通り過ぎ、そして直ぐにあの凄惨な場面も思い出した。

「帰るところ、ありません」

フレンは、短く小さく、そう言った。

「そうか。ま、住むかどうかなんて、適当に決めりゃいい。他のところへ行行って見て、駄目で戻ってきてもいい」

ガロはそう言って立ち上がり、部屋の扉を開けた。窓から扉へ、風が抜ける。

「とりあえず今日はゆっくりしていきなさい。何をするにも、体は大事だ」

「あ、あの」

部屋を出て行くこととするガロを、フレンが呼び止めた。

「なんだね？」

「お、おかわり、ありますか？」

第十一節 パントーハ

フレンがガロの家に居候し始めて一ヶ月が経とうとしていた。

この頃はまだ、フレンは毎晩、一ヶ月前のあの日の出来事を思い浮かべながら、眠れない夜を過ごしていた。

オルエツタの墓は、ヤーゴがきちんと建ててくれたのだろうか。

そのヤーゴの具合はどうだろうか。

アデルはオルエツタが死んだことすら知らないのだろうか。

色々な考えと、様々な後悔が頭の中を永遠と渦巻いていたのだが、それを解決する方法をフレンは持っていなかった。

ここでの暮らしぶりがひとつ落ち着いたところで、一度プラデスに帰ってみようか、という考えが浮かんだことがあった。

しかし、フレンはすぐさま、東雲の旅団からあんな形で逃げだしたのだから今戻ってもヤーゴに迷惑がかかるだけだ、と思い、泣く泣くそれを諦めた。

その後、フレンは手紙などで、なんとか自分が無事だとヤーゴに伝えようと試みたが、結局どれも他の旅団員に知られてしまいそう取止めることになった。

また、フレンには自分がいないほうがヤーゴは楽に、幸せに暮らしてゆける、という考えもあった。オルエツタの居なくなつた今、戻つたところで自分は確実に厄介者になってしまうと。

そんなことを、フレンは夜な夜な考えていたのだが、そんな状況を一切知らないガロと一緒に日々を過ごすことによつて、フレンの不安や後悔と言つた気持ちは、段々と薄れていつていた。

「っはあ……はあ……も、もう無理……」

「あと五周だ！」

「さつきはっ……三周つて……っはあ……言つてたのに！」

ブルーナ河から運ばれてくる清らかな水の匂いが鼻をくすぐる。丘の上に建つガ口の家から見下ろす景色はとても素晴らしく、深呼吸をする度に清々しい気持ちになる。

そんなガ口の家を、フレンは先ほどから走り続けていた。

「まだまだ平気そうな顔しとるからな。ほら、あと七週！」

この家に住まわせてくれ、と拾われた翌日にフレンが頼んだ際、ガ口は条件を一つと、提案を一つ出した。

この家に住む限り家事を手伝うこと。全てをやる必要はなく、ガ口と分担する形になるが、決して手は抜かないこと。これがこの家に住む為の条件だ。そして、ガ口の提案とは。

「あと九週！」

「ええっ!？」

とある徒手格闘術を、ガ口に師事すること。

その提案を受けたフレンは、今、ただひたすらに走りこみをさせられている。

「やっぱりあと十五週！」

ガ口の提案に、フレンは当初驚き、その意図を理解するのはかなり困難であった。ガ口の弁によると、彼は“パントーハ”という徒手、つまり素手で戦う格闘術の達人である、ということであった。フレンとしてはあまり、戦う、だとか、殴り合う、だとかには然程興味は無かったのだが、タダで住まわせてくれるというガ口の提案を断るのも申し訳ない気がして、ついつい受けてしまったのだ。

そしてこの様である。

「もうめんどくさいから、ぶっ倒れて起き上がれなくなるまで走ってなさい」

ガロの説明によると、パントー八とは、何時如何なる状況にあるうとも自己を生存させることを目的とした格闘術である、らしい。

その為、その訓練は現実に起こりうるほぼ全ての状況を想定して行われる。

一人対一人、一人対五人、素手対刃物、狭い路地裏での戦闘、素手対弓、一人対十人、開けた土地での戦闘、負傷時における戦闘、逃走、重い怪我をしている素手の一人対弓と剣を持った十人との路地裏での戦闘、などである。

フレンは、家事を合い間合い間に挟みながら、午前中は基礎体力や筋力を鍛えるために費やし、午後はガロにパントー八の技術を習った。

「よし、三十分ほど休んだら、洗濯をしなさい。その後昼飯を食べたら、またトレーニングだ」

フレンは、ガロの指示にぶつぶつと小さく文句を言いながらも、その通りに従った。

洗濯を済ませると、ガロが昼食の用意をしてくれていた。簡単な朝食を済ませると、また屋外に出て訓練が始まる。

「パントー八で一番大切な考えは、最小の動き及び最小の力で、最大の効果を得ることにある。その為に必要な事はなんだ？」

「はい、反復訓練による反射運動を利用すること、人体の理解です」

「うむ」

と、ガロとフレンは会話しながらも、同時に組み手を行っている。この組み手練習は少し特殊なもので、ナイフに見立てた棒切れを持つガロが一方的、かつ連続的にフレンを攻撃し続け、それをフレンがひたすら防御する、というものである。

「ではパントーハの行動原理とはなんだ？」

「は、はい。脅威の確認、負傷の最小化、主導権を出来るだけ早く奪うこと……こ、攻撃の最大化……です」

「では攻撃を最大化するには、何が必要だ？」

「ダメージを与えやすい部位を狙うこと……その場にある物を利用すること、です」

「では負傷を最小化するには？」

ちなみにパントーハの訓練中だけは、フレンはガロに敬語を使うように言われている。

「は、はい……居つかないこと、と……防御と同時に攻撃を……繰り返すこと……です！」

「よろしい」

このような感じで、フレンは一日のほぼ全ての時間をパントーハに費やしていた。

ガロの指導は、フレンの予想以上に解り易く且つ効果的なものであった。

フレンがガロと住み始めて一年を過ぎる頃には、毎日の訓練によって、フレンは凡そパントーハの全てについて理解したと言ってもよいレベルにまで達していた。

午前中の体作りの訓練メニューは、フレンが自分で決め自分で行っていたし、午後のガロとの訓練は、より実践を意識したものや、いろいろな状況について学ぶこととなった

二年を過ぎる頃、急にガロが一般的な教養の勉強もしたほうが良い、とフレンに言ってきた。なぜそんなことを急に言い出したのか、フレンには結局判らなかつたが、異論はなかつたし、訓練の時間も住み始めた頃より圧縮されて余裕ができていたので、一日のスケジュールに座学を追加することとなった。

フレンにとって、これは予想もしていなかつたことなのだが、ガロとの生活はとて心地の良いものになっていた。

第十一節 パンター八（後書き）

初めてあとがきを書きます。十です。

そして、ここまでお読みいただいた方々、本当にありがとうございます。ます。

これから、アルセオ・サーガはどんどん面白くなっていきます。そのはずです。

先の長い話になりますが、どうか完結までお付き合いいただければ、これほど嬉しいことはありません。

また、お気に入りに入れてくださった方々、並びに評価をしていたいただいた方々、本当にありがとうございます。

感想欄のように、個別にお礼ができませんので、この場をお借りしてお礼申し上げます。

拙作が受け入れられているのだ、と知ると益々筆に力が入ります。書き続ける力とさせていただいています。

改めまして、ここまでお読みいただき本当にありがとうございます。これからもアルセオ・サーガをよろしく願います。

ミッル

第十二節 良い人間であれ

フレンにとって大きな疑問だったのが、一体ガ口というこの老人が何者であるのか、である。

働いている様子が全く無いのに、どこから沸いてくるのか、生活費はきちんとあつたし、パントーハの達人で、フレンに講ずることが全く不自由でないレベルの教養と、その他様々なことに精通している。体も同じ年の老人に比べれば、人一倍丈夫で元気である。

そうして三年が過ぎた頃のある日、フレンは座学の途中で思い切つてガ口に聞いてみることにしたのである。

それはフレンにとってなかなか勇氣のいる事でもあつた。

普通、ガ口くらいの年の老人といえば、昔話や身の上話、過去の栄光などを好んで口にしたがるものであるが、ガ口には全くといってその気がない。フレンは、そういう話をしたがらないのは、自分と同じく、なにか特別な事情があるからだ、と考えていた。

自分を無償で住まわせてくれている人間の、そういった領域に無闇に踏み込むことは、十二、三歳の子供でもやはり気が引けたのである。さらには、フレン自身も自分の話をガ口にしたことがないことも、ガ口にそういう類の質問をする気を失せさせた。ガ口がフレンについて知っていることといえば、身寄りの無い子供、くらいの僅かな情報であつた。

それでも、同じ屋根の下で三年間も寝食を共にすれば、知りたい、というより、知らなければ、という気持ちが大きくなってくる。加えて、“もしそんな質問をすれば、家を追い出されるのではないか”という恐れも、住み始めた頃より格段に薄れていた。そういった流れで、フレンは三年という年月をかけて、ガ口に質問するに至つたのであつた。

「……と、言うわけである。つまり加速度というのは」

「ねえ」

「なんだ、話の途中だぞ」

フレンに講義を遮られて、ガロは露骨に眉をしかめた。

「……ガロじいは以前になにか仕事をしてたの？」

意を決して質問する。

が、その答えはフレンの期待に沿うものではなかった。

「ああ、していた。が、その話はあまりしたくないな」

そう言われて、フレンは胸の奥がちくりと痛んだ。

しかし、ここまで言ってしまったのだからと、この際聞きたいことを聞いてしまうことにした。

「じゃあなんで僕をここに住ませたの？」

「住まわせてない。住んでもよいと言っただけだ。お前が勝手に住み始めたんだ」

許可を与えておいて勝手に、とは随分な言い草だな、とフレンは思ったが、口には出さないことにした。しかし、ガロの話にはフレンの予想していない続きがあった。

「わしはな、フレン。“良い人間であれ”という言葉をいつも心に留めておる。わしの親父が言った言葉だ」

「“よい人間であれ”？」

「そつだ。良い、悪い、は自分の心が決めればよい。他人にどうこう言われることも、他人にどうこう言うこともない。しかし、自分が“良い”と感ずることがあるのなら、出来る限りその通りに行動しなさい、という意味だ。わしはその言葉通りに、お前を助けてやるのが“良い”と感ずたから、そつしたまでだ」

ふーん、とフレンは納得したような、そつでないような声をあげた。正直なところは、あまり良く理解できなかった。

「じゃあ、誰かが人殺しは“良い”つて感ずたら、それはそれで間違つてないつてこと？」

フレンは十五歳の子供らしく、極端な例をガロにぶつけた。

「ああ、それも間違いではない。しかしその誰かさんの周りには、それを“悪い”と思う人間がいるかもしれん。それは人それぞれというわけだ」

「僕は殺すのは“悪い”と思うけどなあ」

「では、お前がそつすればよいだけのことだ。その誰かさんが人を殺すのを止めることが“良い”と思えば、そつしてもよい。要は己の良心に従えということだ」

「あまり良くわからないけど」

「じき、解る時がくる。そのためのパントーハなのだから」

フレンは、良心に従う、の部分もあまり解らないでいたが、そのためのパントーハ、という部分にいたつては全くもつて理解不能であった。

結局ガロに関する謎は、あまり解明されずにフレンの質問タイムは終つてしまつた。

判つたことと言えば、ガロがフレンを拾い助けたのは、自らの良心に従つたから、ということだけであつた。

「物騒な話になってしまったな。続きは明日にして、晩御飯にするか」

ガロのその号令で、二人は揃って夕食の準備をする為に台所へと向かった。

階段を先に下りてゆくガロの背中が、なぜか少しだけ寂しそうにフレンには見えた。

第十三節 老人と青年

（十七日前）

ガロに誕生日を聞かれた際、フレンは咄嗟に、九年前のあの日付けを口にした。

あの身を裂くような寒さの夜、アデルと出会い、そして自分を九歳だとアデルが勝手に決めた日だ。

そうしてフレンの誕生日が決められた訳であるが、その誕生日がガロの家に住み初めて六回目、すなわち十八歳の誕生日を、一週間後に控えた夜のことである。

フレンはここ一ヶ月、ある想いを胸に秘め、日々を過ごしてきた。ある計画、と言ってもよい。フレンはそれが頭に浮かんだ瞬間から、その考えに取り付かれたように、一日中そのことばかり考えるようになった。

それは、いつか別れてしまったアデルに関することだった。

「ガロじい。ちょっと話したいことがあるんだ」

フレンは居間で暖炉に手を当て揉んでいるガロの背中に話しかけた。

「なんだ」

ガロは振り向かないまま、短くそう応えた。

「……俺、一週間後、十八歳になったらアルダナへ行っ、帝国兵になる」

あまりに唐突なフレンの計画発表に、ガロはしばらく黙りこんだ。フレンは、なにも言わず、ガロが口を開くのをただ待った。

「そんな馬鹿なことがあるか」

ガロは依然、背中を向けたままだ。

「俺、どうしても確かめたいことがあるんだ。それにいつまでもガロじいの世話になってるわけにもいかない。ガロじいから教わったパントーハもある」

フレンは静かに、しかし確りとガロに自分の意思を告げた。

「ふざけるな！！ 帝国兵なんかになる為にパントーハを教えたんじゃない！ あれはお前が、正しく生きていくための力として、良い人間になるための材料として教えただけだ！ それに余計な心配をせんでも、わしが死ぬまでは、お前の面倒は見てやる。どこぞに行くのは、わしが死んでからにしろ！」

ガロが珍しく語気を荒げた。背中から怒りが伝わってくるようだった。

しかし同時に、フレンはそう荒れるガロから、ある想いを感じたような気がした。

ガロはフレンを手放したくないのだ。いつかのヤーゴヤオルエツタのように、大切に想ってくれているのだと。

「ガロじい……今まで黙っていた、俺の昔のことを……ガロじいに拾われるまでの話を、聞いてくれないか。今まで話せなかった、俺の話を」

フレンはそう言ったあと、ガロの沈黙を許可だと捉えて、この家に来るまでのことを始めから話し始めた。

ごみを漁り生活していたこと、アデルと出会ったこと、ヤーゴに拾ってもらい、オルエツタに世話をしてもらったこと、アデルとの別れ、そしてオルエツタの死。

フレンの告白は何時間にも渡った。

途中、フレンは語りながら一人で笑ったり、悲しくなったりした。思い出を振り返ることなど、ここ何年も、辛すぎてしていなかったから。

思い出さなければ、ガロとの心地よい生活が、毎日続いていたのだから。

ガロはやはり背中を向けたまま、無言でずっと聞いていた。相槌さえ無かったが、フレンにはガロがしっかりと聞いてくれていることが、確かに分かった。

そしてガロにフレンが拾われたところで、フレンの話は終わりを迎えた。

「それで」

ガロがしばらくの沈黙の後、重苦しく言った。

フレンがガロの後を続ける。

「それで……俺、帝国兵士になって、アデルに会うよ。王族だからなかなか会えないと思うけど……頑張つて、話ができる地位になるまで登りつめる。聞きたいことが沢山あるんだ。言いたいことも……」

…オルエツタが死んだことも、言わなきゃなんない……それに、大人になったアデルの顔も見てみたいしね」

暖炉の炎が、段々と縮んでゆく。くべる薪も、もう後僅かにしか残っていない。

「そうか」

また幾許かの沈黙を挟んで、ガロはそう言った。

「俺……」

「もうよい。年甲斐もなく、お前の意見に反対してしまったようだな……正直なところ、お前がこの家に来てからというものの、わしは日々救われる想いだった」

「救われる……？」

「ああ……今度はわしが昔話を聞かせる番だな。一度、お前に聞かされて、話すのを断った昔のことを……あれは、ただ恐かったただけなんだ。お前に嫌われてしまうのではないかな」

フレンは三年前、ガロに過去の仕事のことを聞いて、話してくれなかったことを思い出した。

あの時、ガロが自分に嫌われるのを恐れていたなんて、今まで思ってもみなかったことだった。

そう考えれば、十四歳の頃、ガロが突然に教養を学んだほうが良いと言い出したのも、今から考えればあれはこの頑固な老人なりにフレンの教育方法に精一杯頭を悩ませた末の考えだったのかもしれない。

そうしてガロはゆっくりと、自らの辿った路について、語り始めた。

「わしはアルダナの隣にある町、エスコバルというところで生まれた。親父も、そのまた親父も帝国兵士だった。それで、わしも当然のように帝国兵士を目指した。後から聞いた話では、親父は学者にしたかったらしいがな……ま、笑い話のひとつだ」

そうやってガロはくくつと笑った。フレンは、ガロが色々なことに精通しているのはそんな父親のおかげかもしれない、と推測した。「もともと小さなころから武術の訓練を色々と受けていたおかげで、わしは兵士仲間の中では、腕が立つほうでな。結構な早さで出世していった。色々な戦場や、危険地帯に向かい、任務を次々こなした。そうやって死線を幾度となく、身一つで掻い潜ってゆくうちに、わしは急速に鍛えられていった。帝国兵の中で、当時わしに一对一で敵う者など一人としていなかった。それで、わしは軍上層部に頼まれて、パントシステムという軍隊武術を創りだした。その後、わしはパントシステムの教官として帝国兵の教育をしながら、なおも前線に出続けた。まあ、判つとると思うが、このパントシステムが後のパントー八となる」

ガロはそこまで話すと、一度深く息を吐いた。
暖炉の炎が一層小さくなってゆく。

「そんな折……わしが、四十五歳の頃だ。ランベルト帝国はバウムガルデン王国と戦争の真つ只中でな、王国の軍はアルダナの直ぐ手前まで迫っていた。そこでわしに特別な任務が言い渡された。帝国軍の精鋭部隊を率いて、とある場所に密かに潜伏せよ、という命令だった。わしはなんの疑念も抱かなかった。アルダナの隣、エスコバルにはわしの親父、お袋、嫁、それに十二歳になる息子が暮らしていたのだからな。家族を護るため、当たり前のことだった」

フレンは、十二歳の息子、という単語に反応し、目を細めた。
ガロに子供がいたなんて、想像すらしていなかったことだった。

「その後すぐ、王国の軍が侵攻を始めたのだが、わしのところには情報はこなかった。ただ、ある場所にひたすら潜伏していただけだった。そうして、潜伏し始めて十日、軍からとある貴族の中将がやってきて、わしに命令した。バウムガルデン王国軍がエスコバルを制圧した、敵軍が勝利に浮かれているうちに密かにエスコバルに移動し奇襲を仕掛け、隠然と大将を討ち取り、エスコバル内の敵軍を制圧せよ、と……わしは部隊を引き連れて全速力でエスコバルへ向かった。わしらが隠れていた場所はエスコバルから近く、それでいて敵がエスコバルを制圧したとしてもそこからは絶対に確認できない場所だった。そう、最初からエスコバルが犠牲になることは決まっていたのだ。町一つが囹、生け贄だったのだ。わしらが着いたとき、エスコバルは地獄そのものだった。少なくとも、そこが故郷のわしにとってではな。男は子供であろうが老人であろうが皆首を掻き切られ、女にいたっては皆乱暴された上で鞭り殺しにされていた。帝都アルダナを目の前に控えて、そうやって帝国軍の士気を削ぐのが目的だったのだろう……それからわしは、烈火の如くエスコバル中の敵兵を殺しまわった。一晩に何百人とこの手にかけて。もちろん、敵の大将も……家族はすぐに見つかった。皆、家の中で殺されとった。わしは、そのとき、わからなくなってしまうてな。家族を敵から護るために、兵士になったつもりだったのに、結局わしが殺したようなもんだったからな」

ガロの話はそこで終わった。

フレンには、ガロにかける言葉を見つけることができなかった。

ガロは、恐らくそれで帝国兵を辞めて、こんな田舎に越してきて隠居生活を送っていたのだろう、とフレンは言葉をかける代わりに思っていた。そして自分を拾ったのは“良い人間である”為だとあの時説明していたが、心の奥では、ガロは自分と死んだ息子の姿を照らし合わせていたのではないのだろうか、と。

過去犯した過ちを正すために、あの頃潰えた未来が蘇ったように、自分のことを育てたのではないだろうか。

フレンはそこまで考えて、また胸の奥がちくりと痛んだ。

複雑な気持ちだ、とフレンはガロの背中を見つめながら、自分自身心の内を思う。

「フレン……お前がこの家に来たときに言った通り、わしはお前にここに住んでも良い、と言っているだけだ。出て行くのもお前の自由だ……お前がそう決めたのなら、行ってこい」

ガロが始めて、許可を口にした。フレンはガロの背中に大きく頷く。

「ありがとう。ガロじい」

暖炉の炎がようやく消えた。

赤く燻る炭が放つ、緩やかで暖かな光が、優しく二人を包んだ。

第一節 謎の女性は

（十日前）

「行つて参ります」

フレンの口から最期に出たのは、改まった表現だった。

「忘れるんじゃないぞ」

ガロはそう言つて、にっこりと笑い、扉を閉めた。

忘れるんじゃないぞ　その後は言われずとも、フレンには解つていた。“良い人間であれ”、だ。

丘の上で今一度肺一杯に空気を入れる。故郷の香りかな、とフレンは思う。

青々とした森の向こうに小さくバツハモンテの街が見える。

とりあえず、目指すのはあの街だ。

朝早くに家を出発したフレンであつたが、バツハモンテに着く頃には日が落ちかけ、空は真っ赤に染まつていた。

少しのんびりしすぎたかな、とフレンは来た道を振り返る。もうとうに家は見えなくなつていた。

バツハモンテは、どことなくあの誘拐事件の起こつたアルファロに雰囲気の似た、長閑な街だった。

フレンは十五歳になつた年に、初めてバツハモンテを訪れた。当初からガロはフレンを街へ連れ出そうとしていたが、旅団を脱走した時の目的地がバツハモンテだったことから、フレンは旅団を恐れ

て頑なにバツハモンテに行くことを拒んだ。ガロはそんなフレンの様子を不思議がりながら、深く事情を尋ねることなく、フレンの希望を汲んだ。

初めてバツハモンテを訪れてから、何もこの街に危険がないということがわかると、フレンは積極的に街へ降りていくようになった。食料や生活雑貨の買出しも一人で行った。

小さなこの街ではガロの名はそれなりに通るらしく、フレンも“ガロの爺さんところの子”といった具合に、存在を知られることとなった。もちろん、フレンが持つ二つの“獣の眼”は、恐れられ、忌み嫌われることもあったが、凡そフレンが街で出会う人々の半分ほどの人たちは、他の人と変わらない接し方をしてくれたし、フレンの体が大きく、遅くなるにつれて、目の前で露骨に態度に出す者は殆どいなくなった。

「あ、あの」

フレンはバツハモンテで早めの夕食を食べる店を探していた。日暮れ後もしばらく歩いて、バツハモンテの先にある小さな宿場町ホウソンで宿をとる予定だった。

そんな折、いきなりフレンは後ろから声をかけられた。

「なんですか」

とりあえず振り向き、返事をする。

そこにはフレンより少し背の低い女性が、何やら訳ありげに立っていた。

ガラス玉のように、透き通った、大きく丸々とした眼をした女性だった。艶のある栗毛は肩を越す長さで、緩やかに波打っていた。

「あ、いえ。あの……どちらまで、行かれますか？」

しどろもどろになる女性を、フレンはまじまじと観察してしまっていた。

思えば、このような自分と年の近い、若い女性と言葉を交わすのは、かなり久しぶりであった。家にはガロしかおらず、街へ降りてきても話しかけてくれるのはガロと同年代の老人ばかりであったからだ。

このような妙齡芳紀な女性を目の前にして、少しフレンはたじろいだ。

「アルダナ、に行く途中です……何か用ですか？」

「そうですね……何をされにその……そこへ？」

どうもこの女性との問答は要領を得ない、とフレンは首を傾げた。

「帝国兵の登用試験を受けに、です。それで、何か用がおりますか」

とりあえず至極丁寧にかつ少し強めに、フレンは質問を繰り返した。

慣れない女性を前にしている事に加え、どうも言動が奇妙である。フレンは戸惑いながら、再びこの女性を仔細に眺めることにした。すると、あることに気づく。

「あ、あの！ 私も、受けるんです、その……テーコクへなんとかのトウヨなんとか試験！」

そう言いながら、女性が一步フレンのほうにぐいと近寄ってくる。

フレンはまた戸惑いながら、頭を整理した。

女性の顔をもう一度注視する。美しく良く手入れされた長い髪、整った目鼻立ち、そして曇りのないくりっとした大きな眼。フレンはその大きな二つの眼が、フレンと同じ、琥珀色の“獣の眼”であることに気づき、一気に動転した。

確かにフレンの眼を覗き込む人々からは幾度となく話に聞いていた眼であったが、鏡を見ることなどほとんどなかったフレンには一瞥しただけでは、判らなかつたのだ。

驚き、口を半開きにさせながらも黙っているフレンを尻目に、女性はまだ驚くようなことを続けて言った。

「私も一緒に連れてってください、そのアルダなんとかに！」

第二節 クララ

（九日前）

「それで」

フレンは後ろを歩く、女性に話しかける。

二人はバツハモンテで一緒に食事をし、ホウソンで別々に宿を取った後、今朝再び合流し、一路アルダナを目指して歩き出していた。

「なんででしょう？」

「クララはなんで登用試験を受けるの？ 女の子なのに」

クララと呼ばれた女性は、それはとても難しい質問だ、と言った風に眉を顰めた。

「それは……お、女の私だって、ちゃんと戦えますし」

「でも帝国兵は沢山いるし、傭兵だっている。もう何年も戦争が起こつてない所為で、今はどこの隊も飽和状態でしょ。わざわざ試験を受けてまで帝国兵になろうなんて、結構な物好きだと思っけど」

フレンが後ろを振り返る。相変わらずクララは俯いたまま難しい顔をしていた。

答えが返ってくることを諦めて、また前を向きなおす。

フレンは、クララの、アルダナまで一緒に連れて行け、という要求を一先ず飲むことにした。

断る理由も無かつたし、悪い人間にも見えない。それに、なんと言っても、旅の連れは多い方が良くと思ったからだ。

しかも昨日聞いたところによると、クララはフレンと同じ、十八

歳らしい。フレンにとって同じ年ごろの人とこれだけ長く喋るのは、アデルといた頃以来であったため、その点もフレンを嬉しくさせた。

「そういえばさ」

「なんでしよう」

「普通に喋ってよ。年も同じなんだし」

「そ、そんなこと……」

なぜかこんな要求でさえも、彼女には難しいことらしく、クララはまた一層顔を顰めた。

「普通に喋れないと、アルダナに連れていけないよ？」

「え……」

フレンの子供だましな脅しに、クララはその大きな目を一層見開いて一頻り驚いたあと、ではそうさせていただきます、と承諾した。

「フ、フレン……」

名前を呼ばれたので振り返る。

「なに？」

「フ、フレンはなんで、帝国兵になろうと……思ったの？」

詰まりながらも、なんとか普通の口調でクララが質問をしてきた。

「……会わなきゃいけない人がいるんだ……あとは、単純に自分の力を試してみたい、つてのもあるかな」

フレンの頭にガ口から受けた、あの地獄のような特訓の日々が浮

かぶ。

あれだけ辛い思いをしたのだから、その分もとは取らなきゃな、と心の中で呟く。

「そう、なんだ」

クララは、フレンの答えに納得したのか、はたまたしていないのか、そのまま黙り込んでしまった。

フレンは相変わらずそんな彼女の一步前を歩きながら、“獣の眼”のことをどうやってクララに聞いてやるうかと、考えをめぐらせていた。

もしかすると、自分の出自について何か判るかもしれない、そう思うと、フレンの胸は期待で踊り、そして同時に不安で重く沈んでいった。

いくらか、自分たちの足音だけを耳にしていた二人だったが、クララがあるとき急に呟いた。

「たいせつな人を護るため……かな」

「ん？」

フレンは脈絡のない彼女の呟きに思わず振り返った。

「私が入隊したのは、たいせつな人を護りたいから」

フレンは、クララに出会って初めて、自分のことを真っ直ぐに見つめる彼女の眼を見た。

「入隊した”って……今からその試験を受けに行くんだろ」

「そうでした！」

フレンはまた前を向く。

吹きつける冷たい風に、二人は外蓑の前をきつく締めなおす。
フレンは、あの日のガロの寂しげな背中を、思い出していた。

第三節 掬り

（三日前）

フレンとクララ。帝都アルダナで行われる帝国兵登用試験を目的とした二人の旅は、大きな問題もなく、順調に進んでいた。

途中、運よくアルダナ方面に行くキャラバンのうちの一つの馬車に乗せてもらったこともあって、フレンたちは登用試験まで三日を残して、アルダナの隣にあるカマラという街まで来ていた。

「フレン、お昼ご飯ここで食べよ！」

自分の背後で、目をきらきらさせながら美味しそうな匂いの発生源を指差しているクララの気配を感じ取ったが、フレンは無視して歩き続けた。

「んじゃあ……あそこは？ ほら、あそこ。“帝国一の名店 クラウディオ王の弟君アドリアーノ公御用達” って書いてあるよ！」

フレンとクララは今日と明日をここカマラで過ごし、三日後の朝早くにアルダナに向かう予定を立てていた。アルダナに入ってしまったと、一気に宿の値段が跳ね上がるからである。

「あ、フレン！ フレンったら！ ここは?! “ちよーうまい店 アドリアーノ様も絶賛” だって！」

と、フレンは眼の端で“違和感”を捉えた。僅かな“違和感”を素早く認識すること、もガ口に叩き込まれた習性の一つである。とにかく、拳動に不審な点がある人間は、すぐ目に付くように訓練さ

れていた。

フレンは教えられたとおり、不自然さを体に出さないようにして、その“違和感”の方をさり気なく見た。汚らしい兵装をした男二人が、五十代くらいの紳士風の男性に、何やら物騒な雰囲気絡んでいた。

「おいおいおい！ 痛てえじゃねえか！」

「なんか俺たちに文句でもあるのか、この野郎」

そう言いながら絡んでいる方の男二人は、腰に下げたグラディウスをわざとらしくかちやかちや言わせている。

相手の紳士風の男性の方は、いきなりのことに戸惑い、狼狽して何も喋れない。

「なんか文句でもあんのかって！ 言っただよこつちは！！」

一人が声をいきなり荒げ、威嚇するように一歩前に踏み出し紳士風の男性の胸倉を乱暴に掴んだ。

クララが騒ぎに気づき、フレンにそれを知らせようと指差した時には、フレンは既に早足で歩き始めていた。

内心、フレンの胸は緊張と不安でときどきと高鳴っていた。家を出てそうそうこんな厄介事に首をつっこむことになるとはな、と考えながら騒ぎの方へと寄って行く。

フレンがそんなこと思いながらも、意を決して声を掛けようとした時だった。

紳士風の男性の後ろから、音無く泥だらけのフードを被った男が忍び寄り、紳士風の男性が腰から下げている皮製の金貨袋をナイフを使い、鮮やかとも言える手さばきで切り取って自らの懐に忍び込ませた。

「おい！」

フレンが声を上げる。

兵装の男二人は、厳しい表情でフレンのことを睨んできたが、金貨袋を掏り取った旅人風の男はそのまま関わりが無いというような感じで、一瞥もくれずに早足で歩き去ろうとした。

「そこのお前もだ！ 今そこの男の人から何か盗んだろう」

そう言われ、旅人風の男はその短い足を二、三步進めたところで、逃げるのを止めて振り返った。しかし何かを喋る様子はなさそうである。

「なんだお前！」

兵装の男の内、さっきから声を荒げていた方がフレンのほうに向かってくる。フレンは内心緊張しながらも、周りの様子を観察した。もう一人の兵装の男は、多少動揺した様子を見せて、そしてその後フードの男と目配せをした。

この三人は仲間なのか、とフレンは一人でに納得する。しかし、幸運なことに、騒ぎを聞きつけた人だかりの奥のほうから衛兵がこちらに向かってくるのが判った。

「痛い目にあいたいらしいなあ。お？」

目の前の兵装男の肩の筋肉が緊張するのを、フレンは見逃さなかった。恐がらせる目的なのだろうか、顔を近づけやりと笑い、その黄ばんだ歯を惜しげもなく見せてくる。

息が臭い、と思うと同時に、素手で殴りかかってくる気なのか、とフレンは頭を働かせる。

「何の騒ぎだ」

兵装の男がまさにフレンに殴りかかろうと手を硬く握りしめた時、騒ぎの場に衛兵の声が響いた。

場の空気が一気に張り詰める。フレンは、フードから覗く旅人風の男の目線が忙しなく左右するに気づき、厭な雰囲気を感じた。

「フレン！」

置いて行かれていたクララが人ごみを掻き分けて、騒ぎの中に入ってきた。フードの男の横を通り過ぎ、フレンの傍に身を寄せる。

どうしたの、と背伸びをしてフレンの耳元に囁くクララの小声は、いきなり発せられたフードの男の大声にかき消された。

「衛兵さんいい所に来たなあ！ その傭兵さんたち二人と、そこにいる兄ちゃんと姉ちゃんがグルになって、その上品そうなおっちゃんの持ち金を掏ろうとしたのよ！」

フードの男に“傭兵”と呼ばれた兵装の男二人は互いに顔を見合わた後、どういうことなんだ、とでも言いたげな目付きでフードの男を見ている。

「嘘をつくな」

フレンは冷静に一言言い放ち、フードの男を見た。口元にいやらしい笑みが浮かんでいる。

騒ぎを聞きつけた衛兵の数は三人増え、合計で四人となっていた。

「嘘じゃねえぜ！ その姉ちゃんが掏るところをちゃんとこの眼で見たからなあ。衛兵さん、調べてみなよお！」

フードの男のその言葉に衛兵が、皆に静止をかけた上で、クララのほうにゆっくりと歩いてきた。

クララが不安そうな目でフレンのことを見上げる。どうやら現状は全く飲み込めていないらしいが、なにやら良くない状況だということとは判っているらしい。

フレンは、大丈夫だ、と小声でクララに言ったものの、自分の次の行動を決めあぐねていた。

脳裏に、数分前の映像が蘇る。あの時、クララはフレンの名前を呼びながら、フードの男のすぐ横を通ってこちらにやって来た。きつとその時にフードの男は掏り取った金貨袋をクララの鞆に“掏り入れた”んだ、とフレンはそこまで考え、悔しさで唇を噛んだ。

「調べるぞ、いいな」

衛兵はそう言い、クララの許可を待たずに、肩から提げている雑な造りの鞆の中身を漁りだした。

数十秒と待たずに、衛兵は金貨袋を見つけ出し、これはお前のか、とクララに問いただした。

「フレン……」

再び不安そうにクララはフレンを見上げた。どう答えてよいか、判断がつかないらしい。

「わ、私のものだ！」

クララが答える前に、衛兵の掲げた金貨袋をみて紳士風の男が声を上げる。

それを聞いた衛兵は、短く一つ溜息をつくと、力強くフレンとク

ララの腕を掴んだ。

「詰め所まで来てもらう。おいそこのお前ら二人もだ！ それに、旦那も来ていただいでよろしいかな？」

傭兵らしい二人は、なにか上手い計画があるのか、それともフードの男に裏切られたことに気づかないほどのとびつきり阿呆なのか、衛兵にひどい悪態をつきながらもフードの男に抗議することなく捕らえられていた。

そんな捕り物劇に乗じて、フードの男がフレンのほうに忍び寄ってきて、耳元で小声で囁いた。

「全く兄ちゃん、余計なことしてくれたもんだよなあ。金は頂けんは、仲間のアホ二人は捕まっちまうわ、大損害だぜ。ま、牢屋に入ることはなかるうが、次に会ったら命は無えと思いな」

そしてフードの男は振り返り、留めの言葉を衛兵に言った。

「謝礼なんて、もらえませんかねえ？ 協力のお礼として……」

「そんなものはない！ 行け！」

「へえ」

フードの男はその後、フレンに嫌味な一瞥を投げかけて去っていった。

フレンはやれやれ、と下を向いて頭を振った。フードの男には腹も立ったが、このまま衛兵を振り切ってあの男をとっちめたところでしょうがない、と諦めた。

後ろ手に縄をかけられながら、試験に間に合うのだろうか、と溜息をつく。ふと横を見ると、クララがまだ不安そうな表情で俯いているのもう一度、大丈夫だ、と低く落ち着いた声で勇気づけてや

った。

その後、衛兵に連れて行かれたフレンたちは、フードの男の裏切りに二日ばかりで気づいた超ど級の阿呆の傭兵二人の証言によって、釈放された。ちなみに傭兵二人は仔細に真実を語ったために、そのまま牢へと入れられたらしい。

朝早く釈放されたフレンとクララは、急いでアルダナを目指した。一応予定通りの時間であるが、その過程が予定外もいい所であったため、理由はないが自然とその足は速まった。

「ごめんな、俺が余計なことした所為で、捕まってしまつて」

フレンは横を歩くクララに謝った。

「別にいいよ！ お金も浮いたしね！ でもあそこのご飯、おいしくなかつたね」

クララはそう言いながらも、フレンにつこりと笑い返す。もうすぐクララとも別れることになるのか、短い旅だったな、とフレンはその笑顔をみてそう思い、少し寂しくなった。

「じゃあ、もし早めにアルダナについたら、何か美味しいものでも食べるか！ クララに店を選ばせてやるよ」

「ほんとに?!」

「もしアルダナに着いてから時間に余裕があつたら、の話な」

「あるある！ 急ぐ急ぐ！」

そう言つて鼻息荒くクララはフレンの前を歩く。

急がないと今日は降り出さず、とフレンは薄暗く陰鬱な空模様を、
底抜けに明るいクララの姿に重ねて思った。

第四節 獣の眼

（現在）

フレンは百九番の繰り出す一撃をひらりとかわし、そのまま素早く距離を取った。

雨足は強くなる様子はなかったが、確実に足場を悪くした。

「へっ！ 俺の剣撃どころか目潰しまで防ぐたあ、なかなかいい腕してるじゃねえか」

百九番がまたにやりと笑う。その笑みは、三日前にフレンの前に現れ、盗みを働こうとしたあのフードの男のものと全く同じであった。

「お前は盗賊か何かの類じゃないのか。なんでこんな所にいるんだ？」

「失礼な！ このエゴイツ様と言やあ、ここらの傭兵で知らねえ奴を探す方が難しいぜえ。何しろ伝説の戦闘技術“パントー八”を会得した、数少ない人間のうちの一人だからな！」

意外なところでパントー八の名を聞くもんだ、とフレンは両眉を寄せた。

「“パントー八”？」

一応聞いてみる。

「知らねえか？ その使い手は、一人で敵本陣に乗り込んで一人残

らず殺しちまうつちゅう、幻の戦闘技術さ！ お前みたいな若造は、こんな木の棒っ切れでも殺せちまうかもなあ」

エゴイツと名乗った男は、なにやらフレンの見たことの無い、そして一見したところ全く実用性があるように思えない構えを取った。

「……………それで……………なんでカマラであんな真似をしたんだ。傭兵じゃないのか」

「傭兵だ、って言ってるだろうがよ。俺たちや、三人でアルダナにこの試験を受けるために旅をしててな、それで路銀が尽きたから、そこらへんの金持ちから頂戴しようとした訳よ！」

エゴイツは、喋りながらフレンに隙が生まれる瞬間を伺っているようだった。

その為、フレンはわざと隙を見せるように、クララの方を見た。恐らくエゴイツには完全な余所見に見えたことだろう。

クララは相変わらず、試合待ちの列からこちらを不安そうに見ている。

と、案の定エゴイツが先ほどと同じようにフレンの脇腹目掛けて木剣を振った。

確かにその剣撃は、今までのフレンの対戦相手より数段早い、が、わざと隙を作ってエゴイツの攻撃を待ち構えていたフレンは軽々とそれを避け、一瞬の逡巡の後、エゴイツの顔面に右拳を力いっぱい叩き込んだ。

衝撃でエゴイツが派手に後方へ吹っ飛んだ。情けない悲鳴もオマケでついている。

やはり拳は軽々しく使うべきではないな、とフレンは痛む右手を摩りながら思う。

「お前はパントーハの使いでもなんでもないだろ。お前は、伝説で

も幻でも、強者ですらない。そうやって狡賢く立ち回って、ただ姑息な道を選んでここまで来ただけだ……それに、俺こそが本物のパントー……」

フレンはそう言いながら、仰向けに倒れているエゴイツのほうへゆっくりと歩み寄っていく。

そして、自分こそが本物のパントー八の使い手だと、口上を述べようとした。内心すこしどきどきしながら、二十六人も勝ち抜いたんだから少しは格好もつくだろう、と浮かれた考えを巡らせていたのだが、泥だらけのエゴイツの顔を覗き込んで、口上は終らずじまいになった。

「……なんだ。気絶しちゃったのか」

フレンは三十人勝ち抜いたところでようやく開放された。

試合待ちの人間は屋根のある渡り廊下に避難していたのだが、勝ち抜き続けているフレンだけは雨に打たれ続け、結局服の大部分を濡らしてしまった。

フレンが終るのを待たされていたクララは、フレンと入れ替わりで試合を始めていた。

ぎこちなく木剣を握るクララを見て、やっぱり駄目か、とフレンは頂垂れる。

「やー」

と、頑張っ て立ち向かってはいたが、結局一人にも勝てないまま、

クララの登用試験は終わった。

「まだ完全に駄目と決まったわけじゃないだろ」

がつくりと肩を落とし、完全に落ち込んでしまったクララを元氣付けるが、そのフレンですら、ほぼ見込みは無いだろう、と内心で思ってしまった。

その後結果発表までの時間を、フレンは渡り廊下の隅で、クララを立ち直らせることに費やしたが、ほぼ効果はなかった。

「三番合格！ 四番から二十五番まで不合格！ 二十六番、二十七番合格！」

その日の夕暮れ、斜陽に染まるフェランディエーレ城の下、審査をしていた騎士たちが座っていたテントの前で、仕切り役の兵士が合格者の番号を高らかに読み上げていた。

「二十八番不合格！ 二十九番合格！」

フレンとクララも、当然その場で結果発表に耳を傾けていた。次々に合格者が発表されてゆく。どうやらかなりの人数が落とされるらしい。隣を見ると、絶望的な顔をした三十三番のクララがいるが、流石にまだ希望があるとは励ませない。

「三十番、三十一番不合格！ 三十二番合格！ 三十三番から五十五番まで不合格！ 五十六番合格！ 五十七番不合格！」

フレンは自分の合格に一先ず胸を撫で下ろすと、何と声をかければ良いだろうか、とクララの顔を覗き込んだ。

「おめでとう、フレン」

「あ、ああ」

と、クララにそう先を越されて、少し戸惑う。考えてみれば、今までの人生のなかで、落ち込んでいる人間を励ましてやった経験などフレンにはなかった。その為、やはりなんと言ってやればいいのか、フレンには見当もつかなかった。

二人ともがしばらく黙りこくっているうちに、合格発表が終わりに近づいてきた。

「合格と言われたものは、今から第二兵舎へ移動するように！」

不合格とされたものは、肩を落とすしぞろぞろと帰路につき、合格とされたものはそんなアナウンスを聞いて互いに綻んだ顔で話し合いながら、第二兵舎に向かっていった。

「それから三十二番！ いるか？ そのお前！ お前、三十二番だな！」

と、いきなり仕切り役の兵士がフレンの方にはずかずかと指差しながらやって来た。

「お前はそのまま、ここに残れ。以上、通達終わり！」

そして目の前にきてそう叫ぶと、仕切り役は合格者たちを追いかけるように第二兵舎の方へと駆けていった。

「俺はここに残らないといけならしい……」

「そっか……フレン、凄い勝ち抜いてたもんね！ きつと何か特別なモノでもくれるんだよ！ おいしいものとかね」

クララがあくまで明るく取り繕うとしたらしいことは、フレンにもすぐに解った。二人の間に、別れ際特有の雰囲気流れる。

フレンは、そんな空気に背中を押され、今聞かなかつたら後悔するだろう事を口にした。

「あのさ、クララ」

「なに？」

「クララの眼って俺と同じ色だよな」

「……そうだね」

フレンの予想通り、眼のことを訊かれたクララの表情は全く芳しくない。

今までフレンが、クララにこの“獣の眼”のことを尋ねなかった理由はいくつもある。その一つ目がこれだ。今まで自分が厭な思いをしてきたこの眼のことを、まして同じ眼をした他人に尋ねるなど、心苦しかったのだ。加えて、これまで少し社会性を欠く生活を送ってきた所為で、フレンはそのような複雑な事情を鑑みて会話する術を持っていなかった。

しかしながら、やはり別れの場面になってみて、どうせもう会うこともないのだから、と思い切ってフレンは訊いてみたのだった。

「俺、父さんも母さんもいないんだ。生まれたときにはいたのかもしれないけど、もうほとんど覚えてない……物心がつく頃には、もう一人ぼっちだったんだ。でも俺を産んでくれた母さんか、あるいは父さんは、いや、もしかしたらその両親のどちらかかかもしれない

けど、絶対にこの“獣の眼”を持っていたはずなんだ。そう言った人間から、俺は生まれてきたはずなのに、今まで生きてきたなかで、俺は俺と同じ眼を持つ人間を一人しか知らない」

フレンは、確りとクララの両目を見据えた。

「私ね」

フレンが言うより前に、クララが悲しげに答えた。

「そうだ……だから、この眼のことについて、もし何か知っているなら教えて欲しい。もしかしたら、それが俺の両親へと繋がるヒントになるかもしれないんだ」

そうフレンが言い切ると、何故かクララはフレンと逆の方を向いてしまった。

「……それは、できない」
「できない？」

空かさずフレンはクララの後ろ姿に訊き直した。依然クララは背中をこちらに向けたままだ。

「うん、言えないんだ。ごめんね」

クララはそう言うと、フレンの方を振り返ることなく立ち上がった。

「また会おうね」

何も言えずにいるフレンに、クララはそう告げて、一人勝手に走り出した。

声をかけることも、追いかけることもできなかった。

呼び止めたところで別れることは変わりないし、それにクララの様子は、フレンがこれ以上しつこく訊いたところで答えてももらえないようなものでは全くなかったからだ。

フレンはその場に立ち尽くして、ぼーっとクララの言葉を反芻していた。

言えない、とはどういう意味だろう。

無理に訊こうという気にすんなれぬほど、フレンにはこの状況が理解し難かった。

何がクララをそうさせるのか、想像すらし得なかった。

そうしてフレンは、クララと別れた。

クララの“また会おう”という言葉が、何度も何度も、フレンの頭の中で空しく鳴り響いていた。

第五節 特別雑務隊

「君がフレンだね」

クララと別れ、その場で濡れた服を搾ったり扇いだりして乾かしながら待機していたフレンに、いきなり後ろから声が掛かった。振り向くと、男が一人立っている。

「はい、そうですか……？」

男の容姿をざっと確認する。

男は綺麗に手入れされた金髪に、上等に仕立てられた洒落た服を着こなして、目じりの下がった柔和な顔立ちをしている。見たところ年は三十台半ばくらいだろうか、フレンの顔をじっくりと観察しながら、にこりと笑みを浮かべている。

「俺はアルベルト。帝国軍特別雑務隊長だ。よろしく」

とりあえず、差し出された握手に応じるが、フレンにはあまり事情がよく飲み込めない。そんなフレンの考えを察してか、アルベルトは説明を続けた。

「今日から君は、特別雑務隊に入隊することになった。今日入軍した他の連中は、今頃他の部隊長達に取り合っているが、君は別だ。うちの隊で貰い受ける」

「その……“特別雑務隊”ってなんですか？」

「知らないよねえ。だって一週間前にできたばかりだしね」

「一週間前？」

「そう、一週間前。ついでに隊員は君で三人目だ」

「さ、さんにんめ？」

目が点になるとはこのことだろう。あまりの突拍子もない展開に、フレンはついていけず、つい裏返った声で繰り返してしまった。

通常、帝国軍の一部隊と言えば騎士兵士合わせて多くて二千人ほど、少なくともも五百人ほどの集団である。それが三人となると、その異常さは五歳の子供でも理解できる。

「ま、ゆっくりご飯でも食べながら話そうよ。もう一人の隊員も紹介するよ」

そう言っただけでアルベルトはフレンの返事も待たずに歩き出した。仕方なくついて行く。

「あ、それにうちの隊は堅苦しいのナシだから。俺は貴族でも騎士でもないしね。だから敬称もナシ」

手を振りながらにこやかに笑うアルベルト。
フレンは彼の後を歩きながら、やはり何かおかしい、と首を傾げた。

新人たちが集まっている第二兵舎の横を通りすぎ、第四兵舎と第五兵舎の間に、軍兵専用食堂があった。食堂の中はとても広く、五十を超える数の八人掛けのテーブルが等間隔に並べてあり、その周りを囲むように、壁際には出店のように料理を仕出しするカウンタ―が続いている。

「そうそう、先に言っておくけど、君は明日仕認式にでなきゃいけないからね。覚えといて。正午に第一兵舎前集合ね」

「仕認式？」

「うん。クラウディオ陛下から、帝国軍兵士として陛下に仕えることを認めてもらう式さ。一兵卒としては陛下を拝める最後のチャンスかもしれないし、大事なことだから行っておいで」

そりや行きますけど、とフレンは呟きながら、先導するアルベルトを真似して食堂入り口に重ねられて積み置かれている木製のお盆を一つ手に取った。

「それで、“特別雑務隊”って何をするんですか」

「そりや“雑務”隊って言うんだから、色々するよ。その予定」

アルベルトが一番長い列の最後尾に並ぶので、フレンもそれに続く。

「例えば？」

雑務隊というからには、雑用的なことをやらされるのだろうか。

城内の掃除、なんてことだったら嫌だなあ、と思いつつフレンは尋ねる。

「例えば……？ 君も難しいこと聞くなあ……あ、おばちゃん、俺はいつものね。後ろの坊やにも同じヤツ……あ、それとこの子の分は“玉ねぎ抜き”でお願いね！」

注文の順番がまわって来たアルベルトが、仕出しをしている女性に景気良く注文する。

「俺、たまねぎ嫌いっていいましたっけ？」

フレンは自分が“坊や”と呼ばれたことに少しムツとしながらも、先のアルベルトの注文が不思議すぎて尋ねてしまつた。

「この食堂に入る前に、外に干してあつた玉ねぎ見て、君少しだけ難しい顔したでしょ」

そんな顔した覚えはないぞ、とフレンはアルベルトを注視する。しかしながら確かに、食堂に入るとき、フレンはちらりと食堂の外に網に入られて吊るされていた玉ねぎを見ている。

「それだけで、俺が玉ねぎ嫌いだと？」

「うん、そうだよ」

アルベルトとフレンのお盆に、山盛りのホットサンドが乗った皿が置かれた。給仕の女性に礼を言い、アルベルトの後を追って歩く。

「えーと、ジエネは……あ、いた。おーい！」

と、アルベルトは誰かを見つけたのか、いきなり叫んで歩き出した。

フレンのお盆にのったホットサンドと同じものを食べている男の前でアルベルトは立ち止まった。フレンがそれに追いつくと、アルベルトはその男とフレンを互いに紹介し始めた。

「二人とも、紹介しよう。こっちがジエネ、で、こっちがフレンね」
「は、はじめまして」

一応会釈をするも、ジエネと紹介された男に完全に無視される。座つてはいるが、ジエネが小柄で滅法引き締まった体をしていることは、一目で見取れた。

彼の顔の造詣は、フレンが今まで見た中でもかなり特殊な部類に入った。

それは、かつて子供の頃にみたガウルテリオ候のような、整った綺麗な顔をしている。が、全くもってガウルテリオ候のような華はなく、その顔は一つも欠点が見当たらないかわりに、極めて特徴の無い、覚えづらいものであった。年齢の予想すらしづらい顔で、フレンは雰囲気から自分よりは少し年上だろうと適当に考えた。

「おいおい、もうちょっと愛想よくしろよ」
「食事中だ」

ジエネはフレンの方をちらりとも見ずに、ぼそつとそう呟いた。そんな彼に構う気が無いのか、アルベルトは依然にっこりと微笑んだまま、席に着いた。習ってフレンも座る。

「ジエネは変装の名人なんだ」
「大きな声で言うな」

アルベルトがフレンに得意げに言うのを、ジエネが叱った。

「誰かに化けるってこと？」
「そうさ。それも一分違わず化ける、完璧な変装だ。すごいぞー、何しろ肉親でさえ区別つかないからな」
「へえ」

そんな人間が世の中にいるのか、とフレンはまじまじとジエネを眺めた。確かにこの背の低さや、特徴の無い小顔は変装するに打っ

てつけかもしれない。

「声だって真似できるんだぞ」

アルベルトは喜々としてジエネの変装自慢を続けている。

それはすごい、とフレンが相槌を打つも、依然ジエネは言葉を発しなかった。

「ほら、フレンの声真似してやってくれよ」

ほらほら、と子供のようにはしゃぐ中年のアルベルトを完全に無視する部下のジエネ。

こんな状態でこの先大丈夫か、とフレンは二人の隣で静かに先の生活を憂いた。

「しかし、フレンが入隊してくれて良かった」

食堂特製のホットサンドを食べ終えたアルベルトが、お腹を摩りながら言った。

「こいつは何ができるんだ？」

ジエネが冷たい眼でフレンを見てくる。

「フレンはなあ、すごいんだぞ。もうむちゃくちゃ強い！ なっ！
登用試験で三十人抜きしたんだから」

ジエネは感心する風でもなく、へー、と口にした。
さらにアルベルトが続ける。

「いや、でも本当に良かった。助かったよ！ 何しろ俺たち全く戦えないもんなー」

「戦えない？」

思わず繰り返すフレン。

「うん、めっちゃ弱いよ、俺たち」

当然のように返すアルベルト。

戦えないとはどういう意味だろう、とフレンは今一度横に並んで座っているアルベルトとジエネをまじまじと見た。

帝国軍にいるということは、流石にある程度戦闘に関して腕に覚えのある人間であるはずだ。もしも入軍した時点で全く戦闘技術を持っていなかったとしても、その後の日々はすべからず訓練に充てられるものである。それが兵士たるものの務めのはずである。しかし。

「まあ俺とか、兵士じゃないしね。元軍師だもん。ジエネにいたっては軍人ですらないからね」

アルベルトは、さも可笑しいといった風に机を叩いた。酒でも飲んでるんじゃないか、とフレンは訝る。

「軍人じゃないなら、なんだったんだ？」

「ジエネは俺がスカウトしたんだ。元平民。だから今は一応帝国軍

人だけどね」

「スカウト？」

先ほどからフレンはアルベルトの言葉を復唱し続けている気がしたが、それも仕方ないと思った。なにしろこの男の話は突拍子も無さ過ぎる。

「ああ。変装の上手い男がいるってんで、ちょっと覗きに行ったらびっくりさ。変装どころの話じゃなかった。それですぐさま、うちの隊にこないかって誘った」

そんな市場で買い物するように、軍人をスカウトする権限をこの男に与えていいのだろうか、とフレンは眉を顰める。それにしても、誘う方も誘う方だが、受ける方も受ける方だ。

「ちなみに俺には何ができるのかと言いますと」アルベルトは一度尊大な咳払いをして、それから後を続けた。「人の心が読めるんだ」

もうフレンの心は疑心暗鬼で満たされっぱなしだった。

ジエネが変装の名人というのも嘘で、もしかすると帝国軍には特別雑務隊なんて存在しないかもしれない、とさえ思えた。

そんなフレンの想いを読み取ってか、アルベルトは得意げにデモンストレーションを始めた。

「信じてないねー。よし、じゃあ面白いものを見せてしんぜよう。

ここに……塩と胡椒がある」

アルベルトはテーブルの端に手を伸ばして、木彫りの塩容れと胡椒容れをそれぞれ右手と左手に持った。

「で？」

フレンが先を促す。一体何をしようというのだろうか。

「じゃあフレン。どちらでもいいから、心の中でどちらかを選んで……選んだ？」

フレンがその問いに頷くと、アルベルトはゆらゆらと塩容れと胡椒容れを上下左右に揺らし始めた。十秒ほどその意図不明な動きを続けた後、突然叫んだ。

「塩でしょー！」

「……そ、そうだけど……」

「よし、じゃあもう一度やろう。はい選んで」

フレンが、選び終わった、と目で合図すると、アルベルトは再び二つの容器を揺らし始める。

「また塩だねー！」

「な、なんで……？」

「言ってただろ。こいつは心が読めるんだ。聞いてなかったのか、お前」

ジェネが顔の表情をぴくりとも動かさず言った。

その後も続けて五回、アルベルトは悉く、まるで魔法のようにフレンの選択を言い当てた。アルベルトの説明によると、フレンの微細な表情や目の動き、それに裏をかこうとする心理など、諸々を総合して、心を読むらしい。つまりは魔法でも、手品でもなんでもないということだった。

なぜそんなことが可能なのか、という純粹なフレンの疑問にアル

ベルトは、人生経験だ、と言ってまたにこやかに笑った。

デザートを取ってくると席を立ち、またカウンターのほうへ歩いて行くアルベルトの背を見ながら、とんでもないところに入隊してしまったのかもしれない、とフレンは思うのだった。

第六節 クラウディオ・イラディエール

「明日は仕認式っていうのに出なきゃいけないのは判ったけど、その次の日からはどうするんだ？」

デザートを二皿も平らげ、食後のお茶を優雅に啜っているアルベルトに、フレンが問いかけた。ちなみにジエネは自分の分の食事を終えると、そそくさと席を立って行ってしまった。

フレンの問いに、アルベルトはこちらを向いてにやっとして答える。

「スカウト活動」

またおかしいことを、とフレンが頭を振っていると、まあまあと宥める様にアルベルトが続ける。

「だって三人じゃ部隊って呼べないでしょ」

「じゃあ何人だったらいいんだ？」

フレンも続けて聞いたです。

「五人かな」

「五人でも駄目だろ」

「駄目じゃないよ」

「どうやって戦うんだよ、五人で」

「戦わないもん。俺ら弱いし」

「俺は弱くない」

と、無用な問答をいくらか繰り返したところで、フレンの目は食

堂の入り口に釘付けになった。

入り口からずんずんとこちらに向かって歩いてくる人物がいる。

「話は聞かせてもらいました！」

その人物はフレンたちの前までくると、机を思い切り両手で叩き、
そう言い放った。

「一体どこから聞いてたんだよ、クララ」

フレンはとにかく驚いて、そう言った。

「どこからでもいいでしょ！ とにかく……話は解りました。特別
雑務隊、私も入れてください！」

登用試験に無事合格し、特別雑務隊なんていう訳の分からない部隊に入隊させられた翌日、フレンは仕認式なるものを受けるために、フェランディエーレ城の天守内の大ホールに居た。

ホールには高くにあるガラス窓から陽光が燦燦と降り注ぎ、大理石の主柱が眩しく輝いている。上を上げば天井は遙か遠く高く、芸術ともいえる均整の取れたカーブを描き、天井の中心点で全ての柱と壁が結ばれている。その荘厳な様は、まさに帝国の大きさを象徴するようであった。

そこには五回前までの登用試験合格者全員が例外無く集められていた。遠征中の者も、領土の端で物見に立っていた者も、風邪で倒

れていた者も、一人も欠けることなく全ての者が、だ。

それも当然である。今日という日は、全ての帝国軍人にとって一番尊い日と言っても過言ではないからだ。

百人を超す新入軍人達が、一分の狂いなく綺麗に整列し跪くその前で、ガラス窓から一筋の神々しいばかりの光を受けながら、重々しく両掌を合わせている人物がいる。

白く威厳ある顎ひげを蓄え、青く透き通った二つの瞳を、あのアデルのものと全く同じものを持ったその人物こそ、ランベルト帝国国王クラウディオ・イラディエル、その人である。

クラウディオ王の前には新入軍人のうちの一人が、恭しく跪いている。クラウディオ王が合わせている両掌を離し、前に跪いている新入軍人の両肩に確りと手を置いた。指には一帝国の王にしては質素な、銀色の指環を一輪嵌めているのが見える。

そして一瞬その状態で王が静止したかと思うと、不可思議なことにその両手から光が溢れ零れ出し、跪く新入軍人を優しく包み込んだ。その神秘的な光は段々と強くなり、ひと時新入軍人が見えなくなるほど光り輝いた後、また段々と弱くなり、最後には消え去った。フレンは初めて自分の目に映る、“魔法の力”に強く感銘を受けていた。

こんなにも神秘的で、自分の理解を超えるものがこの世に存在し得るのだと、ひどく心打たれた。

新入軍人は少し間を置き立ち上がり、深々と礼をした後、また列に戻った。

そのような事が、この大ホールにいる新入軍人全員分行われるのが、仕認式である。

全ての帝国軍人は、帝国国王にこの国に仕える軍人としてこのような儀式を受けている。

もう仕認式が始まって何時間が経ったのだろうか。順番的に最後の登用試験に受かったフレンは列の最後尾に近いところに居た。そしてその隣には最近アルベルトに“スカウト”されたジエネと、そ

して。

「すごいねえ」

「静かにしろ」

クララも居た。

アルベルトは、雑務隊に入隊させてくれと直訴してきたクララを、驚愕の素直さで受け入れた。

理由は、クララの耳が人並みはずれて良い事、らしい。どうもフレンは納得いかなかったが、食堂でのフレンとアルベルトの会話を、食堂の外で一語一句聞き漏らさずに聞いていたクララの聴力は雑務隊入隊に値するそうだ。が、フレンにはクララが本当に食堂の外で話を聞いていたのか、どうも信じ難かった。

そんな簡単に入隊を許しているのか、とフレンが問いただと、アルベルトは小声で、だって可愛いだろ、と耳打ちした。フレンには、どうもこつちの理由が本命らしいと思えた。

そんなこんなで、フレン、そしてジエネとクララ、三人の特別雑務隊員は何時間も跪いたまま、順番を待っていた。

どうやらこの儀式は、見た目以上に体力を消耗するらしく、クラウディオ王の額にはじつとりと汗が滲み、次第に息も上がってきている。そんな、この大帝国の国王が何の功を成した訳でもない新しい軍人一人ひとりのために、それだけ疲労を伴う儀式を何時間にも渡り懸命に執り行う姿は、取り分け新入軍人たちの心を動かした。式が始まって三時間後、ようやくフレンの番がまわってきた。

まず、前の人間が王の前に行ったあと、進行を取持つ助役の傍へ行き、儀式を受ける際の注意を小声で受ける。顔は上げないこと、王の顔を直接見ないこと、光が完全に消え去ったあとに立ち上がり

一礼し列に戻ることに、を教えられた。

前の人の儀式が終わり、フレンはなるべく厳かに見えるように、そろそろとクラウディオ王の前まで歩いて行き、両膝を床につけて跪き両手の指を胸の前で組み合わせた。

クラウディオ王は他の皆と同じように、何も言わぬまま掌を合わせ、そしてそれを離すとフレンの両肩に置いた。

不思議な、暖かい何かが体の中を駆け巡り、周りの景色全てが眩い光に包まれたかと思うと、今度はまた少しずつ光は薄くなり、やがて消えてなくなった。

フレンは言われたとおり、少し間を置いて立ち上がり、深く一礼して列に戻った。

その後三十分強をかけて全ての新人軍人たちの儀式を終えたクラウディオ王は、そのまま休むことなく、静かに、しかし力強く話を始めた。

「皆、ご苦労であった」

張り詰めたホールの空気の中、すつきりと通る低く威厳のある声が響いた。

「仕認式では毎回同じ話をするが、聞いてほしい……こら、イラウジオ、何度も聞いているからと言って退屈そうな顔をするな」

クラウディオ王が側近の助役の一人にそういうと、ホールの前方、王の近辺で笑いが起こった。

「皆に分け与えたのは、私の“魔法の力”である。皆の体には只今より、私自身、王のその一部が流れることとなる。心して、守り抜くよつに」

王の声は、然程大きくはなかったが、後方にいるフレンには確かに聞き取れた。張り上げるように喋るわけでもないのに、ホールの最後尾にも確りと届く、不思議な響きだった。

「しかしながら、諸君らには“死すべき時”がある……皆、その為に集まったのだと、私は思っている……それは家族を護る時だ。それは祖国を、郷土を、家を、未来を担う全ての子供達を、護る時である。その時こそ、諸君らの“死すべき時”だ」

フレンは生まれて初めて、その肌で“土気”というものを感じた。ホール内の雰囲気の高まりが分かる。

「私は、諸君らが帝国軍兵士であることを等しく誇りに思う……皆、私と共に、死んでくれ」

そう最後に言い放って、クラウディオ王は深く頭を垂れた。

新入軍人たちはどうして良いか判らず、ただ胸を打たれるのみであった。

そのうち前の方にいた近衛兵の一人が「クラウディオ王！」と叫んだ。それを機として、塞き止められていた歓声が怒濤の如くホール一杯に響き渡った。

それから歓呼の声はしばらくの間鳴り止まずにホールを占領し続けた。

そんな中、フレンはひっそりと、ガ口の昔話を思い出していたのだった。

第七節 怪盗口口・前編

フレンは絢爛な螺旋階段の真ん中あたりで、泥のついた鼻を搔いた。

細かい意匠の彫りが施された手すりを飛び越え降りた先は、とある大屋敷の玄関ホールである。

四方八方から、怒号がこちらへと物凄い速度で迫ってきているのが判る。

「こつちだ！」

「向こう側からも回りこめ！ 逃げられるぞ！」

仕認式から三日後の深夜、フレンは帝都アルダナの中にある、アイスコレッタ伯爵の大豪邸に居て、そして。

「いたぞ！」

「そいつだ！ ひっ捕らえるおお！」

捕まりかけていた。

（十数時間前）

「で」

フレンはアルベルトとクララと共に、高く昇った太陽の下、アル

ダナの西側にある帝都二番目の大通りを歩いていった。

「ご所望の“穴”はちゃんと用意したんだから、そろそろ考えを聞かせてくれてもいいと思うんだが」

路上で売っていた梨のタルトを頬張っているクララはとりあえず無視することにして、フレンはアルベルトに尋ねた。

「いいだろう。今回のスカウト計画を、諸君らに発表しよう」

アルベルトが大仰に言う“諸君ら”に、自分も含まれているとはクララは思っていないらしく、話を真剣に聞こうとする様子もないので、フレンはアルベルトに、先を話せと目で合図した。

「ターゲットは、名の無い“大怪盗”だ。今までほとんど姿を見られていないため、通り名や渾名すら付けられていない。今回はこいつをスカウトする……どうだ、凄いだろ？」

呆れて物が言えない、とはこういうことかとフレンは一人で納得した。

泥棒を入隊させる、なんていうふざけた考えを、どうしてこの中年は思いつけるのだろうか。

「そんな大怪盗どうやって捕まえるんだよ」

恐らく、そんなに凄い盗人なら、犯行の瞬間に出て行って捕まえようとしたって、するりと捕縛の手を掻い潜られ、そのまま逃がしてしまうことだろう。いや、そこまで行かなくても、それほどの大怪盗であれば、捕まえようとする気配を感じただけで、盗みに入るのを止めるだろう。

「それを考えるのが、俺の仕事じゃん」

だからその考えを訊いてるんじゃない、と内心でフレンは思ったが、口には出さないことにした。

「そしてそして！ その俺が計画した大捕縛劇の舞台となるのが…
…あそこだ！」

アルベルトは大通りのある所で立ち止まり、さも愉快だ、と言わんばかりにそこから見える坂の上に建つ大豪邸を指差した。

「なに？ あそこ」

タルトを食べ終えたクララが口を開く。

「アイスコレッタ伯爵の屋敷だ」

アルベルトの代わりにフレンがクララに教えてやる。なにしろフレンはあの屋敷の裏口から今しがた出て来た所だった。

「今夜、名も無き大怪盗は必ず、あの屋敷に忍び込んで盗みを働く」

と、アルベルトの弁に。

「なぜわかるんだ？」

当然の質問をフレンが口にする。

「綿密な下調べと、巧妙な罠によって奴は誘き出されるのさ」

アルベルトは、そう得意げに言うと、ついて来いとばかりに手招いて、坂の上の屋敷に向かって歩き出した。

ほんの少しばかりの坂を上ったその頂上にアイスコレッタ邸は建っていた。

荘厳な鉄の門をくぐると、手入れのされた左右対称の庭が広がっており、その奥にはまた左右対称で正方形に近い形をした二階建ての豪邸が待ち構えていた。

フレンたちが屋敷の前まで来た時、とある中年の男性がちょうど屋敷を出てくるころだった。

黒いマントで全身を多い、革の手袋を着け、大きな革の鞆を持っている。医者だ。

医者はすれ違いざま、アルベルトのことをちらっと意味ありげに見たが、特に挨拶もなく坂を下って行った。

「伯爵は体でも悪いのか？」

医者が見えなくなるのを確認してから、フレンはアルベルトに尋ねた。

「ま、そういうことだな」

アルベルトは依然愉快そうである。人が臥せているのに、不謹慎な男だとフレンは少し顔をしかめた。

「入らないの？」

クララが聞く。

「ああ。ほら、あんまり屋敷のほうをじろじろ見ない。そのまま向こうに向かって坂を下れ」

アルベルトはクララの問いにそう答えると、また大手を振って歩き始めた。

「例の泥棒に気づかれるとか？」

「そうだ」

それはそうだな、とフレンはアルベルトの答えに納得する。もしアルベルトの言うとおり、その怪盗が今夜盗みを働こうとしているなら、屋敷周辺での変化に敏感になっているはずだ。こちらが盗みを待ち受けているのを知られるのはまずい。

「さて」坂を下りきったところで、アルベルトが振り向いた。「クララは宿舎に帰ってよし。フレンには……もう一つ大事な役をやってもらおう」

「大事な役？」

えー、と不満げに口を尖らせるクララを尻目に、フレンがアルベルトに詰め寄る。

「そ、だーいじな役」

アルベルトのいつものものにつこりとした笑みに、フレンは微かに厭な予感を感じていた。

そんな訳で、今フレンはアイスコレッタ邸の立派な玄関ホールで、屋敷を守るアイスコレッタ伯爵の私兵に囲まれている。

真夜中を過ぎたくらいに、フレンはアルベルトから教えられた通りのルートを通って、屋敷の二階からそっと忍び込み、そしてわざと玄関ホールで衛兵に見つかったのだった。

「捕まえろお！」

フレンを取り囲む衛兵はざっと十二人。その内の一人がフレンの後ろから、おもむろに飛び掛ってきた。

しょうがない、と思いつつフレンは飛び掛ってきた衛兵の手首を捕まえ、そのまま前方にひょいと投げ飛ばした。投げ飛ばされた衛兵は、フレンの向かいに立っていた別の衛兵にそのまま激突した。アルベルトからの命令で、合図があるまでは抵抗することになっている。

「こんの、こそ泥野郎が！」

こんな大豪邸の衛兵にしては言葉が悪いな、と関係ないことを考えながら、フレンは次に向かってきた衛兵を投げ飛ばす。

そうやってフレンが衛兵をなるべく怪我させないように、優しく六人ほど放り投げたところで、屋敷の外からアルベルトの大声が聞こえた。合図だ。

フレンは両手を挙げ無抵抗の意思を示すと、恐る恐る飛び掛つてきた七人目の衛兵に捕まった。

やれやれと、フレンは深く深く溜息をつき、衛兵に小突かれなが

ら引っ張られていった。

第八節 怪盗口口・後編

縄で手を後ろに縛られ、小突かれながら声を上げたアルベルトのところまで、フレンは連行された。

「おおフレン。良くやった」

アルベルトが嬉しそうにフレンの方を向いて手を振っている。何が良くやっただ、と内心で悪態をつく。

「おい、もういいぞ。彼を離してやれ」

「しかし……」

「離してやれ、と言っておろう」

とフレンを連行している衛兵の一人に力強く解放を指示したのは、この屋敷の主人である、アイスコレッタ伯爵である。伯爵はシルクの寝巻きに内履きと行った出で立ちで、庭まで出てきていた。

「フレン、こっちに来て見てみるよ」

と、目尻を一層垂れ下がらせてアルベルトがフレンを手招いた。縄で縛られていた手首を摩りながら、フレンはアルベルトのほうへ歩いて行く。

その先には、大人二人分ほどの深さの落とし穴があった。フレンが今朝、アルベルトの指示で必死で掘った、落とし穴である。

「しっかし掘りに掘ったなあ」

アルベルトがその深さに感心する。

「大怪盗と聞けば、手を抜けないだろ」

と同じく穴を覗きこんだフレンが返す。

その目線の先には件の大怪盗が居た。

この大怪盗の正体は、フレンの予想を大きく外れるものだった。

「女？」

フレンが思わず驚きの声を上げる。

「レディだな」

アルベルトが同意する。

落とし穴には金髪を後ろで括った、若い女が居た。ポニーテールの女は上を見上げ、こちらを睨んでいる。

「君、名前は？」

「ロロ」

意外にもアルベルトの問いに素直に答えたが、依然女泥棒は鋭い目付きのままだ。

「なんでこんな所に落とし穴があるの」

ロロと名乗った女泥棒は、自分が捕まったことが、残念というより悔しいらしく、その理由をアルベルトに尋ねた。

「そりゃ、君が今日この屋敷に盗み働きに来ることを知ってたから」

「なんで？ 私は今日、ここに盗みに入ろうと決めたのよ」
「そりゃあ、そうだろう」

アルベルトは、隣で訳が分からないと言う風な顔をしているフレンド、そしてこの女泥棒に、喜々として解説し始めた。

「ロロ。君は、とある古い本を盗むためにこの屋敷に忍び入ったんだろう？」

アルベルトの質問に、ロロは小さく頷いた。

泥棒の割りに意外に素直だな、とフレンは思う。さらにアルベルトの解説は続く。

「そして君がこの屋敷に今夜盗みに入ろうと決めたのは、ある噂を聞いたからだね？ そう、アイスコレツタ卿が急病に臥せり、もう瀕死の状態だという噂だ」

アルベルトの解説に思うところがあつたのか、そこまで聞くとロロはがっくりと肩を落とした。が、フレンにはまだ飲み込めない。

「その噂はかなり確実なものだった。なにしろ、その日アイスコレツタ邸から出てきた医者がそう言うのだから。それを君は訊いたんだね？」

ロロはもう頷かないが、しかし否定もせず、俯いたままだった。

「卿が死にかけだったら、なんで今夜盗みを実行しなくちゃいけないんだ？」

フレンが堪らずアルベルトに質問する。

「そりやそうでしょ。だってもし死んじゃったら、その遺産は全て子供達に相続されるんだから」

「あ、そうか。もし遺産が相続されるとなったら、狙いの本が誰の手に渡るか、判らなくなるからか」

納得するフレン。

「そうだ。それに、著名な人間が死ぬと、その家は人の出入りが多くなる。そこに住む人の生活も不規則になり、盗みに入るには都合が滅法悪くなる」

「あ、じゃあ、あの医者……」

フレンの頭にある考えが浮かぶ。

「そ。あれはジエネの変装だ」

ここまで訊いてフレンも流石にアルベルトの策に感心しない訳にはいかなかった。

ジエネは医者に変装し、屋敷からわざとらしく出てきた後、街に下りて嘘の噂を流していたのだ。

さらにアルベルトのお披露目は続く。

「今夜、その怪盗が盗みに来ると、そこまで分かれば、あとはもう一押しってところだろう。俺は大怪盗に、落とし穴に嵌ってもらおうと考えた。しかし、肝心の穴を掘る場所が問題だった。こんな深い穴をいくつも掘っていても、屋敷の様子をずっと伺っている怪盗さんに確実にばれてしまう。穴が掘れるのはこの場所、外からは死角となつて見えないここ以外なかった」

アルベルトはそう言いながら、片足で地面をとんとんと叩いた。

「となると、その大怪盗にここを通らせなければならぬ。これがなかなか難題だった。もし警備の配置を変えたり強化したりして、特定のルートを通らせようとすれば、今まで姿さえまともに見られていないこの大怪盗のことだ、不自然さをたちどころに察知して、盗みを止めてしまうだろう。そこで俺は、不自然でなく、更にこの怪盗さんにとって都合さえ良い、ルートを限定するようなイベントを用意した。それが」

「偶然同じ時間帯に屋敷に忍び入った、別の泥棒の捕縛騒ぎってわけか」

フレンが後を継ぐ。

「その通り。口口。君は、自分とは別の泥棒が同じ時間に同じ屋敷に侵入した、この奇跡とも言える偶然に、少し違和感を覚えたかもしれない。しかし、それは計画を中止させるほどではなかったはずだ。泥棒騒ぎがまさか畏だと、思えるはずがない。君は不思議に感じながらも、ラッキーと思った……なにしろ、騒ぎの起こっている玄関ホールさえ除けば、屋敷内の警備は完全にお留守になったのだから……そしてこの屋敷には一階と二階を繋ぐ階段が玄関ホールにしかない……つまり、よほど奇抜なルートを選ばない限り、俺の予想通り、本の保管されている一階の部屋で泥棒騒ぎを聞きつけた君は、二階からは脱出でしない。そのまま一階のこの窓から脱出した。至極簡単な結論だ。見張りの居ない、もっとも見つかりにくく、もっとも容易い脱出口、それがこの窓なんだから」

アルベルトはそう言いながら、落とし穴のちょうど横に位置する窓を指差した。確かにアルベルトが指摘する通り、窓は開け放たれている。

「ふん……もう解ったわ、説明は十分。それで、私をどうするの？」

ロロが再び上を見上げた。アルベルトはその質問に、また笑みを浮かべた。

「君は数々の盗みを働いたね。帝都アルダナに限らず、帝国全土に渡って、美術品や貴金属、宝石、骨董品、ありとあらゆる物を盗んだようだ。ここに罪状がある」

そう言ってアルベルトは懐から、何重にも巻かれた、太い羊皮紙の巻物を取り出した。

「しかし、君の態度によっては、この罪状……なかったことにしてやってもいい」

「態度？」

ロロが聞き返す。

「ああ、そうだ。もし君が……帝国軍特別雑務隊に、入隊するといふのなら……この罪、全て取り消す」

この変な中年にそんな権限を与えてよいのか、とフレンは再び訝るが、問題はそこではない。

「でも、罪を取り消すとか言う前に、この穴から出してやって、こいつが逃げない保障があるか？」

フレンが当然の疑問を口にする。今まで姿も見られていない“怪盗”なのだ。今、この穴からさえ、逃げ果せれば、二度と捕まらな

いことだつて十分あり得る。

「そうだな。鞭だけ、というのは俺の主義に反する。飴も与えて進ぜよう」

アルベルトはそう言いながら頷き、穴の中に手を伸ばし、本を渡せと口口に言った。

渋々ながら口口はアルベルトに本を差し出す。差し出された本は分厚い革の表紙に、なにやらフレンの読めない文字で表題が金色で書かれていた。

「なぜ君はそんなにも、この本を欲しがるのか……こんな、誰にも読めないような古代の文字で書かれた本をね」

アルベルトはフレンたちに見えるようにはらばらと本のページを捲った。彼の言うとおり、フレンがどれだけ注視しても、その本に書いている一文字も読むことはできなかつた。

「……全能の指環……を、探しているんだね、君は」

アルベルトが発したその言葉に、口口は眉をびくりと動かし、また上を向き直つ直ぐとアルベルトを見据えた。答えはしないが、肯定の意味だろう。

全能の指環たるものが何のことなのか、フレンには判らなかつたが、とりあえず今は一応口を噤んでおくことにした。

「そこでだ。帝都の研究者たちに、この本や、君が今まで盗み集めた古代語で書かれた本を翻訳させよう。まさか、君も読めるわけはないんだらう?」

アルベルトの問いに、ロロはこくりと頷く。

「それで、入るかな？ 特別雑務隊」

アルベルトがまたにやりと笑う。

ロロは、しばらく間を置いて悩んだ末、再び上を見上げて言った。

「いいわ。その“特別雑用隊”、入ってあげる。何させられるのか知らないけどね」

「雑務隊ね、ざつむたい」

そうして、特別雑務隊に五人目が加わった。

フレンはあまりの突飛な体験に、少し心踊り、そのあと少し眠くなって、目を瞬いた。そして冷静になって、思う。

女泥棒なんて入隊させて、どうするつもりだ？

第九節 朝ごはん

怪盗口口を見事捕まえ、挙げ句の果てに、彼女を特別雑務隊に入隊させてしまった夜から、五日後の朝早くに、フレンは抑えきれない思いがむくむくと胸の中で頭を擡げ始めているのに気づいた。

フェランディエール城のすぐ横にある、軍兵宿舎の一室でフレンはベッドの上でいくらか悩んで、そして意を決して起き上がった。アデルに会いに行こう、着替えながら、決心が鈍らないように小さく呟く。

いつもと同じ、ぴったりとした革のベストといくつかのベルトを着けて、小さな部屋をでる。

隣にあるジエネの部屋の前と、軒のとにかくうるさい城の衛兵の部屋の前を通って宿舎を出た。

朝靄が体に纏わり付く。

心変わりのないうちにとずんずんと早足で城門へと向かう。堀を渡す短い橋を通り、門をくぐり、そのまま手入れされた芝の上に敷かれた石畳を真っ直ぐ行くと、王宮の入り口となる広い階段があるところまで辿りついた。

「何用だ」

金色で縁取られた低い階段をいくつか登ったところで、フレンは門兵の静止を受けた。鉄のプレートで出来た鎧の胸には王家の紋章に似た紋章が彫られている。近衛兵の証だ。

「……宮の中に居られる王族のアデル卿に用がある。取次ぎ願えないか」

一応、道中考えてきた文句をフレンは一人の門兵に言った。しか

し間を置かず、門兵に首を振られる。やっぱり駄目か、とフレンは溜息を一つ残してまた階段を降りた。

帝都の王宮にアデルがいるという確証すら、フレンにはなかった。しかし、それでももし取り次いでもらえたら、最低でも“王宮には居ない”という情報が手に入ったのだが、今のフレンの身分では当然それすら許されることではなかった。

「どうしたもんかな」

今しがた来た道を戻りながら一人で呟く。いつかアデルが言った路、剣を習って騎士になって、アルダナへ行って王宮にはいる、という路をまさか自分が辿ることになるとは、とフレンは少し可笑しい気分になった。

「なにしてるの？」

と、急に後ろから降りかかる声に身構えて振り返る。その急さときたら、咄嗟のことにナイフに手を掛けるほどであった。

「クララ？」

振り返ると、いつも通りの屈託無い笑顔を浮かべ、予想よりも随分近く立っているクララが目に入る。ナイフまで伸ばした手を遊ばせる。

「おはよー」

「お前こそ、こんな朝っぱらから何してるんだ」

「朝ごはんを食べに行く途中に決まってるじゃない」

食堂と方向が違うじゃないか、と突っ込みかけるが止めておく。

ここ数日でフレンがクララについて学んだことの一つだ。突っ込んだところで、期待した返事は返ってこないのである。

「じゃあ一緒に食うか」

フレンがそう言うと、クララは嬉しそうに返事をして横を歩き始めた。

しばらく沈黙が続いた。石畳をフレンのブーツが小気味良く叩く音だけが響く。

そんな後、口を開いたのはやはりクララだった。フレンは沈黙を破るのが苦手であった。

「ねえ」

「なんだ」

「フレン、この前私にこの“眼”のことを訊いてきたよね」

クララの言葉にフレンはどきりとした。

もうそれはいいんだ、という想いと、その続きを聞いてみたいという想いが交錯する。

「ああ」

「この眼のことについて、私、まだフレンには何も言えない」

クララの口調は、フレンにも解るくらい申し訳なさの滲みでたものだった。

「いいんだ。無理に訊くようなことでもない」

「でも」両親のことでしょ？」

「“名前も知らない”」両親のことだ……変に拘ってもしかたない」「ごめんね」

いって言うてるだろ、と軽くクララを小突く。
気にしてない様が、少しでも伝わればと期待する。

「でも、フレンには解ってほしい……と思う……私のこと……本当のこと」

「話してくれば、解ると思うけどな」

「……話せない」

「そうか」

不思議と憤ることは無かった。仕方ないのだ。恐らく、フレンにもクララにもやり様がないのだ。

事情は知れないがそういうことなんだろう、とフレンは一人でそう決め込んで納得することにした。

「ごめんね」

「謝るなって」

その後は食堂につくまでずっと沈黙が続いた。

フレンは、クララが何か言いたげにしているのを密かに感じ、続きをなんとなく期待していたが、クララが再び口を開くことは無かった。

しかし、それでもフレンは嫌な感じを受けなかった。寧ろ心地よい沈黙だとさえ感じていた。

食堂につくと、やっとクララに笑顔が戻った。早朝であるせいか、

がらんとしたカウンターでクララが矢継ぎ早に注文する。

この華奢な体のどこにこれだけの食べ物が入るのか、フレンは不思議でまじまじどクララの後ろ姿を眺めた。自分はいつも通りホットサンドを頼む。もちろんたまねぎは抜きだ。

「あ、ロロがいるー」

クララが食堂の一角を指差し、走ってゆく。言っとおり、ロロが席についている。

「おはよう」

クララに続いてフレンも、ロロの近くに着席した。可笑しいことに、ロロも例のホットサンドを頬張っているところであった。

「おはよう」

ロロはあまり表情豊かな方ではないにしろ、ジエネよりは愛想があるようだ。

「早起きだねえ」

クララが感心した母親といった口調で、ロロを褒める。

「徹夜明けというだけよ」

「寝てないのか？」

ロロの答えに、思わずフレンが質問してしまう。

「ええ。昨日は大仕事だったから」

「仕事？」

「カマラの富豪の屋敷に忍び込んだの」

ロロは悪びれる様子もなく、淡々と話す。

「ま、まずいんじゃないのか？ 一応ロロだってもう雑務隊の一員なんだし……」

ここにいる人間で一番“まとも”という自信があるフレンが、とりあえず問いただす。

「なぜ？」

「罪状だって免除してもらえたのは、今までの分だろ？」

「アルベルトは“構わない”って言ってたわ」

まったく何を考えているのだろうか、とフレンはアルベルトを思いながら眉間に指を当てた。

「それに、私はもう“全能の指環”に関する事以外の盗みはしてないわ」

「ぜんこのうのゆびわ？」

クララが話に入ってくる。

「そうよ。それを嵌めたものは、“奇跡の力”を手に入れるって言われてる指環のことよ。まあ……私も半信半疑だけどね。昨日またはその指環について古文書を盗みに行っただってわけ。まあ、ガセネタだったわけだけど」

「じゃあ金目の物はなにも盗んでないのか？」

「このところはね。今、お金なら余るほどあるもの」

「余るほど?」

フレンとクララが同時に目を丸くする。泥棒がお金を余るほど持っている、なんてことがありえるだろうか。盗み過ぎか、若しくは元から金持ちなのか、とフレンは考えたが口口の説明によるとそのどちらでもないらしい。

「ええ。盗みを始めた頃のお金で小さなお店を始めたの。酒場をね。それが結構儲かっちゃって……今じゃ帝国中にお店があるわ。意外と商才逞しいのよね、私」

そんなことつてあるのか、と予想を裏切られたフレンは驚く。

「じゃあなんでその”ぜんんとかの指環”を探してるの?」

「それは……大した理由じゃないわ……とにかく欲しいの。欲しいものは手に入れる、当たり前でしょ?」

当たり前なのか、と首を傾げるフレンを尻目に女達の会話は続いていく。

「口口は何歳?」

「二十五よ。あなたは? 十五歳くらいかしら?」

「十八歳です!」

「そう、ごめんね。でも、子供に見えるわ」

「お、大人です!」

クララが憤慨して、何とか言っちゃって、とフレンの方を振り返るが、あえて口は挟まないことにした。

「そう」

ロロはそう言って、少しだけ笑った。それは、フレンが初めて見るロロの笑顔であった。

「私行くわ。寝ないとお肌に悪いもの」

ホットサンドを食べ終えたロロはそう言いながらすくっと立ち上がり、後ろで括られた金髪を翻した。

「あ、じゃあ私も！ ロロも今は宿舎に住んでるんだよね」

「ええ。アルベルトの命令でね」

「じゃあ一緒に戻る。私もお昼寝しよっかなー」

「あなた、さつき起きたばかりでしょ？」

と、そんなことを喋りながらクララとロロは食堂を去っていく。俺も帰ってトレーニングでもするか、と置き去りにされたフレンは本日二度目の深い溜息をついて席を立った。

しかし女という生き物は理解しがたいものだ、とフレンはそんなことをぼんやり考えながら宿舎への帰路についた。

第十節 ダルラン

アデルに会いにいった次の日の、また朝早く。

「おい、俺はそんなに体力のあるほうじゃないんだ。もっと遅く走れ」

フレンはジエネと一緒に、軍兵宿舎の廊下を寝起きの顔を擦りながら走っていた。

「ん」

確かにそれほど急ぐことではないな、とジエネの注文に応じてフレンは足を少し緩めた。

事の発端は約十分前、若い兵士がフレンの部屋を蹴破る勢いで入ってきて、アルベルトからの伝達を叫んだことにはじまる。「特別雑務隊は至急第一兵舎前へ集合せよ！」とのことだった。

フレンは手早く用意をし、昨日食べかけて枕元に置いたパンを頬張ると、部屋を飛び出しついでにジエネの部屋の扉をノックしてやった。ちょうどジエネも伝達を聞いて用意を完了したところらしく、フレンの後に続くように廊下を走り出した。

「そろそろ初めての任務についてもいいころだよな」

入隊してから凡そ十日ほどが過ぎた。フレンはようやく初任務かと、少し胸を躍らせる。

「俺が知るか」

後ろを走るジェネが冷たく言い放った。

第一兵舎前には既に、アルベルト、クララ、ロロ、と他全員が揃っていた。

「遅いぞ、諸君」

アルベルトはいつも通り、緩んだ表情をしている。

「それで？」

フレンは遅れた弁明もよそに、アルベルトを急かした。

「初任務だ。只今より帝国最西の街、スピサレッタに向かう。任務内容については、道中説明する。旅支度についてはこちらで既に用意してある。皆馬には乗れるな？」

アルベルトが仰々しく、胸を張りながら言った。フレンには、どうもふざけているようにしか見えなかったが、これが部隊長というもののあるべき姿なのかも、とも思えた。

「乗れないです」

クララが悪びれる様子もなく、真っ先に手を上げた。

「俺もだ」

ジエネもそれに続く。フレンはこの二人に続くのかと肩を落としたが、仕方なく手を上げた。

「三人も乗れないのか？ うそだろ？」

アルベルトが目を見開いて三人をまじまじと見た。

「だって乗ったことないんだもん」

「同じく」

「……同じく」

「わかった！ もういい。教えながら行く。クララとジエネは俺が教える。ロロ、フレンを頼む」

アルベルトにフレンの乗馬教官を任されたロロは、仕方ないわね、と言う風に肩を竦めた。

兵舎の隣には、鞍をつけた馬が五頭用意されていた。それぞれにテントやら食料やらが載せられている。

「一人で乗れる？」

鐙に足を掛けたフレンに、ロロが尋ねる。

返事をするより見せた方が早いと、フレンは勢いよく地面を蹴って鞍に跨った。

「常歩で少し進んでみて」

ロロが聞き慣れない言葉を口にする。

「なみあし？」

「ゆっくりって意味よ。ほら手綱を引いて」

言われるとおりに手綱を後ろに引くも、フレンの乗った馬はうんともすんとも動かない。

アルベルト組は教官の教え方が上手いのか、そうこうしているうちに、ゆっくりではあるが先を行っている。

「まったく駄目ね」

ロクの溜息に、そりゃ初めてだから、と小さくフレンは言い訳した。ロクは自分の乗る馬の手綱を持ったまま、ひょいとフレンと同じ馬の、フレンのすぐ真後ろの所に跨った。さすがは怪盗、とフレンはその身軽さに感心する。

「ほら、こうやって引いて」

ロクがフレンの後ろから手を回し、手綱を握りゆっくり引いた。ぱかぱかと、ゆっくり歩くように馬が動き出した。

「へえ」

そんな声を出しながら、今の自分は第三者の目から見とどれくらい情け無いものなのだろうか、と考えてフレンは肩を落とした。

ロクは器用にも二人で乗っている馬を操りながら、自分が乗るはずだった馬の手綱も引いてついでにこさせている。

「少しはこつを掴めたかしら」

ちょうどフレンの耳元でロクが囁く。そういえば“芳しい”とい

う言葉をいつか本で読んだことがあるな、とフレンは頭の隅で考える。

「も、もう大丈夫だ」

「そうかしら。ほら、アルベルトたちに追いつくわよ」

ロロはそう言うと、両踵で馬の腹を軽く蹴った。すると馬が一気に加速し、フレンは危うく振り落とされそうになる。が、真後ろにいるロロに支えてもらい事なきを得た。

「あなた、本当に強いのか？」

からかう様に言うロロに、フレンは答えられずただ耳を赤くするのみだった。

アルベルト組にあつという間に追いついた後、ロロは、もう大丈夫でしょ、とフレンとの相乗りを止めて自分の馬に跨った。

確かにフレンは大分と勝手が解ったようで、なんとなく手綱を引けば思い通りの方向へ馬が向いてくれるようになっていた。

横を見ると、なんとか進んではいるものの、クララとジエネはかなり苦戦してるようだった。

「ほら手綱を緩めない！ 脇を締める！」

アルベルトが馬を上手く操りながら、右へ左へと二人を指導している。ロロは自分の役目は終わったばかりに、そんなアルベルト組には関せず一人勝手に前の方を行っている。

そうして、街を通らず城から直接街道に出て、城壁をぐるっと回り西側へと来た。

「クララ！ また足がサボってる！」

「はいー……」

フレンの目には、やはりアルベルトは愉しんでいるように見える。つくづく変な奴だ、とフレンは横目でみる景色にそんなことを思いながら、手綱を引く。

少し速く駆けてみるか。

と、前を行くロロを目標に、フレンは少し馬の足を速めてみることにした。さっきロロがやったように、踵で馬の腹を軽く叩いてみる。

思ったより強い衝撃がフレンの尻に伝わる。今度は心の準備があったからか、なんとか体勢を保つ。

風が頬を切って流れていく。

草の青い匂いが鼻をくすぐる。

馬に乗るってこんなに気持ちのいいことだったのか、とフレンは歡心して目を細めた。

手綱により力を入れると、面白いくらいに馬が加速してゆく。あつという間にロロを追い抜き、ひたすら街道を駆け抜けていく。馬の脚が接地する時間がどんどん短く縮んでゆく。まして騎上のフレンは、まるで空を飛んでいるような感覚を覚えた。

どんどん小さくなっていく仲間たちを振り返り見ながら、フレンはいつか聞いたヤーゴの言葉を思い出していた。

馬と対等に。大地を共に駆ける友として。

なんとなくではあるが、あのときのヤーゴ言葉の意味を理解することができた気がして、フレンは嬉しくなると同時に懐かしくなつて、それから少し寂しくなつた。

「随分上手になつたじゃない」

後方の仲間たちと離れすぎたかな、と速度を緩めたフレンに、追いついてきたロロが言った。

「先生が良かったのかな」

振り向いてそう茶化すフレンに口口は、そうかもね、と言ってほんの少しだけ笑った。

アルダナを出て、六日が経った。六日と言えど、整備された街道をただひたすら西に向かい、日が落ちると野宿をするという気楽な旅であった。道中いくつかの街を通り、食料や飲み水などを補給したので、幸いにもクララが空腹で文句を垂れることは一度も無かった。

六日間の間フレン一行は、夜な夜な焚き木を囲んで口口の過去の怪盗話を胸躍らせて聞いたり、決まって真夜中に行われるアルベルトの屁攻撃に猛抗議したり、クララの天然ぶりを笑いの種にしたりと、とりあえず暇を潰すことにかけては苦労知らずで、フレンはこういう大人数での旅も悪くないと感じていた。

そんな六日目の夕暮れ時、フレンたちが行く街道は山岳地帯にぶち当たった。予定ではこの山岳地帯に沿って街道を二日北上するとスピサレッタに到着する。

アルダナを旅立って二日目の夜、アルベルトは任務の概要を説明した。それは至極単純なものであった。

スピサレッタを治め、そこに城を持つ領主ワトリング伯爵を暗殺しようとする計画の噂を、帝国軍部が察知した。スピサレッタは帝国の最西にある街で、西に位置する帝国と肩を並べるほどの大国、バウムガルデン王国との国境沿いにある。それゆえ帝国の対王国戦略上、非常に重要な地点であるため、この辺りの状態を不安定化させ王国に付け入る隙を与えかねないこの暗殺騒ぎを、何としても阻

止せよというのが特別雑務隊に下された命令だった。

「よし、今日はここらでテントを張るぞ」

アルベルトが日の落ちないうちに、と皆に指示する。

流石に六日目ともなれば慣れたもので、お互いなにを話すでもなくきちんと役割分担しテントを立て、夕飯の用意をする。

そんななかクララが薄暗くなってきた荒野の先に、何かを見つけた。

「あれって人じゃない？」

言われてフレンもその方向を凝視する。確かに人のようだが、その場に倒れて動かない。慌てて馬に跨り、駈歩で件の人物の方へと急ぐ。

「人が倒れてる！ 少年だ！」

倒れている人間を確認したフレンは立てかけのテントに向かって叫んだ。

馬を飛び降り、獣の毛皮で造った衣を纏っている少年を抱きかかえる。

「ダ……」

気を失いそうになりながらも、フレンの腕の中で少年は必死に何か言葉を発しようとしている。

「なんだ、おい！ どうしたんだ！」

「ダ……ダルラン……」

瞼を閉じたまま、少年はぼそりとそれだけ呟いてとうとう失神してしまった。

「ダルラン……？」

まったく聞き覚えのない言葉に首を傾げながら、フレンは皆の方を見た。クララがこちらへ走ってきている。

と、フレンの視界に異様な物体が驚くほどの速さで飛び込んできた。

“それ”は漆黒の毛皮で覆われ、人の三倍ほどの身丈を持ち、山を滑るようにして駆け下りてきていた。

熊だ、とフレンは咄嗟に考えるも、どう見積もっても話で聞いたことのあるものの二倍はある。異様な大きさだ。

熊の軌道上には、間違いなくクララがいる。その二つの血走ったまなこは、確実にクララを捕らえている。フレンは少年を地面に素早く寝かせ、一杯地面を蹴った。

熊はその鋭い爪の並んだ、クララの顔ほどある手を、クララ目掛けて振った。

間に合わない。

フレンの真つ白な頭のなかに、それだけが浮かんだ。

「クララー!!」

フレンは無意識のうちに右手を熊に向けて伸ばしていた。

いつか、子供のころに見たことのある景色が、フレンの目の前に蘇っていた。

忘れていた、忘れようとしていた、あの光景が。

巨大な黒熊は、その狂気の宿った爪がクララの顔に食い込まんとする寸前で、得体の知れない力に押され、信じられないほどの速度で吹っ飛ばされていた。

宙を舞い、呆気に取り残れているアルベルトたちの横あたりに着地すると、そのままの勢いでかなりの距離を転がっていった。

アルベルトを始め皆の視線が自分に集まるのを、フレンは感じた。

俺がやったのか？

と無意識に右手を見る。特段異常なところは見受けられない。

もう一度テントのほうを見る。

ちょうどアルベルトたちとフレンの間ほどに立っていたクララだけが、決意の宿ったような眼でこちらを見ていた。

第十一節 魔法

例の巨大な黒熊が完全に死んでいるのを確認した上で、フレンたちはその事件が起こった少し先でテントを張りなおした。

テントの真ん中には、先ほど助けた少年を寝かせた。

少年の手足には木枝でついたのだらう擦り傷が彼処にあったが、幸い大きな外傷は見られなかった。

「少し熱があるな。まあ、安静にしてやったら起きるだろうし、目覚めたらなんか食わせれば元気になるだろ」

とはアルベルトの談。

実際隊の中には医療のことを理解しているものが居なかったため、そのようにしようと皆の意見はすぐ一致した。

「この子、ジリ族ね」

ロロが少年を見下げながら言った。そうだな、とアルベルトも同意する。

「ジリ族ってあれか、この山岳一帯に暮らしてる民族のことか」

と珍しくジエネが口を開く。

「そうだ。一応帝国と同盟関係にある部族だ。この山脈を越して西側、バウムガルデン王国の南一帯は凶暴さと強靱な弓で有名なあのベンギーギ族が支配する草原地帯だ。ジリ族がベンギーギ族とずっと戦ってくれてるお陰で、ベンギーギ族が帝国に攻め込んでくるのを防いでくれてるんだ。ま、別に帝国に頼まれてやってるわけじゃ

ないんだろっが……」

アルベルトの解説に、そういえばそんな話もガロじいから聞いたなど、フレンはふと思った。

「でもなんでジリ族の少年があんなところに倒れてたのかしら？
ジリ族は大人だって山を滅多なことでは降りてこないはずよ」

と、ロロが首を傾げる。

「多分あのでっかい熊に襲われて、命からがら山を駆け下りてきたんだろっ。可哀想に」

珍しくアルベルトが同情の色を顔に浮かべた。

「それにしてもなんだったんだ？ さっきの……」

ジエネがそう呟く。もう視線はフレンに向いていないが、フレンは皆の意識がこちらに向いていることは気づいていた。

しかし自分から申告できるようなことは、なにもない。
フレンはそんな居心地の悪さに駆られてテントを出た。
外には焚き木があつて、傍でクララが水を沸かしていた。

「フレン」

呼びとめられるように、クララに名前を呼ばれる。傍まで行くと、散歩をしよう、と誘われた。

「なんだ？」

「話があるの……いいかな？」

「ああ」

そう言い暗闇へと向かって歩き出す。後ろで轟々と燃える火の光で、前にとても長い影ができている。

「この前の話……この琥珀色の眼の話なんだけど」

「うん」

クララはそこで一度言葉を切った。フレンは期待した。今それを口にするということは、やはりなにか伝えることがあるということだろう。

「……私たち、魔法使いなの」

が、あまりの突拍子のないクララの言葉の続きに、開いた口が塞がらない。

「まほつつかい？」

と尋ねるでもなく、呟いてしまう。そんな言葉、ガロに読み聞かせてもらった童話の中ぐらいでしか、聞いたことがなかった。いや、皆そうだろう。子供のころ、親から魔法使いの“お話”を聞かされて子供心を踊らせ、そうして大人になって王の魔法を目にして感動するのだ。帝国中の大半の人間がこの流れを経験しているはずだ。「そう、魔法使い。さっき、フレンがわたしのことを助けてくれたのも魔法なんだ。フレンはまだ上手くコントロールできてないみたいだけどね」

クララは説明を続けるが、話を認識しながらもフレンはそれを咀嚼できずにいた。

「はあ」

と情け無い声がついつい出てしまつ。

「帝国の王様の一族と、同じようなことよ。私たちの一族も魔法が使えるの」

「一族？」

「……う、うん」

「じゃあ、俺とクララは同じ一族だつてことか？」

「ま、まあそついうことになるわね」

なんとも齒切れが悪い。

「じゃあクララはどこで生まれたんだ？ 両親は？」

「それは……私にも判らない……私も物心つくころには……両親はいなかったの」

フレンはクララの声の上擦っていることに気づいた。ふと顔を覗き込むと、クララの頬を大粒の涙が一筋流れるところであった。

やはりあまり訊いてよいことではないのだな、とフレンは自責した。なにがなんだかわからないが、クララを悲しませてまで訊く意味はない。

「もういいよ、クララ。つらいなら、話さなくてもいい」

「違う……違うの……」

しかし、そう言つてクララは乱暴に涙を服で拭つた。

「フレンはまだ力を使いこなせていないみたいだから、呪文の言葉を教えるわ」

溢れる涙を無理やり堪えたクララが、もう大丈夫といった風に強がって言った。

「じゅもん？」

またしても突拍子もない単語の出現に、ただ繰り返してしまおう。

「そう。自分の口で魔法の言葉を発することによって、体の中にある魔法力を正しく呼び起すの。王家の人たちだって使っている方法よ」

「王族も……？」

「そう。フレンがさっき使った魔法はこれ。“アケレフェルト・ヒマンカ・ルオマ”」

クララはそう言っておもむろに右手を前に突き出した。すると、触れても居ないのにクララに押されたような力がフレンの胸に加わり、思わずよろけそうになった。

「これがあの魔法よ。自分の想像したところに力を与えるの。力の大きさは、その人の魔法力に比例するわ」

「えらく長い呪文だな」

「呪文は必ず必要というわけじゃないの。体に感覚を覚えさせるための、補助のようなもの。こつと感覚さえ掴めば、呪文無しでも魔法を使うことはできるわ」

「あけりふえるとひま……何だっけ？」

「“アケレフェルト・ヒマンカ・ルオマ”」

クララが再び右手を前に出す。再びフレンは胸に衝撃を感じてよろけた。

「いちいち押すなよ」

「覚えた？」

「アケレフェルト・ヒマンカ・ルオマ」？」

そう唱えながらフレンは道端の拳大の石ころに向かって手を突き出す。しかし石ころは転がるどころか、ぴくりともしない。

「駄目だねえ」

クララが唇を尖らせる。

「呪文あつてる？」

「あつてるよ」

何度も教えられた呪文を繰り返すも、フレンは魔法の力で石を動かせずじまいだった。

「フレンには“練習”が必要みたいだね……とりあえず、戻ろつか」

クララの提案にフレンは頷いた。そして気になることを尋ねる。

「このことは皆には……」

「内緒にして欲しいな」

欲しいとは言ったものの、クララの眼はそれ以外の道を許さないといった決意に溢れている気がして、フレンは少したじろいだ。

クララの話にはどうも腑に落ちないところが多い。

もっと突っ込んで訊いてみたくなることも、フレンには山ほどあった。

それでもフレンは、開きたくなくなる口をなんとか隠む。もしその時
がくれば、クララは話してくれるだろうと信じて。

第十二節 彼は嘗ての師団長

アルベルトはこの異族の少年の処遇をどうするか、決めかねていた。

名前も判らぬこの男の子は、次の日の朝になってもまた目を覚まそうとしなかった。

「さて、どうしたもんかねえ」

少年の額に乗っている濡れた手ぬぐいをとって、再び水で湿らせながらアルベルトが呟く。

「そういえば昨日、この子“ダルラン”って言ってたな。アルベルト、何か知ってるか？」

と、フレンが昨日の記憶を辿りながら、アルベルトに尋ねた。

「“ダルラン”ってのは、ジリ族の言葉で“森の主”って意味だ」「へえ」

昨晚の記憶を呼び起こす。

確かに森の主たる理由は、あの熊に溢れるほどであった。酷く大きな体、一切の理性を持たぬ瞳、そして爪、牙、それはまるで

「まるで魔獣だな」

「魔獣？」

自分の思考を継ぐようなアルベルトの言葉に驚き、繰り返す。

「ああ。帝国内じゃ、どこの地域にでもある言い伝えだ。極端に体
が大きくて、尋常じゃないほど凶暴な獣が偶に人前に現れるそう
だ。まあ、昨日の熊みたいなやつが言い伝えの元になってるんだろ
うな」

フレンの脳裏にあの時の映像が鮮明に蘇る。

オルエツタが死んだ、あの時。

アルベルトの話聞いたあとだからか、“あれ”を形容する言葉
が魔獣以外ないようにフレンには思えた。

「ハビ……」

「はび？」

思わず口籠った単語に、アルベルトが反応する。

「いや、なんでもない」

不思議な顔をしているアルベルトを残して、フレンはテントを出
た。

ゆらゆらと揺れるような日の光が眩しい。

目の前にある燃えきった木炭に、こっそりと昨日クララに教わっ
た呪文を試してみる。

「アケレフェルト・ヒマンカ・ルオマ」

しかしやはり変化はない。

別に魔法など使えなくてもよいか、と思う一方、やはりなにか釈
然としない。

「ねえ、あれ何？」

と、外で朝食の用意をしていたクララが急に遠くの方を指差した。いつも遠方の異変に察知するのはクララであることを、フレンは訝った。もしかすると、それも魔法の助けを借りているのかもしれない。そう考えると、クララが食堂で入隊を希望した時、食堂の外で話を聞いていたという信じがたい話にも合点がいった。

「ありゃあ、帝国軍だな。ほら旗が見える」

テントから顔を出したアルベルトが目を糸のように細めて言った。確かに目を凝らしてみると、地平線上に褐色の点々がもぞもぞと動いている。その上からは小さいながらも帝国軍旗がはためているのが確認できた。

「二千はいるな」

ジェネがぼつりと言う。

「演習かなにかかしら？」

ロロもそれに続く。

「方向から言うと、恐らくスピサレッタの北あるルルアに行くんだろ。あそこには軍事演習キャンプがあるからな……多分、最近入軍した新人たちだろう」

アルベルトは目を細めるのを止めると、そう解説を打った。

「ねえ、あの隊には軍医もいるんでしょ？ あの人たちにこの子の事を任せたらどうかしら。方向的にもそんなに悪くないはずよ」

ロロの提案にアルベルトが唖る。

「そうだなあ……あいつらがルルアに行くなら、北上しながら少し東に戻れば半日でぶち当たるな。それだと街道をしばらく外れるが……よし！ まあいいだろう。この少年を連れてスピサレッタまで行けまい。それに山登るのも無理な話だ。皆、出発の準備を」

アルベルトの決断に、それぞれやる気があるんだかないんだか判らない返事をして、野宿を置く。

「街道外れるからな。初心者組は気をつけてついて来い」

と、アルベルトの号令に、皆また生返事を返し出発する。

目指すは行軍している凡そ二千人の帝国軍である。

フレンは東の山に掛かった太陽を見て、今日は暑くなるぞと気を引き締めた。

「アルベルト隊長に、敬礼！」

フレンたちはそれから半日かけて、整備されていない荒地を尻を痛めながら進み、やっとの思いで行軍している帝国軍の旅団とぶつかることができた。

「こら、敬礼はやめろって言っただろ」

アルベルトがとある軍兵を諷めている。その軍兵の後ろでは過去二年間で入隊したほぼ全ての新人たちがアルベルトに敬礼をしたま

ま固まっていた。

アルベルトの後ろでフレンたちはその迫力に圧倒されていた。アルベルトがここまで地位のある軍人だと、雑務隊の誰が一体想像しただろうか。

「いえ、先の大戦で若くして師団長を任されたアルベルト隊長に失礼があつてはなりません！」

諫められている当の軍兵も力いっぱい敬礼をして、止める様子はない。

「よい、止めい」

アルベルトがそう手で合図すると、先頭の軍兵が止めと叫び、全ての軍兵が起立の状態に戻った。

「この旅団に軍医はいるか？」

「はい、十二人おります」

「よし。ではこのジリ族の少年を預かるように。旅団長は責任を以つてこれを預かり、またアルダナに伝令を送りジリ族の大使にこのことを伝える。よろしいか」

そういいながらアルベルトがフレンに合図を送る。フレンは了解して、気を失つたままの少年を抱かかえてそつと軍兵に彼を渡した。

「はっ、承りました」

どうやら先ほどからアルベルトと会話している人物はこの大所帯の長、旅団長らしい。アルベルトより十以上歳が上に見えるが、かなりアルベルトのことを畏れているようだ。

「お前たち、ルルアの演習場に行く途中だな？」
「はい、ちょうど二週間の訓練を予定しています」

旅団長のその言葉に、後ろの新人たちが嫌そうに顔を微かに歪めた。

「よろしい。では俺たちは任務に戻る。報告は帝都に戻ってからでよい。よろしいか」
「はっ」

そうして雑務隊と旅団との短い接触は終わった。
フレンたちはすぐに踵を返し、目的の地スピサレッタへと向かった。

任務は領主の暗殺阻止。

一体どうなるのだろうか、フレンの胸は高鳴っていた。

第十三節 餌

スビサレットは殺伐とした街だった。

枯れた土地に無理やり石を積んで巨大な街を作り上げたというよ
うな印象を、フレンに与えた。

街の西側にはここら一帯の領主ワトリング伯爵の堅牢質素な城が
あり、それより西に広がるバウムガルデン王国へ睨みを効かしてい
る。

「さて、と」

街の中ほどにある寂れた宿屋の一室に集まった雑務隊の五人は、
アルベルトの指示を待っていた。

「クララ」

「はい！」

一番目に呼ばれたのが嬉しいのか、クララが元気よく一歩前に踏
み出た。

「おまえ、酒場で働け」

「はい？」

また耳を疑いたくなるような命令に、クララだけでなく皆が驚い
た顔になる。

「酒場だ酒場。ウェイトレスでもなんでもいいから、働かせてもら
って情報集める。盗み聞きだ。耳がいいんだろ？」

アルベルトの続きの解説を聞いて、フレンは悪くない案だと納得した。

「どんな話を聞けばいいの？」

「それはまだ判らん。追って指示する。次に口口、ジェネ」

「なに？」

「なんだ」

「おまえたちは待機。部屋で休め」

アルベルトの休憩の指示にも、無愛想組二人は特に喜ぶ様子も見せない。

「フレン」

最後にフレンが呼ばれる。

「お前は俺と散歩だ」

アルベルトは何か目的地があつて、散歩などと言い出したのだとフレンは思っていたが、どうやら違つらしい。宿を出てから大通りを道なりにぐるっと円を描くように街をただ歩いているだけのようだった。

この辺りは雨が降りにくくひどく乾燥しているため、街行く人々は皆砂嵐避けにフードを深く被っていた。

そろそろどこへ向かっているのか、フレンがアルベルトを問いた

だそうとした時だった。

アルベルトはおもむろに通りの真ん中で立ち止まり、ここがいいな、と一人で呟いた。アルベルトの視線の先には、つい数日前に造り始めたような、基礎しか出来ていないような建てかけの建物があった。ほとんど更地であるかなり大きめのその土地の上には、十人ほどの大工が仕事に精を出していた。

フレンがどういふことだと、一人思索しているころにはアルベルトはその建築途中の更地の隣にある肉屋に片足を踏み入れていた。

「店主！ ちょっと尋ねたいんだが」
「なにかね」

アルベルトの問いかけに、奥から店の主人らしき六十歳近くの男性が暢気な感じで出てきた。

「この隣には何が建つんだい」
「すまんが、俺あ聞いてないねえ」
「わかった。すまない、邪魔したな」

それだけ聞くとアルベルトは満足そうに店から出てきた。

「そろそろ、何をしたいのか話してくれてもいいだろう？」

上機嫌なアルベルトに、フレンが口を尖らせる。

「まあ見てなつて。とりあえず狙いの大物を釣り上げる“餌”を用意しなくちゃならんからね」

フレンとアルベルトは、建築途中の更地を発見したあと、街の人間に聞き込んで“東雲の旅団”の人間の居場所を調べた。フレンはアルベルトの口から旅団の名前が出た、その一瞬はどきりとしたが、こんな辺境の地に自分の過去を知っている人間もいないだろう、と何も言わずにいた。

「ここにマルセロという旅団の人間がいると聞いてやってきたんだが」

そうしてアルベルトは、街で集めた情報をもとにとある一軒家の玄関に顔をつ突っ込んでいるところだった。

「なんだお前は。ノックぐらいしろ」

「これは失礼！ で、マルセロという人はいるかな？ 用心棒を紹介してもらえると聞いてやってきたんだが……」

奥から聞こえてくる怒声にも怯む様子なく、アルベルトは飄々と口を動かす。

「マルセロは俺だ」

それは良かった、と言いながら許可なくアルベルトは家の中に入っていく。フレンも慌てて続く。玄関の先には、がっしりとした体で頬に深い古傷を持った中年の男がいた。これがマルセロだな、とフレンは頭の中で確認する。

勝手に入ってくる二人の男に、怪訝な顔をしながらもマルセロは話を続けた。

「俺が用心棒を紹介するわけじゃねえ。仲介屋を紹介するだけだ」

「仲介屋」？」

アルベルトが聞きなおす。

「そうだ。奴隷から犯罪者まで、あらゆる人間を売り買い貸し借りしている奴だ。俺は仲介屋へのただのパイプ役だ」

世の中にはいろんな職業の人間がいるもんだ、と話を聞いていたフレンは感心する。

「それじゃその仲介屋つてのを紹介してほしいんだがね」

「まあ待て。お前たちここのモンじゃねえな……仲介屋に会うのに、俺に金を払う必要はねえ。必要なのは信用だ……お前たちはなぜ用心棒を探してるんだ？」

その場の空気が少し張り詰めるのが、フレンには判った。そうとは悟られないように警戒を強くし、ナイフをいつでも抜けるように手をそれとなく構える。

「いやあ、俺たち兄弟は帝都から最近流れて来たんだ。家も土地も全部売っぱらっちゃまって、こっちで小さな酒場でも始めようかと思ってるね。それで大通りの肉屋の隣の空き地を買って、今モノを建てるとこね」

先ほどのアルベルトの行動はこのためか、とフレンは内心で合点する一方で、急に出てきた兄弟という設定に文句を言いたくなるが、黙って従う。

「ふうむ……そうか。まあ、いいだろう……紹介自体はするが、仲

介屋に仕事してもらえるかは保障せんぞ」

「いやあ！ 話がわかる人でよかった。なあ、弟よ！」

何だその芝居は、と思いつつもフレンもアルベルトに調子を合わせる。

「夜の十二時に大通り北の風見鶏が屋根についてる家の裏の路地に行ってみろ。毎日はいねえが、三日に一度くらい仲介屋はそこに現れるからよ」

マルセロはそれだけ言って、また奥へと戻っていった。

フレンたちはその無愛想な背中にとりあえず礼を言って、外へ出た。

「さあ、ようやく餌を見つけたな。これからだ」

満足気にそうアルベルト言うのを聞いて、フレンはまだ“餌”の段階が終った所なのかと、これからの先の長さを思いやった。

第十四節 仲介屋

“仲介屋”がマルセロが言っていた場所に現れたのは、フレンたちが夜中そこで彼の姿を待つようになって二日目の夜だった。

微かに辺りの家々から漏れる光でお互いの姿が辛うじて認識できるくらいの暗闇の中、フレンとアルベルトはひたすら仲介屋が現れるのを待っていた。

「お前らか、マルセロのところへ来たのは」

フレンは突然のしゃがれ声に素早く振り返った。闇に紛れる姿がある。

「そつだ。お前が“仲介屋”か？」

アルベルトがぐいとフレンより前に進み出て、質問する。

「いかにも。用心棒を探しているそつだが……？」

黒いマントを羽織った男は、その上からでも判るほど痩せこけた体をしていた。フードの下から除く妖しげな目が左右する。

アルベルトは男が仲介屋であるという言質をとると、すぐにフレンに合図を送った。

「なつ?! なんだつ!」

フレンはアルベルトの指示を受け、少し屈みながら素早く仲介屋の後ろに回りながらその片腕を掴み、後ろを取るとそれを捻り上げて仲介屋を拘束した。

「少し質問したいことがある。良いかな」

アルベルトが自身の顔を仲介屋の前に突き出しながら言う。しかしその表情は全く脅しているようなものではなく、いつもの柔和なそれであった。

「仲介屋は情報を漏らさない」

仲介屋が冷静に言い放つ。

フレンは自分が拘束しているこの男に、少し感心した。いくらアルベルトと自分に迫力が欠けているからといって、論理的に考えて生命の危険さえあるこの場面で落ち着いて要求を撥ねるこの男の精神力にだ。

「かつこ良いねえ。さすがは悪賢い人間から頼りにされてる仲介屋さんだけある。けどいいんだ。君は別に俺の質問に答える必要はない」

アルベルトはそう言うてにっこり微笑んだ。

「どういうことだ」

「はい、いいかな。質問するよ……えーと、最近君は誰かに暗殺者の手配を頼まれたりしたかな？」

アルベルトは仲介屋の意など介さずに、にこやかに訊く。

もちろん仲介屋がそれ以上口を開く様子はないが、それでもアルベルトは満足げだった。

「そうか……それじゃあ、その暗殺者の手配を頼んだのは誰かな？」

仲介屋がほんの一瞬ではあるが、アルベルトに暗殺者の手配を頼まれたことを見抜かれて、目を見開いた。アルベルトのこのおかしな能力を知っているフレンとは違い、彼にはその種がまったく理解できないようではあったが、自然とアルベルトから目そ逸らし地面を睨みつけるようになった。

「その頼みを君は断ったのかな？ そうか……それはその暗殺者の手配を頼んだ相手が、あまりにも強大だったから、かな？」

アルベルトは物言わぬ仲介屋の思考をいとも簡単に解いてゆく。食堂での一件で、アルベルトの心を読む力については納得していたフレンであったが、それでも目の前で繰り広げられる不思議な光景には首を傾げてしまう。

「その人物とは……バウムガルデン王国……帝国内の他の領主……帝国軍部……領兵……領兵？ ワトリング領の軍の人間なのか？」

次々とアルベルトが読み上げる言葉になにかしらの反応を仲介屋が示したのか、アルベルトはワトリング伯の暗殺を企てた人物がワトリング領の軍内部の人間であるという結論に辿りついたようであった。

「なぜワトリング伯爵の命をワトリング伯爵の兵が狙うんだ？」

話の流れについていけなくなったフレンは、堪らずアルベルトに質問を投げかけた。

「さあねえ……いよいよきな臭くなってきたね」

アルベルトは微笑んだままそう言うと、フレンに仲介屋を解放せよと合図を送る。フレンがそれを受けて捻り上げていた仲介屋の腕を放すと、アルベルトはもう一度自らの顔を仲介屋の顔にうんと近づけて最後の警告をした。

「今日は見逃すけど、俺たちのこと話したら痛い目みるよ。解るよね？」

一気に真顔になったアルベルトは奇妙な迫力を纏っていた。

仲介屋はそんな警告を受け、震えるように顔を縦に振り頷いた後、逃げるように夜の闇へと再び姿を消した。

「それで」フレンが腰に手を当てて言う。「大物は食らいついたのか？」

アルベルトは少し険しくなった表情を再びいつものように緩めると、飄々とした調子で答えてのけた。

「釣ってみないと解らんよ」

次の日の昼、アルベルトは雑務隊全員に召集をかけた。場所は宿のアルベルトの部屋だ。

フレンはアルベルトが考えていることについて、いくつか質問を

してみたが予想通りアルベルトにははぐらかされるのみでほとんど何も情報を得られなかった。

「フレン」

召集をかけたアルベルトがなにやら部屋を少し外した、会議の前の時間にクララが小声で話しかけてきた。

「なんだ？」

「例の“あれ”、練習してる？」

クララの言う例の“あれ”とはもちろん“魔法”のことだろう。もちろんフレンはことあるごとに、手頃な大きさの対象物を見つけては「アケレフェルト・ヒマンカ・ルオマ」と小声で呟きながら手をかざしていたが、不思議な現象はひとつとして起こらなかった。

「練習してるが、成果はなしだ」

フレンがそう告げると、クララはなぜか満足そうに、そう、とだけ呟いて会話を終わらせた。

「さて、それじゃとりあえずクララの報告から聞こうか」

と、脈絡なく部屋に入ってきたながらアルベルトが宣言した。皆の視線がいつきにクララに集まる。一度に四人もの注視を浴びたクララは若干照れた様子を見せて、酒場での情報収集の結果について話し始めた。

「えーと……アルベルトの指示で酒場に居る兵士たちの話をいっばい盗み聞きした結果、最近兵士さんたちはお休みが多くて嬉しいそ

うです。それに、最近行方不明の兵士さんたちが多いいんだって」

「なんだそれ？」

「さあ？」

フレンの問いに、クララは自分には全く解らないといった困惑した表情を浮かべた。

酒場に首尾良く潜り込んだクララに、いつのまにかアルベルトが指示を出していたのだろう、クララは酒場で飲んだくれていた兵士たちの話に耳を澄ましていたようだがその内容については、とても有意義なものとは思えなかった。

それでもちらりとアルベルトの表情を伺ってみると、それはとても満足そうな笑みで満たされている。フレンにはそちらのほうが謎であった。

「よしよし、俺の予想通りだな……だが本当にこれがそうだとするなら、最悪だな、最悪の事態だ」

とアルベルトはクララの報告を聞き終えてなにやらぶつぶつと呟いている。

その内容にフレンは興味を覚えるも、どうせ訊いても答えてはくれないとじつとアルベルトを見つめるのみだった。

「……いいだろう……よし、今から皆にそれぞれ指示を与える。必ずその指示通りに動くように。場合によっては誰か一人でもしくじれば大変なコトになる可能性もある。肝に銘じて任務を遂行せよ」

アルベルトはしばしばつぶつぶつ呟きながら悩む様子を見せた後、急に顔を上げたかと思うと面々それぞれに指示を与えだした。

「まず口口」

「なにかしら」

「君は明日の真夜中零時きっかりに俺のもとにこい。指示を書き記した紙を渡す」

「明日の零時に貴方はどこにいるのかしら？」

「それはわからん。自力で見つけてくれ」

「……いいわ」

アルベルトのこの辺鄙な命令にも、ロロは異を唱えることなく了承した。

「それからクララ、ジェネ。二人は俺がロロに渡す指示書に書かれている通りに行動せよ。例外は許さん。必ずだ」

「わかった」

「わかりました」

三人の名前が呼ばれたところで、フレンはまたかと到来する嫌な予感に肩を落とす。

「それからフレン」

「……なんだ」

「お前は俺と一緒に来い。また楽しい楽しいお散歩だ」

アルベルトに従い、フレンは街へ出た。
思いのほか日差しが強く、くしゃみが出た。

「ほら、気抜くな。いくぞ」

と、喝を入れられて背筋を直しアルベルトについてゆく。

「で、今日は何をすればいいんだ？」

「今日はこのワトリング領の軍本部へ行く。領兵たちの頭首である
バリオス將軍に会いにな」

歩きながら、フレンはアルベルトをしげしげと見つめた。

「將軍に会いに？ どういうことだ」

「仲介屋は領主の暗殺を企んだのは領兵だと言っていた。加えて奴
が依頼を断ったのは、依頼主の力があまりに強大だから、事に巻き
込まれたくないからだ……ということは領軍上層部の誰かである可
能性が非常に高い」

「そうか……それじゃとりあえず將軍をとっ捕まえるんだな？」

「そんなわけないだろ」

予想外のアルベルトの返事にきよとんとする。

「どうして？ 將軍とっ捕まえて尋問すればいいだけの話じゃない
のか？」

そんなフレンの問いに、アルベルトが頂垂れる。フレンに送られ
るその視線はまるで、この世間知らずめ、といった感じのものであ
った。

「領軍は帝国軍とは完全に別の組織なんだぞ。そりゃ領を治めるワトリング伯は王の配下ではあるが、俺たちが乗り込んで將軍をいきなり拘束したら問答無用で領兵たちに打ち首にされる」

アルベルトの解説にフレンはなるほど、とわざとらしく首を縦に振った。

「ややこしい事態ってことだな。じゃあ何か策はあるのか？」

フレンのこの質問にアルベルトは一層したり顔になり、答えた。

「あるに決まってるだろ。最初から最後まで全て俺の計画の通りになるだろうよ」

第十五節 バリオス

その日の夕方、フレンはアルベルトに連れられてワトリング領軍の頭領であるバリオス將軍の館へ来ていた。

城を取り囲むように領軍の兵舎や馬舎などの施設が立ち並んでいる一角にバリオス將軍の館はあり、とても堅牢豪勢な造りであった。広く取られた庭には過不足なく衛兵が配置され、鋭く眼光を光らせている。

「さあ、フレン君。ようやく君の見せ場が来たよ」

屋敷の門がある場所の少し手前のところまでくると、アルベルトは嬉しそうにそう言いながらフレンの肩を叩いた。

「嫌な予感しかしないが」

「いいか、良く聞いた。これから俺たちは奴隷商人としてバリオス將軍の館に正面から入っていく。俺が奴隷商人、お前が奴隷で腕の立つ暗殺者だ」

「俺が暗殺者？」

突飛なアルベルトの課す設定に、思わずフレンは声を上げる。

「まあ本当に暗殺するわけじゃない。しかし俺たちには信用がない。暗殺者としての腕を証明するために、敢えて正面から無理やり將軍の館に入っていく、向かってくる衛兵たちを一人残らずお前が倒すんだ」

そんな無茶なことをさらりといいながら、アルベルトは何やら宿から持ってきた一枚の紙を折りたたみ、短い鉛筆と一緒に腰のベル

トとズボンとの間に突っ込んだ。

「おいおい」

「今更無理だなんていうなよ。その為に“三十人抜き”を入隊させたんだからな」

「ま、やれるだけやってみるよ」

フレンはアルベルトのそんな言い分に負け、渋々同意した。

しかしもともとフレンの使うパントーハはどんな状況でも生き残るための技術であり、積極的に敵を無力化するような事態はあまり想定していかない。もちろんフレンの頭にはそのことが浮かんだし、正直完全に上手く事が運ぶ自信もなかったが、ここまでアルベルトと一緒に過ごして彼に奇妙な信頼感を持ち始めていたフレンは、アルベルトの策であれば、と思いその通りにすることにしたのだった。

「あ、あとお前は館の中では一言も喋るなよ」

「……端からそのつもりだ」

「あ、あと俺のことは絶対守れよ。俺弱いからな」
「分かってる」

そんな確認をしつつ、二人はバリオス將軍の館へと近づいていく。一歩一歩と館の巨大な門へと歩みを進めるにつれ、フレンの鼓動は早まった。

「何用か」

と、フレンとアルベルトが何食わぬ顔で館の門を通ろうとすると、無表情で突っ立つ門兵の一人に予想通り声をかけられた。四人いる門兵のうちの、一番体つきが大きな者が門の真ん中にぐいと道を塞ぐように進みでてくる。

「いやあ、ちょっとバリオス將軍に用があつてね。通してくれない？」

強面の門兵にも負けず、アルベルトはいつもの軽い調子だ。

「駄目だ。ここで用件を言え」

アルベルトに対する門兵は頑に二人を拒んだ。他の門兵たちも完全に不審者としてフレンたちを注視している。

「バリオス將軍が“暗殺者”を探していると小耳に挟んでねえ。私どもならお役に立てるだろうと、参上したまです」

そう矢継ぎ早に放たれるアルベルトの言葉に、口を真一文字に結んだ門兵は無愛想に「少し待ってる」と言って、他の門兵たちになにやら目配せをした後館の中に入っていった。

フレンが、無理矢理押し入るんじゃないのか、と考えていると館からまた無表情で出てきた門兵は首を降りながら申し出の却下を突きつけた。

「駄目だ。帰れ」

「そう言われましてもねえ………すいませーん！　バリオス將軍閣下………いらっしやいますかー？」

門兵の冷たい答えを受け取ったアルベルトは何を思ったのか、その場で館に向かって大声で叫び始めた。

「な、なんだ！　静かにしろ！　ひっ捕えるぞ……！」

「バリオス將軍閣下!!」

門兵の静止も全く意に閑せず、アルベルトは叫び続ける。

当然のように館から異常を察知した衛兵たちがぞろぞろと表へ出てくる。フレンはほぼ無意識のうちに、敵の戦力を把握する。

今目視できる限りでは衛兵が九人。館からの出てき方から予測して、だいたい館の中にはあと二十人ほどの兵が配置されていると見ていいだろう。

そして兵の他にも、給仕係なども相当数いると考えられる。

フレンはアルベルトの方を注意深く観察した。館への侵入のタイミングは全く打ち合わせをしていない。一歩間違えればフレンはともかく、アルベルトの身が極めて危険な状況にさらされる可能性もある。

「おい！ 今すぐ立ち去らないと痛い目を見るぞ！」

フレンは事の成り行きを細やかに見守りながら、アルベルトの陰でずいぶん“まとも”な兵であると、そんなことを思っていた。少しでも横柄な門兵であれば、こんな迷惑な男なぞ即座にお縄者になるだろう。

そんな衛兵の人柄の良さを予見し、これから自分が起こすことと照らし合わせるとフレンは少し憂鬱な気持ちになった。

「將軍閣下?!」

「止めないかっ」

遂にアルベルトの奇行に我慢しきれなくなった一人の門兵が前に勢いよく飛び出てきた。アルベルトが少しだけ振り返りフレンにちらりと目配せする。これが合図か、とフレンは即座に思いアルベルトの腕を掴もうとしている門兵の頭を手で掴み、そのままバランス

を崩させて地面へ転がした。

一瞬にして兵たちの目の色が変わる。場の空気が一気に張りつめ、瞬く間に戦場のそれに似たものとなる。

間髪挟まず、まず門兵であった残りの三人がフレンに襲いかかった。その奥には他の兵たちがもの凄い勢いでこちらに突進してきているのが伺える。

フレンはまずアルベルトを下がらせたのち、自分も素早く一步飛び退いて兵たちの調子を狂わせた。

標的の移動に合わせて力を再び入れ直す一呼吸の瞬間、フレンは反動をつけて前に飛び出し、その兵たちの力の抜ける一呼吸の間に門兵三人の顎を正確無比に軽く叩いて気絶させた。

アルベルトを慎重に連れながら、館の方へと駆ける。

向かってくるばらばらの衛兵たちを転ばし、気絶させながら進む。後ろに置いてくる衛兵たちが再び起き上がって殿のアルベルトを襲う前にと、どんと前へと進む。頑丈そうな木造りの勢いよく開け放ち、館内へと足を踏み入れる。

「どつちだ?!」

進路を訪ねると、アルベルトは素早く奥の階段を指差した。なるほど、その経路が一番守りが固い。

階段を兵を投げ降りしながら昇る。倒されても再び起き上がって向かって来た者も含めると延べおよそ二十五人ほどの兵を倒すと、前にはほとんど兵の姿が見えなくなっていた。

守りの薄くなった二階の廊下を失踪する。

「一番奥の扉だ」

アルベルトの指示に、フレンは扉の前を固めている二人の衛兵た

ちの刃を避け少しだけ強く頭を叩いた。衛兵たちが同時に膝から崩れ落ちる。

暗い色の木造りの部屋の扉を蹴破り、中に押し入る。

「……何事か」

中に居たのは初老の男性であった。

プレートアーマーを着たマネキンが三体も並ぶ、書斎のような造りの部屋の真ん中に、男はフレンたちに背を向ける格好で立っていた。この騒ぎに微塵も動揺している様子を見せないその男は背中では衛兵とは異なる気配を感じたのか、ゆっくりと振り返った。

その表情から男は決して若くないと判ったが、その肉体はまだ現役といった雰囲気を感じさせていた。使い込まれた筋肉は柔らかさこそ感じさせることはなかったが、十分に力強く見えた。その顔にはいくつもの刀傷の古跡が残っていて男が歴戦の戦士であることを伺わせている。

しかしながら、歪に曲がった口元が狡猾そうな印象をフレンに与え、少しの不信感を抱かせた。

「バリオス將軍閣下ですかね？」

アルベルトがいつもの調子で男に訪ねる。

「いかにも。君たちは何者かね」

「お会いできて光栄です、閣下。私奴隷商人のアルベルトと申します」

アルベルトがそう自己紹介を済ませたところで、後ろの部屋の扉が勢いよく開いてふらふらになった衛兵たちがなだれ込んできた。フレンたちを捕らえようとする兵たちをバリオスが手で制した。

「聞かん名前だな……して、奴隷商人が私に何用かな？」

「このアルベルト、將軍閣下がなにやらお困りということを聞きつけまして馳せ参じた訳でございます」

アルベルトが恭しくそう言い頭を垂れる。

「うむ」

バリオスは先を続ける、とアルベルトを促した。

「……閣下は暗殺者を探しているそうですね」

「いかにも」

フレンの予想に反してバリオスは即座にはつきりと自分が暗殺者を手配しようとしていることを話した。

「お察しの事とは思いますが、私が閣下に暗殺者を手配させていた
だきたくこのような手段をとった訳でございます。ま、いささか手
荒ではありましたが、良い実演になったでしょう。この男はご覧の
通り、私の命令であればどんな屈強な衛兵であろうとも何人でも倒
すことが可能です。閣下の目的に打ってつけかと……」
「私の目的、だと？」

この部屋にフレンたちが来て初めて、バリオスが眉間に皺を寄せ
険しい顔をした。

「はい……閣下は……ワトリング伯爵へのクーデターを計画されて
いるのではないですか……？」

アルベルトは慎重に言葉を選ぶようにそう話した。

フレンは我が耳を疑った。

クーデター？ 將軍はクーデターを企てているのか？
と、フレンの頭にいくつもの疑問符が浮かぶ。しかしなぜ。

「……なぜそのように思う？」

「そんなこと、王国側の街の守備兵の士気を見れば明らかでありましよう。さらに酒場で噂話を聞いたところによると、最近是非番の兵士が増えているとか。このような街の状況を見れば、気づくなというほうが無理な話です」

いやアルベルトには確信などない、とフレンは後ろに並ぶ衛兵たちに注意を配りながらそう考えた。そう、言わばアルベルトはこの敵つい將軍にかまを掛けているのだと。

バリオスはアルベルトのそんな言葉に何も言わず、その鋭い眼光を返すのみだった。アルベルトはさらに続ける。

「ただ、これほど思慮深そうな將軍閣下がそう簡単に祖国を裏切るはずがない。そこにはなんらかの、手引き、といいましようか、誘いがあつたに違いない……王国側からの誘いがね」

バリオスの眉が再び微妙に震えた。

フレンもまた目を見開く。

王国側からの誘いとはどういう意味だろう、とアルベルトの解説を待った。

「閣下……恐縮ながら私の見解はどうやら間違っていないようですね。王国側から打診があつた……貴方がクーデターを起こし、このワトリング領全てを王国領にしないか、とね」

そうか、とフレンは内心で合点した。

王国側は帝国との境界にあるワトリング領を王国のものにしたくて、このワトリング領を実質取り仕切っている將軍にこのような話を持ちかけたのだ。恐らく、將軍の配下である兵たちも一部またはかなりの部分その話に同意しているに違いない。恐らくクララが酒場で聞いたという行方不明の兵士の噂は、この計画に反対した兵たちのことだ。計画が外に漏れないように、反対した兵は殺されたか、よくて幽閉されているだろう。

フレンがそこまで考えたころ、バリオス將軍はその重い口をゆっくりと開き語り始めた。

「……ふむ……なかなか鋭い男だな。ただの奴隷商人にしておくには惜しいものだ……いかにも、私は王国側の甘言に乗りワトリング伯爵へのクーデターを企てている。そしてその後、ワトリング伯爵から奪い取った領地を王国に引き渡そうとな」

バリオスの口元が一層いやらしく歪むのをフレンは見逃さなかった。

「しかし閣下ほどの軍人がなぜ？」

アルベルトが質問する。

「私たちワトリング領の軍人は、帝国のために生まれたときから身を粉にして軍務に励んできた。昼も夜もその二つの眼は常に王国に向けられ、一瞬たりとも注意を怠けた事などなかった……しかしどうだ。それが報われるような出来事はひとつとして起きやしないではないか。久しく戦も起こっていないために、いくら領土のために身をやつしても領地を分け与えてもらえるところか、まともな褒美も出やしない……私にはワトリング領軍五千五百人の面倒を見る責任がある。私の部下たちには一人たりともひもじい思いはさせない」

フレンはそんなバリオスの話を聞きながら、仕認式を思い出していた。

帝国軍人は例外なくクラウディオ王から仕認されている。その士気をフレンは肌で感じたが、ここにいる彼ら、ワトリング領兵たちはそんなものの存在すら知らない人間が多数だ。

彼らは見知らぬ帝国で暮らす民のために、その自らの命を盾にして日々を生きているのだ。

「そうでしたか……いや、その心意気感心しました！ ぜひ格安でこの一流の暗殺者である“フレン”をお使いくださいませ。閣下はワトリング伯爵を亡き者にするために暗殺者をお探しののでしょうか？ それでしたらご覧いただいた通り、このフレンめは私の命令さえあらばワトリング伯の城に真正面から颯爽と突入し、瞬く間にワトリング伯爵の首を獲って参るでしょう」

そうバリオスの言い分に迎合するアルベルトを見ながら、フレンは言いようのない不安感をバリオスに覚えていた。傍から見ている分には、その姿はまさに自らの配下の兵たちの身を案じている男気あふれる将軍という印象であるが、それとは別にフレンはなぜかその奥にある狡猾な思いを感じ取ったような気がしていた。

「……よろしい。この私の館には領軍の中でも選りすぐりの猛者たちをきっかり三十人も配備している。その守りを真正面から破いたそちらの実力、認めようではないか」

バリオスの言葉にアルベルトがとうございませ、と深々と頭を下げた。

フレンは恐らくアルベルトの計画が不備なく進行していることを予測して、ほっと胸を撫で下ろした。自ら乗り込んだとはいえ、未

だ二人が立つこの場所は敵の本拠地の真つ只中であるからだ。

「しかし」バリオスが言葉を続ける。またあの口元が厭らしく歪む。「私の考えを知られたからにはそのまま野放しというわけにはいかない。計画実行の日まで大人しく我が館の地下牢に居てもらおう」

「そ、それはあまりにも酷い扱いではありませんか」

思わぬバリオスの命令に、流石のアルベルトも少し取り乱した様子で反論する。

「問答無用！ なければ、領軍全ての戦力を我が館に集結させお前たちの首を討取るぞ。よいな！」

バリオスは先ほどまでの落ち着いた様子から一気に声を荒げ、手で衛兵に合図をしてフレンたちを縄で拘束した。

「なに、悪いようにはせん」

バリオスのそんな言葉を後ろに、フレンとアルベルトは十人を超える大所帯の衛兵によって地下牢へと嚴重に連行されてしまった。

第十六節 クーデター

「ほら、入れ。妙な気を起こすんじゃないぞ」

「起こさないよ。何の為にこの館に俺たちが来たと思ってるんだ」

縄を解きながら念を押す衛兵に向かって、アルベルトが説得するようにつづいた。

衛兵たちはフレンたちが大人しく地下牢に収容されるのを見届けるとぞろぞろと一人の見張りを置いて地上へと上がっていった。見張りは地上への階段の前に座ったようだった。

「さて……これからどうするんだ」

フレンは半ば諦めたような調子で、かつ見張りの兵に聞こえないような小声でアルベルトに尋ねた。

「指令書を書く」

フレンの質問にアルベルトはそう短く答えた後、ベルトとズボンの中に挟んでいた折り畳んだ紙と短い鉛筆を取り出して、なにやらごりごりと書き始めた。

「俺はなにをすればいいんだ？」

地面に頭を付けんばかりに指令書を書いているアルベルトの背に尋ねる。

「お前はクーデター実行の時にバリオスの言う事を聞いていればいい」

「城に押し入るのか？ 城の兵はバリオスの配下じゃないかのか？」

フレンは先ほどから気になっていた事を口にした。たしかに街の西にあるワトリング伯爵の城を守っているのもバリオス將軍の兵であるわけで、そうなればフレンが城の中で暴れ回る必要はないことになる。

「そうだが恐らくバリオスは城に配備されている兵をクーデターに誘っていない。城にいる兵の半数は伯爵の近衛兵だし、他の兵もそれに近い者であるからな。勧誘するにはリスクが大きすぎる。ま、クーデターに参加させられる兵たちの中にも、計画を全く聞かされていない者もかなりいるだろうがな」

細かい字を懸命に書き綴りながらもアルベルトが解説する。フレンはなるほど、と頷いた。

「しかしそこまで判ってるなら、こんな回りくどい事しないでやっぱりバリオス將軍を捕らえてワトリング伯爵に引き渡す方がいいんじゃないのか？」

「さつきも言つたる、今この地ではバリオスこそが正義だ。軍の頭領だからな。そしてその任命権はワトリング伯爵にある……ってことはだ、バリオスを運良く捕まえられたとしても、五千五百人の軍人が俺たちを殺そうと押し寄せる中でワトリング伯爵にバリオスがクーデターを企てていたことを証明しなければならん」

「……そりゃ無理だな」

フレンはアルベルトの解説に頭を掻きながらそう言った。

「ほれ、お前の分の指令書だ。覚えたら飲み込むなりして捨てる」

と、アルベルトが書いていた指令書の一部を丁寧にちぎって渡してくる。

「指令書か……なになに……一、人を殺めないこと……二、一に逆らわない限りバリオスの指示に従うこと……三、一と二が相反する状況になったときはバリオスの指示のに従うのを止めること……だけ？」

フレンは読み上げて拍子抜けした。紙に書いて寄越すから、さぞ複雑な命令なのだろうと思っていたからだ。

「それさえ守れりゃ十分だ」

二人が牢にぶち込まれて数時間が経った頃。

見張りの兵が運んできた質素な夕食にありつき、横になってフレンは腹を休ませていた。

アルベルトは未だ指令書をやっと書き終え、壁にもたれかかってぼーっとしている。フレンは大凡日付が変わるぐらいの時間であるかと予測して、そろそろ寝るかと思っていた頃だった。

「ねえ」

フレンの予想外の声が牢の中に小さく木霊した。細く高く、艶や

かな声だ。

「おお、来てくれたか」

アルベルトの歓迎を受けたのは黒い装束を身をまとったロロであった。いつものように泥棒に似つかわしくない奇麗な長い金髪を後ろで括っている。

「指令書は？」

「ここにある」

アルベルトが鉄格子の隙間から小さい字がびっしりと並んだ指令書をロロに手渡す。

「どうやって入ったんだ？ 入り口の見張りは？」

フレンは堪らず口を挟んだ。ここからでは残念ながら地下牢の入り口である階段のほうは見えない。

「どうやってって、普通によ。この警備なんて、あつてないようなものね。見張りならそこで眠ってるわ」

流石は怪盗と言ったところだろうか。ロロはその後、よく効く眠り薬があるのよね、と続けた。

「よし、じゃあそれをジエネたちに届けてくれ。ロロもよく読んでくれよ」

「あら、貴方たちを牢屋から出してあげなくていいの？」

アルベルトの指示に、意外だと言う表情でロロは牢の鍵をじゃらつかせて見せた。

「ああ、鍵は見張りに返しておいてくれ。ここへ来た事は悟られてないだろうな？」

「もちろんよ」

アルベルトはそう確認を取ると、ロロに早く行けと促した。

ロロは軽くフレンに目配せしたあと、音もなく地下牢を去っていた。

フレンとアルベルトが地下牢に入れられて五日が過ぎた朝。朝食を持ってくる代わりに、衛兵が牢屋の鍵を開け放った。

「出る。バリオス将軍が呼びだ」

言われるがまま二人は縄で手を縛られて、連行される形で地下を出た。バリオス将軍の館の中を進み、階段を上がり例の将軍の書斎へと向かった。

「五日間ものあいだ、不自由させたな」

そう労いながら出迎えたのは館の主人であるバリオス将軍である。自分が牢屋にぶちこんだくせに、とフレンは周りに判らないくらいに唇を尖らせた。

「私たちを外に出していただけたということは、今日が計画実行の

日なのですかな」

アルベルトがまた芝居がかった感じでバリオスに話しかける。

「そうだ。ま、君にはまた牢に戻ってもらうがね」

「どづいことですかな？」

笑みを浮かべながらそういうバリオスに、アルベルトが至極驚いた風で問う。

「私と一緒に城に行くのはその暗殺者だけだ。アルベルトとやら、君には申し訳ないがクーデター完了までここで大人しく留守番していてもらおう」

まずい展開になった、とフレンは内心で思った。嫌な汗が全身からじとつと吹き出してくる。

「このフレンめは私の命令しか聞きません。どうか、私を同行させてください」

アルベルトが懇願する。しかし、やはりと言つべきか、バリオスの態度は全く変わらない。

「ならん。君はあまりにも鋭すぎる、信用ならん。ここに居てもら
う」

「バ、バリオス閣下……！」

アルベルトは絶るようにそう言い残し、衛兵に連れて行かれてしまった。

さて、どうするか、とフレンは落ち着いて考えを巡らせた。アルベルトなしではかなり心許ないが、一応指令書の内容は全て覚えて

いる。

一、人を殺めないこと、二、バリオスの指示に従うこと、三、一と二が相反する状況になるときバリオスの指示に従うのを止めること、だ。

しかし一番の問題は、果たしてアルベルトがこの事を予見して計画を立てていたのかどうか、である。

「よし行くぞ！ フレン……と言ったかな。さあ、私についてこい」

バリオスの指示に、フレンはしばし考えた後黙って従う事にした。ゆっくりとしたスピードでバリオスの後を追う。

「なんだ、私の言う事でもちゃんと聞くじゃないか。あの奴隷商人め、でたらめを言いおって……」

どうやらバリオスは、フレンたちに都合の良いように解釈してくれているらしい。この点については、不自然さを感じていないようであった。

フレンの後ろでバリオスの兵たちの荒ぶった掛け声が上がる。

こうして、將軍バリオスによるクーデターが始まった。

第十七節 スビスレットの兵士たち

フレンの前に聳え立つは、スビスレットの要、帝国最西を死守する砦であるワトリング伯爵の城だ。

どうやらフレンとバリオス将軍、それに將軍生え抜きの巨漢の兵たち十一人は城の裏口とも言える南門から侵入するらしい。正面から乗り込むって言うてたじゃないか、とフレンは突っ込みたくなるが一応喋らない芝居を続けているのでそれを堪えた。

城の周りはスビスレット中の兵士で包囲され、完全に攻城前の様相を呈していた。城の配備に当たっていた兵士たちは、フレンが見る限り例外なく全員混乱を禁じ得ないようであった。

「さてフレンとやら。ここからこのスビスレットの領主であるワトリング伯爵のところまで私を先導してくれ」

フレンはバリオスのこの指示に黙って頷くと、バリオスと十一人の兵士たちの前に立ち門から城の中へと走り出した。

幸いにも城の守備兵たちは外を取り囲む五千人を超えるバリオス配下の領兵たちに気を取られているため、フレンたちに気づいていない者は少ない。

フレンは門兵三人の攻撃を軽々と躲し、その処理を後ろのバリオスの兵に任せて先を急いだ。今一番大事なのは、自分たちの城への侵入の情報が城の兵たちに伝達するのを防ぐことである。対面する敵兵は少なければ少ないほど良い。

城壁から飛んでくる矢を避けながらフレンは城内部へ侵入するために、勝手口を目指し駆けた。

確認の為後ろを振り返ると、門兵はどうやら無事バリオスの兵が倒したらしく、バリオスを含めた十二人が後ろから走ってついでくることが見える。

「よっ！」

勝手口の木の扉を蹴破る。中に入ると細い通路がずっと続いていった。さすがに城内は豪華な造りで、足下には深紅の絨毯が延々と敷かれている。

「向こうだ」

バリオスが進路を指示する。なるほど流石は軍の頭首だけある、とフレンは少し感心した。バリオスは恐らくワトリング伯爵に辿り着くまでの最良のルートを熟知しているのだ。この侵入口も前もって選び抜かれたものなのだろう。

バリオスの指差す方へと素早く移動する。小さな階段をいくつか上ったところで折り返し地点と呼べるような場所にたどり着いた。

「よし、階段を登れ」

通路の配備されている守備兵たちを一人残らずきつちりと気絶させながら、フレンはバリオスの指示通りに階段を登っていく。こうして自分たちの姿を目撃したものを丁寧に気絶させていけば、侵入の情報が漏れる可能性はかなり低くなり追っ手や増援部隊は来なくなる。

しかしさすがに領主の近辺を警護する近衛兵たちである。バリオスが連れてきた十一人の精鋭たちは少しずつ数を減らし、この長い階段の半ばにして残り三人となっていた。

フレンはとりあえず指示通りにバリオスの身の安全だけを考慮して行動した。よってその他のバリオス配下の兵については、助けるでもなくただ人数が少しずつ減っていくのを見守っていた。

長い階段を登り終えた先の三番目の扉を開けると、狭く長い螺旋

階段があった。警備の兵の姿は見えない。

「いいぞ、この螺旋階段を登りければ伯爵がいつもいる部屋だ」

バリオスが興奮気味にそうフレンに告げる。

と、後ろから追ってきた近衛兵がこちら目がけて弓を放ってきた。矢の軌道上にいるバリオスを押し倒し、避けさせる。弓は間一髪でバリオスを逸れて、代わりにバリオス配下の兵の右肩に命中した。矢を放った近衛兵はその弓を床に投げ捨て、そのまま剣を抜きこちらへ突進してきた。

「こ、ここは私が！」

バリオス配下の兵が一步前へ踏み出て近衛兵の剣撃を受けた。

フレンはそれを確認すると、床に倒れているバリオスの襟をむんずと掴み、引き摺りながら無理矢理螺旋階段を登った。

およそ五階分ほどにもなる長い螺旋階段を登り終え、その先の細かい装飾が施された檜の木の扉を開けるころには、ついにフレンとバリオス二人だけになってしまっていた。

「はあっ……！ はあっ……！ 私が見込んだだけはあるな……君のお陰でここまで来れた……」

バリオスは階段を必死で登らされたために、息も絶え絶えになりながらフレンの方を向いてそう言った。

しかしフレンはそんなバリオスに相づちも打たず、目当ての部屋へと入っていく。別に愛想を振りまく必要はない。

「……ワトリング伯爵」

バリオスはフレンの後に続いて部屋に入ってくるなり、その名を口にした。

部屋の中にはバリオスより十ほど年老いた男性が一人と、それを囲み守るように五人の近衛兵たちが居た。

この男性がワトリング伯爵か、とフレンは確認する。その顔立ちが予想より優しげで、むしろ気弱そうな印象を受けた。バリオスの急襲には全く対処できていない様子で、伯爵自身も何が起きているか全く把握できていないようであった。

「おお、バリオス將軍！ これは何が起こっているのじゃ？ ここにおるグリアーナ近衛隊長も事態を把握できておらんとおる」

ワトリング伯爵がバリオスに問う。

「バリオス將軍！ これはどういうことですか？！ 貴方の兵が城の周りを取り囲んでいるではないか！ 何かの悪い冗談か？！」

バリオスの方へ歩み寄ろうとするワトリング伯爵を静止したのは、恐らく名前のでたグリアーナ近衛隊長だろう。バリオスより若く、背が高く精悍な顔つきをしている彼は、かなり強い口調でバリオスに事態の説明を求めた。

「冗談などではない……クーデターですよ、伯爵」

バリオスの口がまた狡猾そうな笑みでひん曲がる。

「なに?! クーデターだと? 一体どういうことだ、將軍!！」

グリアーナ近衛隊長が怒りで吠えた。伯爵はあまりのことにぽかんと口を開けている。

それも仕方ないか、とフレンは伯爵に同情の念を抱いた。この狡猾そうなバリオスのことだ、察するにクーデターの気配など微塵も抱かせなかったのだろう。

「どうもこうもない、グリアーナ。これよりこのスピサレッタを始めとした帝国最西のワトリング領は私のものになり、そしてその後バウムガルデン王国のものとなる」

バリオスが勝ち誇ったように宣言した。

事態をようやく把握したグリアーナ近衛隊長は大きく舌打ちし、なにやら小声で近衛兵の一人に指示を出した。それを受けた近衛兵がフレンたちが入ってきた方とは逆の扉から飛び出していく。

伝令か、とフレンは予測する。恐らく城中のグリアーナ配下にある兵に臨戦態勢を取らせる為だろう。城を取り囲むバリオス配下の兵の目的がはっきりと攻城と判った今、当然の手配と言えるだろう。

「それで、バリオス。なぜお前はそこのよく判らない輩と二人、こんなところにいるんだ？　クーデターならば大勢の兵でここに押し掛けるか、外の兵と一緒に攻城とともに攻め込めばよかるう？」

グリアーナがバリオスに問う。フレンは自分がよく判らない輩と言われたことに少しだけ憤慨しながら、グリアーナの疑問ももつともだと思った。

確かにどうせ奇襲をかけて、最良のルートから攻め込むのであれば選りすぐり十一人の兵と暗殺者であるフレンだけを引き連れていくより、大量の兵で一気に攻め込む方が自然である。

「ふん！　頭が回らん奴め。もうお前との無駄話はいらぬ、グリアーナ。おいお前、やっつけてしまえ！」

バリオスがフレンに残り四人になった近衛兵の討伐を命じる。フレンは内心でやれやれと思いつながら、ワトリング伯爵の方へ勢いよく飛び出した。

当然そんなことは予期していた近衛兵たちが素早く剣を抜いてフレンを迎えうつ。

まず一人目。フレンの頭頂部目がけて袈裟形に振り下ろされる剣を寸でで躲し顎を叩いて気絶させる。隙無く襲いかかる二人目の肩を掴み三人目に投げ当てる二人を同時に処理し、最後のグリアーナもひとつ瞬く間に手首を掴みくると回転して肘と肩の骨を脱臼させ、背中を蹴飛ばして吹き飛ばした。

四人の近衛兵を一瞬のうちに倒したフレンの目の前には必然的にワトリング伯爵が居た。

「ま、待て、バリオス！」

暗殺者を目の前にしたワトリング伯爵は、恐怖で掠れる声でバリオスを制止した。

「なんでしよう」

「わ、わかった！ 領土は全てお前にやるうではないか。こ、降参だ！ 城も兵も全てお前のものじゃ！ 帝国にでも王国にでもどこへやってもよい……だから、頼む！ わしの命だけは……」

追いつめられた伯爵の体は恐怖で震え、目には涙をためていた。継り付くようにバリオスに懇願する。

「全く鈍い人間ばかりですな……伯爵、私が目立たないように貴方を暗殺しにここへやってきた訳がまだお分かりでないのですか？」

フレンは、それはぜひ聞きたいとバリオスの方に注目した。

伯爵も同じようで、どうということだという顔でバリオスの方を見ている。バリオスはやれやれとわざとらしくため息をひとつ吐いた後、事の成り行きを話しはじめた。

「……約二ヶ月前、私のもとにバウムガルデン王国からの密使がやってきました。私と秘密の協定を結ぶためにね……その協定とは私がクーデターを起こし、ワトリング領を乗っ取ったあと領土を全て王国に引き渡し、代わりに私と私の兵たちが報酬を受け取るというものだ……しかしながら、王国から提示された報酬は総額では莫大なものであったが、私を含め五千人で分けるには幾分少なかった」

バリオスはそこで一息ついた。だんだん読めてきたぞ、とフレンは頭を必死で働かせる。

「そ、それで？」

「決まっていますでしょう。報酬の配分を増やすために人数を減らすんですよ。クーデターという大義名分を背負った、今から始まる攻城戦でね……その為にワトリング伯爵には降伏などしてもらっては困るのですよ。あくまでも、城の外にいることになっている私の首を所望し、戦を始めてもらわないとね」

フレンは何とも胸糞悪い話だ、と顔を顰めた。始めからこの男の奥に見え隠れしていた狡猾さがこのような形で顕れるとは、思ってもみなかった。

バリオスは自らの取り分を増やすために、わざと戦を起こし、自らの軍と近衛兵や城の守りにつく兵たちを殺し合わせて人数を減らすつもりなのだ。確かにこの手段を用いれば、自らの権威を失墜させることなく名声を保ちながら、自分の利益を増やす事ができる。

バリオスの話を聞いたワトリング伯爵はあまりのことに、開いた

口が塞がらないようだった。

「もうすぐ私の命令で外にいる我が軍が城への一斉攻撃を始める…近衛兵以下城内にいる兵たちは当然抗戦するだろう。そうして命果てるまで戦い続け、生き残ったものだけが王国からの報酬を手にするのだ…伯爵、貴方はここで終わりです。おいお前、そこに転がる近衛兵ともども、伯爵をすかっと“殺して”さしあげる」

バリオスが最後の指示をフレンに与えた。暗殺指示。フレンはやつとか、と肩の力を抜いた。どうやらこれでアルベルトの指示に逆らうことなく、この胸糞の悪い男をぶっ飛ばせる、と。

「お、おい！ 何をしている！！ 早く殺せ！」

フレンが指示を聞かずに自分をなにやら物騒な目で睨みつけていることに焦ったバリオスが声を荒げる。ワトリング伯爵は未だ状況が把握できずに、現実から逃避するように目を瞑り、頭を抱えて下を向いている。

「そこまでだ、バリオス」

そう悠長に話しながらフレンたちが入ってきた別の扉から姿を表したのは、他でもないアルベルトだった。

「お、おい！ どうなってる！ お前は牢にいるはずだろ、奴隷商人！！」

ワトリングが続いて、バリオスまでもが取り乱し始める。

「いやあ、脱獄が特技っていう部下がいるもんでね。それでちよっ

と散歩に来たまでですよ、將軍」

「な、なにを言っ……そ、そうだ！！ 奴隷商人！ この男が言う事を聞かんのだ！ お前が、ワトリング伯爵と近衛兵を殺せと命令しろ！！」

バリオスが唾をまき散らしながら怒鳴った。部屋の片隅ではフレンに倒された近衛兵たちも少しづつ失っていた意識を取り戻し始めている。

「まだお分かりにならないんですか？ 私は奴隷商人などではありませんよ、バリオス將軍」

そう話すアルベルトはいつにもまして愉快そうだ。

「ど、どういうことだっ！」

バリオスの問いにアルベルトはにやりと笑って言う。

「あんたはもう終わりってことさ」

しかしアルベルトの最終宣告にも、やはりバリオスはまだびんと来ていないようだった。フレンの横にへたりこんでいるワトリング伯爵に至っては、混乱を極めアルベルトの顔とバリオスの顔を交互に覗き込んでいる。

「何を言っているんだ？！ お前は一体誰なんだ！」

「これはこれは、自己紹介が遅くなりましたな。俺は帝国軍雑務隊隊長のアルベルトという者だ。さあ、ワトリング伯爵、クーデターを企んだこのバリオスを將軍から罷免してください！」

アルベルトの指示を受け、ワトリング伯爵は訳も解っていないまま叫んだ。

「バ、バリオス！ き、貴様を將軍からひ、罷免する！！」

「よろしいでしょう」

アルベルトが満足そうに頷く。

「ふん！ 今更將軍の地などどうでもよいわ！ 殺したければ殺せばいい！ しかしな、この私を殺したらどうなるか、お前も馬鹿ではないなら解っているはずだ！」

バリオスに少しばかりもとの威勢の良さが戻ったことを、フレンは不思議に思った。

「それは外の兵の事を言っているのかな？」

しかしアルベルトの余裕もなくなる様子を見せない。

「そうだ！！ 外の兵にはこう言うておる。もし私が殺された場合は即座に城に一気に攻め込みクーデターを完了させ現副將軍を將軍とし、領を王国に渡し褒美を受け取るようにとな！」

確かにバリオスの言う通り、彼を捕まえたところで外の兵士たちの臨戦態勢を解除しなければ意味がない。

しかしそこでフレンの頭にある一つの解決策が浮かんだ。

「あ、そうか、ジェネにバリオスの変装させて武装解除せよって命令すればいいんだな」

フレンはそう考えてるんだろ、とアルベルトに向かってそういつ

た。が、すぐにその案はそのアルベルトによって否定される。

「いや、そういう訳にもいかない。このクーデターは言わば兵たちの総意でもあるんだ。まあバリオスという切っ掛けがなければ起こらなかった事であろうがな。いまさらバリオス自身がクーデター止めようたってそうそう簡単に従うような状況じゃないんだよ。しかもこれだけ緻密に計画を立て、祖国を裏切るほどの情熱をクーデターに傾けたバリオスが急に止めようって指示したら怪しさ爆発だろ？」

「……確かに」

確かにアルベルトの言う通りであった。事態はそれほど簡単ではないのだ。

「はっはっは！ その通りだ。変装だかなんだか知らんが、この五千を超える兵たちのこの反逆の波はもう誰にも止められん！！」

「だからあ、んなこともないんだって。バリオスさんよ」調子づくバリオスにアルベルトが釘を指すように言った。「まだ解らないんだったら、そのバルコニーから外見てみるよ」

「なんだと？」

バリオスはアルベルトに指差されたバルコニーの方へとたたと歩いていく。

それに続きアルベルトもへらへらと外に出て行くので、フレンもとりあえずついていく。

「なにもないではないか！ 見る！ 我が軍は今にもこの城に火をも放つ勢いだぞ！！」

広いバルコニーから身を乗り出したバリオスが得意げにそう叫ぶ。後から追いついたフレンも外の様子を伺う。

バルコニーは城の北側にあった。バリオスに習い手すりに身をかける。城の北側が一望できた。城壁の外は東の端が市街地でそれ以外は堀と空き地であったが、完全にバリオスの軍によって城は包囲されていた。城壁の上にはワトリング側の兵士たちがぼつぼつと居て、混乱のなかしつかりと弓を握りしめ外を取り囲む軍に睨みを利かせていた。

たしかにバリオスの言う通り、このままこの軍に攻め込まればただ事では済まない。いつそのことワトリング側の兵士たちが潔く降伏でもしてくれば良いものだが、これは攻城戦だ。兵の数では圧倒的にバリオスの軍が勝っているが、戦力的には近衛兵が諦めてしまふほどの差異はない。

フレンは一体この状態にどうやって片をつけるのか、とそんな目でアルベルトを見た。するとアルベルトはそれを察したように、わざとらしく城の西側を指差しながら芝居がかった口調で話し始めた。

「おやおや、あれはなにかな？」

「な、なにがだ」

「ほら、あれだよ。あの西方に見える人だかりはなんだろうね」

フレンも慌ててアルベルトの指差すほうを注視する。確かに西方遠くになにか見える。

「あ、あれは……」

「んー？ あれはもしかしたら、ひょっとして王国軍じゃないかな？」

アルベルトの笑みは一層大きくなっていった。

目を凝らしてみると、確かにアルベルトの言う通り、どこか

の国の軍隊が行軍しているように見える。

「そんな馬鹿な!!!」

バリオスが叫ぶ。

と、その時フレンたちが入ってきた螺旋階段側の扉が勢い良く開いて、フレンとバリオスが先ほど置いてきた十一人のうちの一人、バリオスの兵が息絶え絶えに転がり込んできた。かなり酷い傷を負っているのか、足を引き摺り手は血の滴る腹を押さえている。このバリオスの兵は、部屋の中の状況が自分の予想したものとあまりに違っていたのかしばらく固まっていたが、しばらくすると我に返ったように報告を始めた。

「か、閣下！　バリオス閣下!!!　大変です！　王国軍が、王国軍が攻め込んできます、もうクーデターどころではありません!!!　兵士たちは既に王国軍に対抗するために城から離れようとしています!!!」

フレンはもう一度外のバリオスの軍を見た。確かにさっきまで微動だにしなかった隊列が、だんだんと崩れ始めている。当然の帰結だ。兵士たちは、クーデターより、報酬より、自分たちの妻や、息子や、家の方が大事なのだ。

「これは……ま、まさか王国が裏切ったという事なのか!!!　いや、そんなことあるものか！　契約を記したバウムガルデン王の署名入りの証書だってあるんだ!!!」

「その証書とやらはこれのことかな？」

バリオスの叫びに答えるようにアルベルトが懐から一枚の羊皮紙を取り出した。

「……………なっ?! なんて貴様がそれを……………」
「そりゃなんでかって言われれば、俺の部下の大怪盗がお前の館からこれを盗み出して、それから俺の部下の変装の名人がお前自身に化けてわざわざ護衛間で付けて王国にこの証書を持って赴き、この契約をなかつた事にしてそれからそいつと大怪盗が二人で俺をお前の館の牢から出してくれたから、かな」

フレンが事情を完全に理解し終える前にバリオスはその場に膝から崩れ去った。怪我が酷いのか、先ほどバリオスに報告をしに来た兵はずっと部屋の片隅に座り込んで動く様子すら見せない。

「そんな……………ばかなことが……………」

「あるんだよね、これが」

アルベルトは相変わらず愉快そうである。

「はは、もう終わりだ……………そうだ、貴様もいつしよだ。この街は王国に滅ぼされてなくなるのだ」

バリオスが頂垂れたままぼそつとつぶやいた。

確かにその通りである。先ほどからフレンの視線の先にある王国軍はその大きさをどんどん増している。完全にこの街に攻め入る様子だった。

「いや、そうはならないね」

バリオスはまた信じられないといった風にアルベルトを見上げた。

「なぜだ?」

言葉がでないバリオスの代わりにフレンが聞いてやる。

「なぜってそりゃ俺が天才だからさ」

「いやそうじゃなくって」

「俺が天才だから、あの王国軍は実は帝国軍なのさ」

言っている意味が分からない、とフレンは一瞬自分の頭の出来を疑った。アルベルトはそれを読み取ったのか、解説を付け加えた。

「あの軍隊はこのスピサレッタの隣のルルアで演習をしていた帝国軍の新人たちの変装だ」

「……へんそう？」

「そうだ」

フレンはスピサレッタに到着する前に、意識を失ったジリ族の少年を届けた帝国の旅団の事を思い起こした。確かにルルアに軍事演習に行くとかなんとか、言っていた気もする。

よくそんなこと思いつくもんだ、とフレンは黙ったまま感心した。バリオスは座り込んだまま放心している。

部屋の中の面々は、いまだ状況を理解していなかったが、なんとなく事態が収束したことは感じたようだった。

「ま、一件落着いてよかった」

アルベルトはそう言って、外の兵たちの様子を眺めながら少年のような笑顔を浮かべた。

第一節 二つの歓迎

向こう側から手を振りながら、満面の笑みでこちらへやってくるのは恐らくクララだろう。その横はロロと、ジェネか。

三人の後方には遠慮しているのか俯き加減の帝国軍の軍服を来た若者が見える。

「フレン、いままでどこにいたの？」

久しぶりに雑務隊五人が集合したのはスピサレッタの西、城壁の外にある平地であった。

「……城の中で暴れ回ってた」

クララの質問に、思いついたまま答える。

「ほんと？　すごいねー。怪我してない？」

「してない。クララこそどこに行ってたんだよ」

「私はね、ルルアまでバルタサル旅団さん呼びに行ってたんだよ。遠かったんだから！」

フレンは、頑張ったんだから、と胸を張るクララをそうかそうかと適当に流す。

クララの話によると、アルベルトの指示書に従ってクララはルルアで演習をしている帝国軍新人の寄せ集め旅団の所まで馬で駆け、ジェネとロロが協力して王国から運ばせた二千分人の王国軍の軍服を着せてひっそりとスピサレッタの西へ移動させたらしい。

そう考えると、アルベルトがいつか言っていた通り、全てアルベルトの計画通りに事が運んだと言える。

「ア、アルベルト隊長！ ご報告があります！」

と、ずっと機を伺っていたのだろうか、突然後ろにいた軍服の男が上ずった声で叫びだした。

「わかったから静かにしろ」

アルベルトが宥める。

「申し訳ありません！ バルタサル旅団長からの通達です！ アルベルト隊長からお預かりしたジリ族の少年が目覚めました。帝都アルダナからジリ族の使者の方と一緒にこの街の宿屋でお待ちです。是非、お礼が言いたいと……」

アルベルトはしばらく考えた後、面倒くさそうに、すぐに向かうと返事をした。

「ありがとうございます！ 自分はっ！ これで失礼します！！」

再び元氣よく叫んだ名もなき伝達係は、そのまま街の方へと走り去っていった。

「まあ俺たちもとりあえず街の宿へ帰らなきゃいけないし、まずはそのジリ族の大使のところに行くか」

アルベルトがそう言って街の方へ向かって歩き出す。

「それにしても、あの城の周りの騒ぎは何だったの？」

クララがフレンに尋ねてくる。どうやら未だにこのスピサレットで何が起こっていたか分かっていないらしい。フレンは小さくため息をついた後、街につくまでの間に事の起こりから全てを簡単に話してやった。

「しかし自分の取り分を増やすために部下を殺し合わせるとは、とんでもない男ね、そのバリオスって將軍」

フレンの説明をクララの後ろで聞いていたロロが口を挟んでくる。

「クーデターを起こすところまでは、なんとなく理解できたけどな」

フレンが振り返り言う。

しかしながらロロの言う通り、フレンも最終的なバリオスの考えには全く同意できなかった。金の魅力というものに触れることなく育ってきたフレンにとっては金の為に他人の命を売るという行動は完全に理解の及ばぬところであったのだ。

「悪いやつだったんだね」

クララに分かったのはそれだけらしい。懸命に口を尖らせている。

「おい、ここだぞ」

街の少し高級な宿に入っていくアルベルトを見て、ジエネがフレんたちに知らせる。どうやらジリ族の少年と大使はこの宿の一室で待っているらしい。

雑務隊が宿泊していた宿とは違い、きちんと開け閉めできる扉をくぐるとちゃんとしたフロントが設置されていて、受付の者がアルベルトに用件を伺っていた。

「アルベルト様ですね。ケサーリ様から伺っております。こちらへどうぞ」

受付の落ち着いた物腰の男はそう言ってアルベルトたちを二階へと誘導した。

古くはあるが、丁寧に掃除された階段を上り二階へあがると廊下の両脇に扉が五つずつあった。廊下の再奥は出窓になっており、花瓶に飾られた大きな花びらの向こう側から真っ赤な夕日が差し込んでいる。

「このお部屋でございます、どうぞ」

受付の者はそのうちの扉の一つをノックしたのち開けて、雑務隊全員を部屋に入れ終わると一礼をして立ち去った。

「これハこれハ、よくおこしいただきました」

背の高いひよろつとした中年の男性が、五人を迎え入れた。言葉は少し片言であるものの、十分に聞き取れるほど流暢だ。

彼が来ている衣服は、少年の着ている動物の毛皮でできたふさふさな物とは違い、ほぼフレンたちのものと同じようなものであった。

「お招き頂きありがとうございます」

そう言ってアルベルトは深々と一礼した。ジエネやロロもそうするので、フレンはそうするのがここでは礼儀なのだろうとクララの頭を掴み一緒に礼をする。

少し色黒のこの高身長男性が恐らくジリ族の大使なのであろうと、フレンは推測した。その奥に行儀よく気をつけているのは、

紛れもなくフレンたちが助けたあの少年である。

大使は少し注意するようなきつめの口調で少年に三言ぐらいの言葉を喋ったがどうやらジリ族の言葉らしく何を喋っているのかフレンには全く判らなかった。

「アリ……ガ、トゴザ、マシタ」

そういつて少年は頭を下げた。どうやら“ありがとう”の一語だけを教えられたらしく、少年はそれ以降、一言も喋らなかった。

「ワがぶぞくの子をたすけていただき、ほんとうニありがとうございまして。このとおり、この子、ダルコモかんしゃしております」

再び大使が話始める。

アルベルト以外の四人は完全に対話係をアルベルトと決めつけて、喋る気はない。

「いえいえ、たまたま通りかかったついでに助けたまでですから。お気になさらずに」

大使に促され、部屋の奥にあるソファに五人とも腰掛ける。

ソファは低いテーブルを囲むように三つ置かれており、それぞれに大使と少年、クララとフレンとジェネ、そしてアルベルトとロロというふうに着席した。

「それデ、ぜひアルベルトさんにわたしたちがすむ“どつくつムラ”にきていただき、かんげいのうたげをひらかせていただきたいのでス」

「そんな、大それた……本当にたまたま助けただけですから、そのような歓迎など……」

大使の申し出に戸惑うアルベルトが、ここ数日間の芝居があったものではなく心底そう思っているような素の表情をしていたのが、フレンには意外だった。

クララは話の通じないダルコと呼ばれた少年と遊んでいた。なにやら少年の腹をつついていているが、意味は解らない。しかし二人ともかなり楽しそうである。

「そういうわけにはいきません。ジリぞくのおきてがあります。いのちをたすけてもらうとイウこと八、ジリぞくではそのゴのじんせいをその人にあげることト、おなじなのでス」

話を横で聞いたところによると、どうやらジリ族には掟があり命を助けてもらった人に人生を捧げなければならないということらしい。しかしアルベルトが少年の人生を貰い受けたところで仕方がないので、今回は部族をあげて盛大な宴を開くということ代わりとしてくれ、という申し出らしい。

なんとも義理堅い部族だ、とフレンはクララと遊ぶ少年をまじまじと見ながら思う。

「うーん……解りました。ジリ族の大使の申し出だ、無碍にすることもできまい」

アルベルトは最終的にそう言って、大使の提案を受け入れた。

「ありがとうございます！ それではさっそくあしたのあさにここをデマシヨウ。どづくつムラまではいちにちあればつきます」

「いいでしよ」

と、快諾を続けるアルベルトに口口が口を挟む。

「あら、明日の晩はワトリング伯爵の城で、クーデターを納めたお礼の晩餐会が行われるんじゃないか？ そっちはいいのかしら」

「いいだろ、べつに。ワトリング伯なんて偉いだけのただのオヤジだ。話したって楽しくもなんともないさ。まあ豪華な食事を逃すのだけは惜しいがな」

アルベルトの“豪華な食事”という単語にクララの耳が反応するが、前後の会話を全く聞いていないため話の流れは理解できていないようだった。

フレンはこのアルベルトの判断を、また少し意外に思った。根拠はないが、なんとなくアルベルトのことを権力志向だと思い込んでいたからだ。ワトリング伯爵ぐらい有力な貴族と仲良くなれば、自分の軍での昇格もあり得そうなものだが、アルベルトはそうはしないらしい。

「俺は豪華な食事のほうがいいぞ。あんな重たくて暑苦しい衣装着せられて、気持ち悪い顔の護衛を何人も引き連れて敵国まで乗り込んだんだ、それぐらいの褒美があつていいだろ」

久しぶりに長く喋ったかと思えば、ジエネの口から出てくる言葉は一句違わず文句だった。たしかにフレンの知らないところで、ジエネも口口もクララもかなり苦労していたらしい。

「まあそう言うな。お前を敵国にやったのも危害を加えられない確信があつたからだ。それにジリ族の歓迎なんてそうそう受けれるものじゃないぞ」

不満そうな表情を隠そうともしないジエネをアルベルトが宥める。

「じゃあお前だけ行けよ。俺はここで伯爵の歓迎を受けるから」

「あら、そんなことが許されるのかしら。じゃあ私もそうしたいわ」

「ご、豪華な食事が出る方に行きます、私」

皆が好き勝手に発言しはじめるのをアルベルトが半笑いで制する。

「あほか。全員でジリ族の村に行く。隊長命令だ」

その後いくらか大使と世間話をしてからフレンたちは自分たちの宿へ戻ることにした。

クララと遊んで緊張が解れたのか、ジリ族の少年は宿の外まで見送りに出てきてくれ、姿が見えなくなるまで満面の笑みで手を振ってくれた。

フレンは生まれて初めて小さな子供を可愛いものだと感じ、また同時に自分がそんな事を想う年頃になっていたことに気づき、妙な気分になった。

「じゃあ、今日は解散！ 明日早朝にまた集合、のちジリ族の村へ行くこととする」

アルベルトのそんな号令で雑務隊は一時解散した。

フレンは部屋に帰り、ここ数日の出来事を反芻しながら深い眠りについた。

翌日、フレンたちは予定通りジリ族の大使と少年に連れられ馬を駆り、少年を助けた山の麓の場所まで来ていた。

例の熊の怪物の亡がらは、野生の動物たちに食い散らかされ見るも無惨な姿ではあったが、まだそこにあった。大使と少年はその横を通り過ぎるとき、一度を馬を降りなぜか一礼をしてまた馬に乗った。

アルベルトが、なぜこの獣の亡がらに礼をするのか聞いたところ、彼らジリ族はこのような極まれに現れる巨大な獣をダルランと呼び、敬う対象として扱っていると説明を受けた。

「ダルランを見るのはワたシもじつははじめてです。しかし、こんなにおおきなものにおそワれテ、たすかったなんてダルコはほんとうにうんがいい」

大使のケサーリはそう言いながら後ろに流れていくダルランの死体をまじまじと見ていた。

どうやら彼の口ぶりから予想するに、少年は気絶していた為フレンが謎の力でこのダルランとやらを倒したことに気づいていないらしく、ジリ族の二人はともに運良くダルランが崖から落ちて死んだ、と思っっているらしかった。

フレンは別に自慢するつもりもなかったが、一応どうすべきかアルベルトの方を見ると、アルベルトから黙っていると目で合図を受けて、結局二人にはそのままそう思ってもらうことにした。

「さあ、ここから山にはいります。ゆるやかですが、のぼりがつづきます。みなさんだいじょうブですか？」

大使の問いかけに、乗馬初心者の三人は顔を見合わず。が、アル

ベルトの大丈夫でしょう、という声で結局なんの対策も施されぬまま全員馬で山を登ることになった。

特にクララは馬上でバランスを取るのに苦勞をしていたが、大した問題もなくごつごつした岩肌の重なる山道を登っていくと、ぽつぽつと緑が見え始めいつしか七人は森の中へと入っていた。

辛うじて認識できるくらいの獣道を進み、登り、森の部分と岩肌
がむき出しの部分とを交互に通り返り過ぎていくと、やっとジリ族の迎
えの者がいる場所までたどり着いた。

「ヒルマカ・ルマカ」

ダルコ少年と同じような毛皮の衣服で身を包んだ若い女性が、なにやらこちらに向かって言ってきた。恐らくはジリ族の挨拶なのだろうとフレンは思い、返事をするように軽く会釈をした。

「ごくろうさままでシタ、ここからスこしくだれば“どうくつムラ”
のいりぐちです」

大使の案内に皆頷き、言われた通りに道を下る。

すると、家一軒ほどもあるだろうが、大きな口を広げた洞窟の入り口にたどりついた。見るからに巨大で、中は点々と設置された松明の明かりで照らされているが奥まで見渡せないほど大きい。

洞窟の向かいは開けており、向かい下にある草原が一面見渡せる。ジリ族の天敵であるベンギーギ族が支配する土地だ。

肺を緑の匂い一杯で満たし、見渡す限り何も無い草原を眺めてフレンは清々しい気分になった。

「へえ！ ジリ族ってのはこんなところに住んでるのか」

「そうです。さあなかへ」

アルベルトの感心ぶりに、大使はかなり嬉しそうな表情を見せた。五人は馬を降り、大勢のジリ族の人々に案内されるままほの暗い洞窟の中へと足を踏み入れた。

流石にかなりの人数が住んでいるだけはあるが、中の広さはフレンの想像を遥かに超えるものだった。

入り口から見えた洞窟はいわゆる玄関に過ぎなかったらしく、その奥にある鉄と石で作られた巨大な扉をくぐると、その先には信じられないくらい広い空間が広がっていた。天井は限りなく高く、先に続く空間には簡素な家や商店が立ち並んでいる。フレンは街にすっぽり石の屋根を被せたようだ、とすぐに思った。

「すうい……」

初めてみる景色に思わず声が出てしまう。世界にはこんな場所もあるのか、と胸がときどきした。

「このどうくつにはおよそせんごひゃくにんほどくらシています」

フレンたちを誘導しながら、大使が解説する。

「世の中にはまだまだ知らないことがあるもんだな」

とアルベルトは興味津々といった顔で通り過ぎ行く村のいろいろな物に目を奪われている。

「ん？ なーに？」

後ろを見るとダルコ少年がクララの手を引っ張って、先へと案内しようとしている。どうやら歓迎の様子をいち早く見せたいらしい。

「さ、こちらです。もうよういはずんでいます」

大使もダルコ少年に続いて雑務隊を案内する。それに従い階段をいくつかおり、少し狭い通路を潜って進むと、また開けた場所に出た。

フレンたちがそこへたどり着くと共に、大きな歓声があがる。待ち構えていたのは凡そ五十人ほどのジリ族の人々であった。中心にある火を取り囲むように、いろいろな料理や酒をそれぞれ手に持ってジリ族の人々がフレンたちを歓迎する。

「これはすごい！」

アルベルトが目を見開く。フレンも同感だ、と大きく頷いた。

大使が、歓迎の大衆に向けて大きな声でなにやら短い演説をぶつた。どうやらフレンたち雑務隊の紹介らしい。

「さア！ たベテのんデたのしんデくだサイ！」

ケサーリ大使のそんな号令とともに盛大な宴が始まった。

どう振る舞ってよいやら迷っているフレンに、ジリ族の面々は老いも若きも、全く通じないにも関わらずジリ族の言葉で矢継ぎ早に話かけてくる。

ある者は料理を勧め、ある者は酒を勧め、皆して戸惑うフレンたちに話しかけ、そして通じていないにも関わらず笑っていた。

フレンはあるところで勧められた酒を飲むべきか迷ったが、これも経験だと思い切って少し口に含んだ。

喉が焼けるような感覚を覚え、盛大に咳き込む。顔を上げるとジリ族の若い男二人がけらけらと笑っている。

フレンはそれを見て同じように笑いながら“めでたいことがあつたら酒を飲む、どこの国でもそれは同じ”というガ口の言葉を頭の

片隅で思い出していた。

「ジリ族ってもっと気難しい部族だと思ってたわ！」

部族の女に顔をなで回されながら、ロロがフレンに向かって言った。

「どうやらジリ族からすればロロのような顔つきが珍しいようだ。」

しかし、宴が始まって間もない頃、突然広場にももの凄い形相で飛び込んできた一人の中年男性によって、状況は一変することとなってしまふ。

烈火のような剣幕でなにやら男が叫ぶと、広場にいたジリ族全てが一瞬にして黙り場が静まり返った。

その後すぐ、爆発したような騒ぎになる。

男どもはいきなり血気盛んな表情になり広場を一気に飛び出していく。

一体どうしたんだ、と雑務隊の五人が顔を見合わせていると、ケサーリ大使が一言、フレンたちにわかる言葉でつぶやいた。

「ベンギーギぞくが……せめて、きまし夕」

第二節 閉じ籠る

フレンたち雑務隊も興奮しきったジリ族の男たちに続いて、全速力で洞窟の入り口を目指した。

男たちは入り口近くにいる女子供たちを奥へ奥へと誘導しながら、手にそれぞれ武器に鬼の形相で外へと向かった。

フレンたちの前には二十人ほどのジリ族の男たちが居た。ベンギーギ族に対抗するために日々訓練を積んでいる戦闘員たちである。入り口の扉を抜ける。フレンの目に西日が突き刺さる。

「外に出るな!!!」

フレンの横で、アルベルトがいきなり叫んだ。

想像するにフレンたちの前に行くジリ族の男たちを制止する意味のものだったのだろうが、言葉の違いから全く意図が通じなかった。二十人の男たちが一斉に洞窟から飛び出していくとほぼ同時に、向こう側に広がる草原から数えきれないほどの矢が発射される。

フレンはあと一步の所でアルベルトの掛け声によって立ち止まった。

草原には無数の兵士たちが奇麗に隊列を成している。ぱっと見たところ目算で一万人はいる。

ほんの一瞬の後、草原から発射された万本の矢が洞窟入り口に降り注いだ。

まるで勢いの強い夕立の様な凄まじい矢の雨は、洞窟を勢い良く飛び出していった二十人のジリ族の男たちの体を隙間無く貫いた。誰が見ても瞬時に生き残った者は居ないと解るほどの矢嵐であった。

フレンの足下にも矢が刺さっていく。周りの木々には無数の矢が

刺さりまるで針鼠か豪猪であるかの様相だ。

「おい！ 止まれ！！」

アルベルトが冷静に自分の後ろから、洞窟を出て行こうと勢い良く走ってきていたジリ族の男たちを自らの体を使って停止させている。

押し寄せる第二弾のジリ族の男たちの波をなんとか雑務隊全員で壁を作って止める。

しかしその後ろから突入してくる何も知らない者がぱらぱらと制止をいかいくぐって洞窟を飛び出していく。

そして見計らったように再び降る、矢の雨。

外へ出て行った者たちを一人残らず殺す死の雨は、最終的に二十五人のジリ族の男の体を貫いた。

「くそっ！ なんなんだ！！」

珍しくもジエネが声を荒げる。

「皆下がるんだ！！ とりあえず中へ避難しろ！！」

フレンが目の前光景に愕然としているその横で、アルベルトは毅然とジリ族を煽動する。追いついたカサーリ大使がアルベルトの言葉を訳して大声で叫んでいる。

ふと横を見るとクララが目には涙を溜めて腕に抱きついていてる。

フレンの左腕を確りと握るその手は、まるで極寒の中に裸で立たされているかのようにがくがくと震えている。

「行こう、クララ」

ここは危ないとクララに告げ、呆然としている彼女を無理矢理半ば抱きかかえるように洞窟の奥へ移動する。

横にクララが居てくれてよかった、とフレンは入り口の扉を潜りながら思う。

もし隣に彼女が居なければ、フレンはこの凄惨な光景にさぞ取り乱していたことだろう。クララが居ることで、しっかりしなければ、と自分をしっかりと保っているのだ。

フレンたちは逃げるように洞窟の奥へと向かった。

突然の事態に、一人として平静を保っていられる者はいなかった。洞窟の中にいる、今まさに亡き者となった男たちの家族は起こった事態をされ大きな混乱に陥った。泣きわめくもの、呆然と崩れ去る者、信じられずに入り口に行こうとして止められるもの。

洞窟は混乱と悲しみと怒りに包まれた。

「今は耐えるしかないな」

雑務隊四人の視線を集めたアルベルトがぼそつと呟いた。

ベンギーギ族の攻撃から一時間が経った。

洞窟の中まで攻めてくる様子はないが、ジリ族たちは入り口を装備を整えた戦闘員たちで見張り、ベンギーギ族をじつと待ち構えて

いる。

「なにか策はないのか」

ジェネがアルベルトにそう言うと、再び伏目がちになっていた皆の瞳にわずかな希望が宿る、が。

「うーん、難しいな。現状では立て籠るのが一番だろう。洞窟を一歩出たとたんに蜂の巣にされちゃ、どうしようもない……」

と、頼りのアルベルトですら無策なようであった。再び落ち込む雑務隊。

「……ケサーリ大使、この洞窟にあの入り口以外の逃げ道はないんですか？」

とフレンがとりあえず場の重い空気をどうにかしようと、思いついたことを口にした。

「あることにはあるんですが、そのでぐちはこのさきのいちぐちのましたにあって、そうゲンにでてしまウのです」

逃げ道を抜けたら目の前にベンギーギ族がいるってことか、とフレンはやはり答えを聞いて頂垂れる。

「なんでそんなとこに逃げ道作ったんだよ」

と、悪態をつくのはジェネだ。

「しぜんにできたどうくツですかラ」

大使が申し訳なさそうに弁解する。まあその通りだ、とフレンは思う。意図して設計し造ったわけではない。

「まあさつき訊いたところによると、水と食料の備蓄はかなりあるらしいし、じっくり待ってみよう。焦って行動しても仕方ない」

アルベルトがこれが今後の指針だと、暗い雰囲気の中宣言した。ケサーリ大使も、そうですね、と同意し仲間にそう伝えてきますとと洞窟の奥へと走っていった。

そうしてフレンたちの立て籠り生活が始まった。しかしこの籠り生活が、深刻な長さに渡って続くとは、このときは誰も予想していなかった。

洞窟に立て籠り始めて始めて三日が経った。

雑務隊を含めた洞窟内の面々は、この生活が長引くのではないかと、少しずつ感じ始めていた。

アルベルトの案で今朝早くに洞窟の外へと放り投げられた、布などで人の形に似せて造った等身大の人形は、やはり例外なく全てすぐに飛んできた矢に打たれ蜂の巣となった。

「賢いやり方だ」と、アルベルトは難しい顔で感心したように言っ

ていた。

恐らくベンギー族の狙いは、糧攻めである。こうして矢の雨で、ずっと洞窟の入り口に蓋をしていれば、ベンギー族になんの被害もでないままジリ族は洞窟内で飢え死にするのだ。

フレンはそこまで考えて不思議に思い、ケサーリ大使に今までこのようなことがなかったのか、と訊いた。

しかしその問いに対するケサーリ大使の返答はとても解りやすいもので、このようなことをジリ族は警戒しずっと防いできた、というものだった。

ジリ族の洞窟は当然ながらベンギー族の暮らす草原地帯より高台にある。しかも草原には見渡す限り遮蔽物がないので、ベンギー族が今回のような攻撃を仕掛けようとして洞窟の下に集結しようしたところで、高台にいるジリ族の矢のほうが先に届く距離になるために、洞窟の下には今までベンギー族は近づけなかつたらしい。しかし今回、不運にもフレンたちという珍しく客の姿があつたことで、ジリ族たちの守備に変化が生まれ、その隙をつかれたというわけだ。

フレンは時折クララの様子を見てやつていた。

雑務隊の中でこの状況に一番打たれ弱つていたのは彼女であつた。

「おい、大丈夫か？ 顔色悪いぞ」

「……うん」

クララは松明の明かりすら届かない洞窟の窪みに座っていることが多く、この日もそうであつた。

「お腹減つてんだろ、俺の分も食つて良いぞ」

と、フレンはクララの横に座りながら、先ほど配られたじゃがいもをふかして潰して調味料と混ぜた、なんとも言えない見た目の食

べ物の乗った皿をクララのほうに突き出した。

「うっん、お腹いっぱいだからいいよ」

クララはそう言って、こちらに向かって力なく微笑んだ。無理しているのが手に取るように分かった。

「あんなにいつもガツガツ食べてるくせに、今お腹いっぱいじゃないわけないだろ。嘘ついたら怒るぞ」

そう言って再び皿を押し付ける。クララは少し考えたあと、ありがとう、と言って受け取った。しかし、当たり前だが元気は戻らない。

「……なんか、凄い遠いところまで来ちゃったなあ」

クララが呟く。

「そんな悲しい感じで言うなよ」

フレンは無理して笑ってやった。その無理だっただけでいるのだろうか。

「うっん」

落ち込むのも無理はない。自分だってほとんど同じ気持ちだ、とフレンはクララの様子を見つめながら思う。

正直、誰もが絶望的な状況だと薄々感付き始めていた。

洞窟の入り口には獣すら近寄らないため、二十を超える仲間や家族の死体が、辺り一面に死臭と絶望をまき散らしながら、ゆっくり

と腐り始めていた。

そんななか、冷静で、活力あふれる人間のほうがどうかしているのだ。

「……安心しろ。俺がここから出してやるから」

と、フレンの口を自然について出たのは、自分でも意外な言葉であった。

「うん、約束ね」

自ら勝手に口走っておきながら、気恥ずかしくて半ば後悔しているフレンを助けるように、クララはそう微笑みながら言った。

しかしながら、この後も事態が良い方向へ向かうことは、無かった。

洞窟に立てもこもって一週間が経ったころには、食料の備蓄をどのようにして使うかという問題が洞窟内の主な話題となっていた。

アルベルトたちの計算によると、一日の配給を減らして我慢に我慢を重ねたぎりぎりの生活を送っても、もってあと十日という結論だった。

たまに洞窟の外に出す人形も、未だ例外無く矢に打ち抜かれていた。

曇った真夜中の真っ暗闇の中でも、入り口付近に少しでも動きがあればベンギーギ族の矢の嵐は問答無用で洞窟の入り口に降り注いだ。

そんな中、フレンはクララにいつもの窪みに呼び出された。

「なんだ、急に？」

俯き加減のクララの顔を無理矢理覗き込む。

少し意外なことに、今までで一番深刻そうな表情をしている。

「……フレン」

今にも泣き出しそうな声でクララが小さく呟く。

「なんだ？」

気を使ってこちらは平静を装ってやる。が、実際は自分の鼓動が早くなつていくのを感じた。

「……全部、話す」

クララは短く、一言だけ口にした。

「全部？」

驚いて聞き直してしまう。

クララが何のことを言わんとしているか、もちろんフレンには分かっていた。

今までうやむやにされてきた、この“獣の眼”のこと、そして未だフレンには使うことのできない“魔法”のことである。フレンはこれまで、結局クララに事の真相を訊く事を控えてきた。なぜなら、他でもない彼女自身が話そうとしなかったからである。

無理に訊く事でもないと、フレンは思っていた。

そう、訊かなくても誰も困らないだろう、と。

しかし興味が無い訳ではもちろんなかった。知りたくない訳でもなかった。

自分の出生に関することだ。それが当然の感情というものだろう。フレンはクララの傍に居て、いつか話してくれるときを、待っていたのだ。

そしてその“時”は意外な形でやって来た。

「……こうすることが正しいのか、私にも解らない……でも、やっぱりフレンには聞いてほしいの。それに、この状況をどうにかするにはこうするしか……」

クララが顔を上げてフレンを見つめる。

その眼はいつか見た、決意に溢れたものだった。

「俺もクララが良いと言うなら、聞きたい」

「うん……長くなるけど、聞いてほしい。私の事、私の住んでいた“世界”のこと……それから、フレンのことを」

そうしてクララは今まで喋らなかった、彼女の持つ“事情”について、ぽつりぽつりと話始めた。

しかしそれは、その実態はフレンの予想と理解を遙かに超える、尋常ならざるものであった。

第三節 クララの物語<1>

「まず最初に謝らせて……フレン」

クララはそう良い立ち上がり深く深く頭を下げた。

「おいおい、なんだよ」

そんな突然の詫びにフレンは戸惑う。

「いままで黙っててごめんなさい!」

「い、いいよ! そんな謝らなくて……とりあえず、その先を話してくれよ」

フレンの再三の説得で、クララはやっとのことで頭を上げた。

「……うん……じゃあ、続きを話すね。フレン、私たちが“魔法使い”だつて言ったの、覚えてる?」

忘れるわけじゃないじゃないか、とフレンが言うと、クララはそうだよねと少し笑って話を続けた。

「そうだから、私たちは獣の眼を持つって言ったよね。まあそれは本当なんだけど、私たちは一族って言うより……うーん、なんて言ったらいいかな……私とフレンは同じ世界の人間なの、多分」

「……世界?」

あまりにぶつ飛んだ単語に、思わず意図しない声がフレンの口から漏れる。

「うん。タラカっていう魔法使いが住む世界から、私は来たの」

「……違う世界って、どういうことだ？ どうやって来た？」

「うー、難しいこと聞くねフレンも。私たちが住む世界では、こっちの世界のことを“イシルド”と呼んでいるの。まあ、私もこっちに来るまではおとぎ話の一つとしか思ってたんだけどね」

「おとぎ話？」

「うん。タラカの子供は全員聞かされる話だよ。昔々、タラカとイシルド、この二つの世界は重なり合っていました……」

昔々、タラカとイシルド、この二つの世界は重なり合っていました

イシルドは物質の世界

魔法こそないが大地がある

海や空があり、木々があり人がいる

タラカは精神の世界

イシルドと重なり合い、イシルドの大地を借りる事で

タラカにも人が生まれ、それらは魔法使いとなった

タラカの王はその絶大な力で自らの世界を治めていました

民である、多くの魔法使いたちからそれはそれは愛された王でした
その世界と重なりあっていた世界イシルドの民は魔法を使えませんでした

しかし、タラカの王の計らいによって、タラカの民とイシルドの民は仲良く暮らしていました

タラカの王は言いました

「イスルドがあるからこそ私たちが生きていけるのだ、と
タラカの民のほとんどは、王の言っていることの意味がわかりませ
んでしたが

「イスルドの民を敬い、仲良く暮らしていくことが正しい事である
ということにはわかっていました

そのため、永らくこの二つの世界の関係は非常に良いものでした

しかしながら、あるとき大変なことが起こりました

「イスルドの民たちが突然凶暴になったのです

そしてとうとうタラカの王は決断しました

「タラカの王はその偉大なる魔法で大地を少しだけ切り取り

そしてそれを以て、タラカをイスルドから分け離したのです

「……という物語をタラカの人間は小さいときから聞かされてきた
の」

「うーん」

やはりいまいちフレンには信じがたい話だった。

「ま、おとぎ話だし、どっからどこまでか本当かなんて王宮の歴史
家たちしか知らないんだけどね」

「王宮の歴史家がどんなものかもフレンには解らなかったが、とり
あえずある程度不確かなものであるということだけは伝わった。」

「……それで？」

「最初から話すね。私、あんまり頭が良くないし、順を追ってじゃないと説明できないから……」

クララはフレンの催促を流して、ゆっくりと一つずつ説明を始めた。

そう、一番最初から。

「お父様！ 待ってくださいー！」

クララがイシルドを訪れる役半日前。

彼女は王宮へと向かう父、王宮特別筆頭魔法騎士であり、なおかつ王宮魔法騎士団の団長であるリベルトを必死で追いかけていた。

「早く来い、クララ」

リベルトは振り返りもせず厳しい口調で言い、顎に蓄えた威厳のある口ひげをゆっくりと撫でた。

二人はこの世界唯一の王、アルトウーロ王が治める王宮へと向かう途中であった。

周りはまだ居住区で、いろいろな形の家が立ち並んでいるのだが、

先日あったある“争い”の所為でところどころ破損している箇所が見られたり、大破している民家も少なからず目に入る。奇麗に整備されていたはずの石畳もかなりの部分が捲れ上がり壊されている。

「はぁ……追いついた……」

「しつかりしろ。お前は今日から王宮魔法騎士団の一員になるのだぞ。私の部下として」

リベルトが追いついて来たクララを窘める。

ほんの数時間前、クララは父リベルトの推薦により騎士団に入団を許されたばかりであった。

病弱な母は十歳としての離れた弟を生むと、間もなく息を引き取った。

リベルトが王宮特別筆頭魔法騎士という重役であるため、家のことは全てクララが切り盛りした。全くもって、“しつかり者”というにはほど遠い性格のクララであったが、それでも幼くして母を亡くした弟の為に気丈にも母の代わりを務めようと振る舞っていた。

「はい！」

そんなクララに騎士団入団を勧めたのも、他ならぬ父であった。

別に幼いころから父リベルトに修練を積まれて生活して来たわけではない。

どちらかと言えばリベルトは職務で多忙な為、家を空けていることがほとんどであった。が、リベルトが騎士団入団を勧めのには理由があった。

「良いか、クララ。今、この混沌とした時代で騎士団の一員として生きる私は、いつ死んでしまつかかわらん」

相変わらず早足で歩きながら、リベルトが諭すようにクララに話しかける。

「はい」

死ぬ、と言われて少し悲しくなるクララ。

「しかし、だからと言ってこの長い戦いから逃げ出すわけにはいかん。私たちには守るべきものがある。アシエルも、お前の祖母や祖父も、隣のアラルコスさんだってそうだ」

アシエルというのはクララの弟の名前である。

「……はい」

「私が死ねば、アシエルを守るのは姉であるお前の役目だ、クララ」

重苦しい責務に、クララは憂鬱になった。

大した魔法を使えるわけでもない、剣の腕がたつわけでもない。ただ父親が騎士団長という理由だけで、全ての男の子が憧れると言っても過言ではない王宮魔法騎士団に入団するなんて、考えただけでも気分が重くなる。

しかしながら、父リベルトの言う事も完全に納得がいく。

この混乱を極める世で、自分には守っていかなくてはいけない大切な人がいるのだ、と。

「わかっています、お父様」

「はは、少し神妙に話をしすぎたな。すまん」

空気が淀んでしまったのを感じたのか、リベルトが不器用そうに無理矢理笑う。

「いえ、そんなことは……」

「安心しろ。娘であるお前には、この私の目の黒いうちは誰にも指一本触れさせん！ 斜向いのエドゥにさえな」

父リベルトが冗談っぽく言うエドゥとは、クララの家の斜向いに住む同年代の男の子である。彼がクララに微笑ましい好意を寄せているのはご近所周知の事実であったが、クララは彼のことをごまかで好きではなかった。

「ありがとうございます」

そんな拙い冗談ではあったが、クララの気持ちは幾分軽くなった。

アルトウーロ王の御前に跪いて数分。

王を自らの眼で見ることが初めてであるクララに対して、驚くべき事に父リベルトは親しげに王と会話している。

と、一通りの世間話が終わると、急に二人の顔が暗くなり神妙な雰囲気ではじめた。

クララにも理由は解る。現在この世界、タラカ全土が陥っているこの惨状についてだ。

「……もう、皆限界を感じておるようだな」

王の年は父の五つ上だと父から聞かされているが、クララにはもう少し年上に見えた。白髪混じりのオールバックに、琥珀色の眼がよく映える。毛皮を贅沢に使った衣を羽織り、年齢を感じさせる男性的な右手には大きな銀色の指輪が嵌められている。

「……残念ながら。あれから凡そ三十年……民は疲弊しきっており
ます……」

「リベルト……私はお前に期待してある。ワドルの首を、いずれ持つてくるとな……」

王の口から発せられた“ワドル”という言葉に王宮中の人間が反応する。

みるみるうちに、怒気が宮中を満たすのがクララには解った。

父リベルトも、王アルトウーロも眉間に深い皺を寄せ、怒りが顔いっぱい広がる。

「はっ！ 必ずやこの騎士団長リベルト、ワドルの首を討取って参りましよう」

「うむ」

そういつてリベルトは今一度王のもと、クララの前方に跪いた。

その後王は悪くなった雰囲気を気遣うように、思い出したように父の後ろに控えているクララのことを話題に出した。

「しかしリベルト、お前の娘がそんなに大きくなっていようとはな。月日の流れが速いことだ」

アルトウーロは王座に座しながら、リベルトに負けじとも劣らない立派な顎ひげを摩った。

「はっ。娘も十八になりましたので、このように騎士団に入団させようかと考えまして……」

「それはいい。こんな世だ、悪くなった騎士団の雰囲気も少しは和らぐことであろう。して、どの役に就かせるのかな？」

どの役に就くか、それはまだ父からも聞いていない、とクララは少しだけ顔を上げて話の流れに注意を向けた。

王宮魔法騎士団は少数精鋭の部隊である。その為、下っ端から团长まで例外無く“役”というものが与えられるのが伝統になっているのだ。

「探知役”に就かせようかと思っております」

「ほう、そうか……前の“探知役”は確か最近引退したのだったな」「左様でございます」

“探知役”という言葉に、クララはほっと胸を撫で下ろした。前線で戦うような役ではないからだ。

「まあ“アレ”の反応は“あの事件以来”無いからな。新人騎士団には適任であろう」

「はっ」
王の言う“アレ”とは、この世界で唯一無二の“とあるもの”のことである。

探知役は、探知役だけが知る事を許される秘伝の魔法を使ってこれのある場所を探することができる。

その“とあるもの”とは、このタラカの王を王たらしめる、無形

の秘宝。

この世界を統べる力そのもの。

唯一無二の絶対的存在。

人々はそれを畏敬の念を込めてこう呼んだ。

アルセオ、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9400v/>

アルセオ・サーガ

2011年10月13日17時49分発行